

で、その何れも他のものなくしては存しないから、従つて只一つの唯一永遠全能の神があるのみである。

故にもし、何物か神的本質から、或はその中に産れるとすれば、それは一つの霊からのみではなく、凡て七つの霊から造られるのである。そして若し或る被造物が―それは神の全本質として存する―一つの本源霊に於て自ら傲ぶり、破壊し、点火すれば、彼は唯一つの霊のみならず凡て七つの霊を点火するのである。夫故此の被造物は、完き神及び凡て彼から造られた物の嫌厭となり、それ等に對して永遠の敵、恥辱に立たなければならぬ。

音、即ちメルキユリウスの起原は第一の、即ち鹹い性質にある。

深義を注意せよ。堅さは音の源泉である。然し彼獨りでは音を産み得ない、彼は只その父であつて、全サルニタがその母である。若しそうでなく堅さのみが音の父であり、又母であるならば堅い石も又音を發しなければならぬ。然るに石は只音の種子或は初めとも云ふ様に、僅かに敲く響がするのみである。調音或は聲は然し、熱から光が産れ、生命の電光が昇る處のその真中の中心に於て、電光の中に昇る。

如何にしてこれが起るかを注意せよ。鹹い性質が苦い性質と摩擦して甘い源水の中から熱が起

れば、熱は甘い源水を電光の様に点火する。この電光は光であつて、熱から苦い性質の方へ行きそこで電光は凡ての力に従つて分れる。

苦い性質に於て凡ての力は分離し、そして苦い性質は光の電光を受けて怖ろしい物にあつたかの様に震へ、その戦慄と恐怖とを以て鹹い性質と堅い性質との中へ入り、そこで形體を捕へられる。苦い性質は今や光を孕み、鹹いと苦いとの中で震へ、その中で動き、そして鹹い性質の中に於て恰も形體の中に於けるが如く捕へられる。

扱霊が動き、そして語らうと欲する時は、堅い性質が自ら開かなければならぬ。何故なれば苦い霊は彼の電光を以てそれを破るから。其の時音が出ていつて、凡ての七つの霊を孕む。此の霊が、中心即ち圏の真中に於て七つの霊の忠言によつて決定された言葉を分別する。

夫故神の七つの霊は被造物に口を造つて、彼等が語り、或は叫ばふとする時に先づ裂く必要がない様にした。又其故凡ての脈膊及び力、或は本源霊が舌へ行つて、響或は音が美妙に穩和に出る様になつてゐる。

此處で真にその意味と秘義とを考へよ。電光が熱の中に昇る時、それを最初に捕へるものは甘い水である。これ其の中に於て電光は輝くようになるからである。扱水が電光を捕へれば、即ち

光の生誕があれば、水は恐怖する。そして水は薄く柔かであるから、全く震へながら避ける。これ熱が光の中から昇るからである。

遂ぎに鹹い性質が―それは全く冷たいが―熱と電光とを捕へる時は、鹹い性質は恰も稻妻に照らされたかの様に恐怖する。何故なれば、熱が光と一所に堅い冷たさの中へはいる時は、全く狂暴な、火と光との色をした電光になるから。此の電光は引き返し、そして甘い水がそれを捕へるそして同じ狂暴を以て昇り、その上昇と恐怖とに於て遂に青い空色と變化し、怖ろしい電光の爲めに震へる。電光は夫自身の中に狂暴性を持つてゐる。それから苦い性質或は苦い靈が成立する此の靈はついで鹹い性質に昇り、彼の狂暴な源を以てその堅さを點火する。そして光或は電光は堅さの中に於て乾き、太陽の輝よりもつと明かに輝く。

然し、それは堅い性質の中に捕へられ、形體的に存在し、永遠にかく輝かなければならない。電光は形體の中に於て狂暴な上昇の様に震へ、それによつて凡ての性質は常に永遠に動搖させられる。火の電光は光の中に於てかく常に震へ、凱戦する、そして堅さは常にそれを保ち、乾かす體である。この堅さの中の動搖が即ち鳴る音である。そして光或は電光は調音をつくり、甘い水はその調音を柔かにし、人々が言葉の辨別に用ゐられる様にする。

此處で苦い性質の生誕を更によく注意せよ。苦い性質の起原は、熱の中に於て生命の電光が鹹い性質の中に昇る時である。即ち、其時火の電光が水と混じて鹹い性質の中へはいる時は、電光の靈は鹹いと堅いととの靈を捕へる、そして兩者は一所になつて烈しい、強い狂暴の源となり、恰も火の激しい暴性の様に荒れ狂ひ引き裂く。私はこれを、かの怖ろしい炎が地に下つて目がくらむ時の雷より外に何物とも比較することが出来ない。此の怖ろしい炎は此等二つの結合である。

拵注意せよ。此の火の靈と鹹い靈とが互に闘ふ時は、鹹い方は嚴しい、堅い、冷たい鹹性を造り、火の方は怖しい、激しい熱性を造る。熱と鹹性との上昇は震動する、狂暴な、怖しい靈を造る。そして此の靈は恰も、神をも引き裂くかの様に荒れ狂ふ。然し、諸君はこれを正しく理解しなければならぬ。

以上は苦い性質の發端である。然し此の狂暴な靈の上昇の中の真中に於て、此の(同じ)靈は甘い水に捕へられ、穏和にされる。そこで彼の狂暴な質は震へる、苦い、青味ある暗黒の様な色に變り、又自身の中に凡ての三つ、即ち火と鹹いと甘いとの性質の様態、特質を保ち、そして此の三つから第四の性質、即ち苦い性質が産れる。

火の性質によつて靈は動搖する、熱いものとなり、鹹い性質によつて強い、堅い、形體的の常

に存在する靈となる。甘い性質によつて彼は穩和となり、暴性は穩和な苦味性と變る。かくて彼は神の七つの靈の源泉の中に存在して常に他の六つを産むことを助ける。

これを正しく理解せよ！。彼は父と母とが彼を産んだ様に、又父と母とを産む。何故なれば、彼は今や形體的に産れた後、鹹い性質と共に常に火を産み、火は光を産む、そして光は電光で、これは又常に凡の本源靈の中に生命を産み、それに依つて靈は生命を得、絶えず一つのもは他のものを産むから。

然し、只一つの靈のみでは他の靈を産むことは出来ない。その二つでも出来ない、否靈の生れるのは凡ての七つの靈の作用である。即ち彼等の六つが常に第七を産み、もしその一つでも無かつたならば他のものも無いのである。

然し、私がこゝに時々靈の生誕について二つ又は三つの性質を取つたのは、これ私自身の薄弱の爲めである。私は私の敗壞した頭腦の中へ凡て此の七つを一度に、その完全なる姿に於て容れる事は出来ないのである。私は凡て七つを非常によく見る事は出来るが、然し、それを思索しやうとすれば、靈は眞中の源泉に昇つて来て、そこで生命の靈が産れる。此の生命の靈はかくて上へのぼり或は下へくだつて、神の七つの靈を凡て一度に一つの思想で理解することが出来ず、只

それを部分的に解するのみである。

各々の靈は他の靈から産れたのではあるが、又自分自身の源を持つてゐる。人間の感知性 (Begrifflichkeit) も又同様である。彼は自分の中に凡ての七つの靈の源泉を持つてはゐるが、然し如何なる源に於て靈が昇らうと、本源靈、その中に於て此の靈が最も強く構成されてゐるその本源靈を、彼は彼の上昇に於て最も強く理解するのである。神的力量の中に於ても靈は一度に同時に凡ての七つの靈を透して昇るのではない。彼が昇る時は彼は凡ての七つを一度に動かさしはするが然し彼は彼の上昇に於て捕へられて彼の美觀を捨てなければならず、凡ての七つに勝ち榮えることは出来ないのである。(「これ心意及び思想の本質である。若しそうでなく、思想が自然の中心を透して凡ての様態を貫くことが出来たならば、彼は自然の束縛から自由であるであらう。」)

人間に於ても同様である。一つの本源靈が現はれ昇る時は、それは他の凡てを動かし、又それ等を見る。何故なれば、此の靈は心臓の中心、そこで光の電光が熱によつて點火するその源泉へ昇つて來、その電光を通して凡ての靈を見るからである。然し、吾々の敗壞した肉體に於て靈の昇るのは恰も稻妻の閃く様である。何故なれば、若し私が電光を―それを私は好く見、又どんなであるかを知つてゐるが―私の肉體に於て理解することが出来、それに依つて私の肉體を照明し

やうとするならば（「電光から至尊の光が出る」）、肉體は最早動物的肉體の様ではなく、神の天使の様に見えるであらうから。

然し聞け、尙暫く待て、そして動物的肉體を蛆虫の食ひ物に遣れ。完き神が敗壞した地球に神の七つの靈を點火しやうとする時、若し汝の地に蒔いたサルニタがその火に堪えないならば、地から離れやうとする汝の本源靈は、再び汝が地に蒔いたサルニタに昇り、その中に榮えて再び肉體となるであらう。然し神の七つの靈の點火された火に價ひするものは、その中に止まり、そして彼の本源靈は地獄の惱みの中に昇るであらう。これを私はその場所に於て明かに證明するであらう。

私は諸君に、全神性の範圍を書き示すことは出来ない。これこの神性は不可測であるからである。然し、神の愛の中にゐる靈にはそれは不可解ではない。彼はそれをよく理解する、然し只部分である。夫故部分部分を順次に取れ、然らば諸君は全體を見るであらう。此の敗壞の生に於ては吾々は斯の如く啓示によるより外、神や此の世界の初め、終りについてよりよく知ることは出来ない。私は切に私の此の惱ましい生息に於て何かより高いものを見、それによつて私の病めるアダムを癒ひたく思ふ。私は全世界を見廻す。然し私は何物も見出すことが出来ない。凡ての物

は病み、跛で、傷つき、其の上、盲で、聾で、啞である。

私は正しい根源と深義とを見出すの希望で、多くの偉い教師の文書を読んだ。然し、私は只半死の靈以外に何物をも發見しなかつた、彼は健康の爲めに苦心してゐるが、しかも彼の非常な病弱の爲めに完全の力を得ることが出来ない。

夫故私は尙産みの苦みにある女の様である。そして完全な營養をさがしてゐるが、只その句の昇るを見出すのみである。それに依つて靈は眞の營養には如何なる力があるかを吟味し、完全な句の中で彼の病を養つてゐる、遂に正しいサマリア人が來て彼の傷を巻き、癒し、彼を永遠の宿所に導くまで。其の時彼も亦完全な味を味ふであらう。

私が此處に意味する處の草、その句によつて私の靈が養はれてゐる處の、此の草を何れの農夫も何れのドクトルも知らない。それは實に何處の庭にも生長するが、然し地の質が悪い爲めに多くの庭に於ては全く悪く、敗滅してゐる。夫故此の認識は世の始め以來最も尊いものであつたが何人も、否此の秘義の子等さへもそれを知らないのである。

たとへ多くの人々にその源が現はれはしたが、然し彼等の傲慢は直ちにそれを壓迫し、凡てを敗壞した。夫故彼等はそれを直ちに彼等の國語に書き記すことを欲しない。彼等はこれをあまり

子供らしいと思つてゐる。むしろもつと深い言葉に表はして世間をして彼等は男々しいと思はせようとする。この爲めに彼等はそれを秘密にし、深い、不思議な名で蔽つて人々の知らない様にする。悪魔の傲慢の病は斯の如く造られてゐるのである。

然し聞け汝愚直なる母よ、汝は凡ての子供等を此の世界に産み、しかも彼等はその傲慢によつて汝を恥ぢ、汝を輕蔑する。然し彼等は汝の産んだ汝の子供に外ならない、かゝる子供等を産む汝愚直なる母よ、聞け、汝の父なる神の七つの靈の中に昇る靈は斯く云ふ、失望する勿れ、視よ我れは汝の權力なり、我れ汝の老年に甘美き飲食を惠まんと。

汝が産み、且つその幼年に於て汝が育てた凡ての汝の子供等は汝を輕蔑し、そして汝の老年に汝を養はうとしない、夫故我れは汝を慰め、汝の高い老年の爲めに、一人の若い子を與へるであらう。彼は汝の家に汝の生きる限り住まむ、汝の傲慢なる子等の凡ての狂亂忿怒に對して、汝を養ひ汝を慰めるであらうと。

扱メル、キ、ユリ、ウス、即ち音或は響について更に先きを注意せよ。凡ての性質はその最初の起原を、注意せよ、火の産れる處の中心からとる。何故なれば、凡ての性質の生命なる電光は其處から昇り、そして水に捕へられ、水は輝いて残り、ついに鹹性に依つて乾かされて電光は形體的と

なり、明かに輝く様になるから。

此處で注意せよ！—木を點火せよ。然らば諸君は秘義を知るであらう。火は木の硬性に點火する。此の硬性は鹹い堅い源、サタルナスで、これが木を堅く又強固にしてゐる。扱然し、光、即ち、電光は硬性から成立しないで、若しそうならば石も燃えなければならぬ、木の液、即ち水から成立する。木の中に此の水があるから火は輝く光として照る。然るに木の中の水が消滅すれば、輝く光は消え木は灼熱の炭として残る。

扱見よ、光の中に昇る暴性は木の水から成り立つのではなく、却つて熱が硬性の中へ昇る時は電光が産れ、それを最初木の液が捕へるから水は輝くのである。然るに暴性は硬性と熱との間の電光から産れ、又その中で成り立つ。そして火の炎なる電光が達する範圍までは、硬性と熱との子なる暴性も達する。

然し諸君は暴性が豫め既に木の中にあると云ふ秘義を知らなければならぬ、でなければ、かゝる烈しい暴性が自然の火の中にかく突然産れることはないであらう。何故なれば、丁度人が木を點火すれば、火の形體が産れる様に、地の中や地の上の木も同様な方法で産れるであらうから。

然し輝く光の中に暴性が産れる時は、それは勿論光の輝が達する處までは達するであらう。然しそうはならない。斯うである、電光は光を自ら産むから光の母である、そして又暴性の父である、何故なれば、暴性は電光の中に恰も父の中に於ける種子の様に止るから。そして此の電光は又音或は響を産む。

音が硬性及び熱から出る時は、硬性は電光の中に於て鼓動し (Puls) 熱は響き、そして電光の中の光は音響を朗かにし、水はそれを柔げる。鹹性或は硬性の中に於て彼は捕へられ、乾かされ凡ての性質に於ける形體的の靈となる。何故なれば、神の七つの靈の中の各々の靈は、神の凡ての七つの靈を孕み、そして凡ては他のもの、中にあつて一つの靈の如く、何物も他の靈の外にはないから。そして一つのものは自身の中、及び自身によつて他のものを産み、かくて生誕は永遠より永遠に續く。

私は此處で讀者が神的生誕を正しく觀察することを警告する。諸君は星が天に相並ぶ様に、一つの靈は他の靈の傍にあると思つてはならない。却つて凡て七つは丁度諸君が人間に於て見得る靈の様に、互に一つの様になつてゐる。人間は彼の形體の中に内存する神の七つの靈の働きによつて、色々の思想を持つてゐる。然し、諸君は、もし恐でないならば、全形體に於ける各々の肢は同時に

力の肢の他をも持つてゐると云はなければならない。

諸君が何れの性質に於て靈を喚び起し、働かせようと、その性質に應じて思想も又昇つて心情を支配する。若し諸君が火の中に靈を喚び起すならば、諸君の中には苦い、強い怒りが湧く。何故なれば火が點火されるや否や、これは硬性と暴性との中に起るが、苦い暴性が電光の中に湧くからである。若し諸君が諸君の身體の中の何物かに、例へば愛或は怒りに、反抗する時は、諸君はその反對したもの、性質を點火する、そして其の點火した性質は、諸君の凡ての形體化した靈の中に於て燃える。然し電光の中に此の同じ本源靈は喚び起される。若し諸君が何か諸君の氣に入らない、諸君に反抗する物を見る時は、諸君は諸君の心臓の泉を、恰も石でも取り上る様に高めて、そして燧鐵の上にそれを打ち付ける、そしてその火花が心臓の中で火を取れば、火は點火する。初にそれは輝くが、然し諸君が心臓の泉を更に高くあげる時は、恰も諸君が火を吹く時の様に炎がそれに點火される。其の時は此れを消すべき時である。然らざれば火はあまり大きくなり、焼き滅ぼして、諸君の隣人にまで害を及ぼすであらう。

諸君は云ふ、どうして吾々は點火された火を消すことが出来るかと。聞け、諸君は甘い源水を内に持つてゐる。其れを火に注げ、然らば火は消える。若し其れを燃えさせれば、それは諸君の

内なる凡ての七の靈の液を燒盡し、諸君は乾いてしまふであらう。若しそうなれば、諸君は地獄の燃木、地獄の火の薪となり、永遠に回復の手段がなくなるであらう。

然し、諸君が何か諸君の愛するものを見て、心臓の内に靈を喚び起す時は、諸君は火を心臓に點火する。其の火は最初甘い水の中で恰も灼熱の炭の様に燃える。火が只輝いてゐる間は、其れは諸君の内なる穩やかな心地良さで、諸君を傷害しない。然し諸君の心臓があまり高くのぼり、甘い源に點火してそれを燃える炎とする時は、諸君は凡ての本源靈を點火してしまふ。斯くなれば、全身は燃えて、口や手に迄も及ぶ。

此の火は最も危険なもので、世の初以來最も多くの害をなし、又消すに非常に困難な火である。何故なれば、それが點火される時は、それは甘い水の中、生命の電光の中で燃える、そして苦い性質に依つて消されなければならないが、これは略んど貧弱な水、否寧ろ火であるから。夫故誰人でも、彼の肉體の中に於て、火が甘い源水を燃す様な事が起れば、彼には非常に悲哀の情緒が起る。

然し、諸君は諸君の心情統御に於ては自ら主であること、如何なる火も諸君自らそれを起さなければ、諸君の肉體及び靈の領域に昇るものでないことを知らなければならぬ。實に凡ての諸の靈は諸君の内に湧き、諸君の内に昇る。そして勿論或る靈は、諸君の内に於て、他の人の内に於けるよりも、常に一層大きな力を持つてゐる。何故なれば、若し一人の人の靈の統御が他の人と同じであるならば、吾々凡ては一つの意志、一つの様態を持つてあらうから。然し凡て七つの靈は精神と呼ぶ處の諸君の一所に形體化した靈の力の中にある。(「精神はそれ自身第一原理を有し、精神の靈は第二原理を、そして元素の中、星の靈は第三の原理をもつてゐる、即ち此の世界である」)。

斯くて、若し火が一つの本源靈に起れば、それは精神に隠れてはゐない。精神は直ちに他の、今點火された靈に反對な本源靈を喚び起して、それを消すことが出来る。然し火があまり大きくなれば、精神は牢屋を持つてゐるから、その中へ點火した靈を閉ぢ込める、即ち堅い、鹹い性質の中である。そして他の靈は、怒が止み火が消えるまで、その典獄とならなければならぬ。

これ何の意なるかを注意せよ。若し本源靈が諸君をあまり強く自然法に反した事物の方へ追ひ遣る時は、諸君は諸君の眼をそれから轉じなければならぬ。若しその効がなければ、其の靈を捕へて獄に投せよ。即ち諸君の心を一時の快樂、暴食暴飲、此の世の富等から轉じて、今は諸君の肉體の最後の日であることを思へ。此の世の奢侈淫慾から諸君を轉じ、眞面目に神を呼び、神

に諸君を委ねよ。―斯くすれば、世は諸君を嘲り、諸君は世に於て愚者とならなければならぬであらう。然し、忍耐を以て此の十字架を負へ、そして捕へられた靈を神に委せよ、再び牢獄から出す勿れ。神は諸君に神的歡喜の冠を置くであらう。

然し、靈が再び破獄して出る時は、再びそれを捕へ押込めて、諸君の生くる限りこれを監視せよ。そして諸君が若し、靈をして最早諸君の心臓の源泉を點火し、諸君の精神を乾いた薪とすることなく、諸君が此の世から分れる時に各々の泉は尙その液を有するまで守る時は、然らば點火された火は、最後の審判の日に於て、何等諸君に害を及ぼさず、又諸君の液の靈に附着せず、却つて諸君は此の惱ましい苦闘の後、復活して神の榮ある天使となるであらう。

扱諸君は云ふであらう。神の中にも又、神の靈相互の間に反對意志があるかと。否、私は今此處で神の靈が如何に眞實に、又嚴かに産れたかについての眞面目な生誕を示し、各々に神の大なる眞面目を了解させようと思ふが、然しそれだからと彼等の間は不一致があると云ふことにはならない。何故なれば、最も内奥の、最も深い核心に於ける生誕は、如何なる被造物も肉體に於ては理解し得ず、却つて隠れた靈が生れる處の電光の中に於てのみ理解され得るから。何故なれば、此の靈も又斯様にして、又斯様な力の中に於て生れたのであるから。

私には然し、それを見、理解することの出来るように、心情の門が開けるであらう。でなければ、死から復活する日まで私に隠されてゐなければならぬであらう。それは又世の初以來凡ての人に隠されてあつた。然し私は神の欲するまゝに委せる。

神の中では凡ての靈は恰も一つの靈の様に勝ち榮え、一つの靈は常に他の靈を柔げ、愛し、そして喜と樂との外何物もない。然しその隠れた中に起る嚴しい生誕はかくなければならぬ。何故なれば、生命理解及び全智はかくして生れるから。そしてこれ永遠の生誕で、それは決して他の仕方ではない。

諸君は天には何か斯様にして生れる形體があつて、それを吾々は凡て他の物と區別して、神と呼ぶのであると思つてはならない。否、夫自身天であり、天の天である處の全神的力量が斯様に生れるのである。それを父なる神と云ひ、それから凡ての聖なる天使が生れ、又その力の中に於て生息する。凡ての天使の靈も、又凡て人間の靈も常に永遠に斯くして生れる。此の世界は天と同様に父なる神の形體に屬する。然し靈は此の世界に於て王ルチファの傲ぶりによつて點火された爲め、凡て此の世界の物は半ば敗壞し、半ば死んでゐる。夫故吾々憐れな人類はかくも目くらんで、大いなる危険の中に生活するのである。

然しそれだからと云つて、諸君は神の本源靈に於ける天的光は、此の世に於ては全く消えてしまつたと思つてはならない。否、そこには只暗黒 (Dunkelheit) があるのみであるから、吾々は此の敗壞した眼を以ては光を捕へ得ないのである。若し神が此の光の上を蔽つてゐる暗黒をぬぐひ、諸君の眼を開くならば、然らば諸君は今諸君が立ち、座し、或は横はつてゐる其の場所で、神の麗しい顔と全き天の門とを見るであらう。諸君は諸君の眼を先づ天に向ける必要はない。何故なれば、「道は爾に近く爾の口にあり爾の心にあり」と書かれてあるから (申命記三十ノ十三、羅馬書十ノ八)。實に神は諸君に近い、諸君の心にさへ聖三一體が産れる位近い、凡ての三つの人格、父なる神、子及び聖靈は諸君の心の中に産れるであらう。

私が此處に、中心或は真中について書き、神的生誕の源泉は中心にあると云ふ時、其の意味は天に特別な場所、或は特別な形體があつて、そこから神的生命の火が上り、又それから神の七つの靈が出ると云ふのではない。否、私は只讀者の無理解の爲めに、形體的、或は天使的、人間的方法で語るのである、即ち天使なる被造物が造られ、又は到る處神の中にあることを語ると同じ仕方でするのみである。

何故なれば、諸君は天の中、世界の中、如何なる處でも、それが天使、聖人或は他の如何なるも

の、中に於ても、神的生誕が斯様でない處を指示することは出来ないから。本源靈が神的力に於て動く處は何處でも、惡魔及び神なき呪はれた人でない限り、そこには既に神的生誕の源泉があり、神の凡ての七つの本源靈がある。諸君が空間的の圈を造る時は、全神性はとくにその中にある。丁度其の様に神性は一つの被造物の中に産れ、又父の全深みに於て凡ての隅々、凡ての事物の中に産れる。そして又斯様な意味で神は全能、全知、凡てを見、聞き、嗅ぎ、味ひ、感ずる神で、到る處にあり、又被造物の心臓と腎臓とを吟味する。そして斯かる意味で天と地とは彼のものであり、凡ての惡魔と神なき人とは彼の永遠の囚人でなければならぬ。そして彼等は、彼等が己れの場所に於て敗壞し點火した處のサルニタの中で、永遠の惱みと永遠の恥辱及び呵責を受けなければならぬ。

何故なれば、神の完き麗はしい顔は凡ての天使と共に、彼等の上、彼等の下、彼等の傍の凡ての側を美しく明かに照らし、そして凡ての聖なる天使は聖なる人間と共に彼等の上、下及び側で永遠に榮え、非常な喜と樂と愛とを以て神の神聖、彼等の王の統治、天の植物の惠ある果實に就いて歌ひ、そしてこれは神の七つの靈の性質に従つて、色々の音で行はれるであらうから。

これに反して、惡魔は凡て神なき人々と共に、地獄の臭氣が湧いて昇り、地獄の火と地獄の冷

たさと厳しさが、神の點火された靈の種類に従つて、永遠に彼等の肉體及び領域を焼焙する處の地獄に捕へられるであらう。然り、彼等が牢窟に閉ぢ込められて、神の怒の顔に觸れない事が出来るならば、彼等は尙平和で、永遠の恥辱と呵責とを忍ばないでゐられるであらう。然し、其處には最早何等の助もない。彼等の惱みは大きくなるばかりである。彼等が悲めば悲む程地獄の怒は益々點火して、彼等は地獄の中に恰も火に焼かれた羊の様に、屍となつて横はらなければならぬ。その惡臭と憎惡とは彼等の骨髓を啣む。彼等は恥辱の爲めに敢て彼等の眼をあげ得ない。何故なれば、彼等は彼等の領域には只嚴しい裁判官を見るのみであり、しかも彼等の上及び凡ての側には永遠の喜を見るから。「彼等がそれを知り又は見ると云ふのではなく、彼等の中心に於て此れを自識するのである」。

其處には悔みと歎き、呻きと呼びとがあるが、しかも何等の救はない。彼等には、常に雷が鳴り、電光が閃く様に思はれる。何故なれば、神の點火された靈は斯くして産れたのであるから。第一に硬性は硬い、粗い、冷たい、辛い性質を産む。第二に甘性は恰も木の中に何の液もなくなつて乾き、灼熱した炭の様に焦盡する。第三に苦性は烈しい疫病の様に引き裂き、膽汁よりも尙苦くなる。第四に火は狂暴な硫黄の様に燃える。第五に愛は敵意となる。響は恰も穴洞を通る火の響、

又は雷の音の様に堅い叩きに外ならない。第七の形體の領域は悲みの家である。彼等の食物は殘忍で、凡ての狂暴の性質から生長する。

噫、終りなき永遠。そこには時間はない。他の王は彼等の椅子の上に座して永遠の裁判をなし彼等は只彼の足臺である。

噫、此の世の美よ、淫慾よ、オ、富よ、虚飾よ。オ、權よ力よ、汝の不正なる判断と大いなる誇とは、凡て汝の淫慾と共に積み重ねられて地獄の火に投せられる。さらば食へ、さらば飲め、さらば飾れ、さらば誇れ、汝美しき女神よ、如何に汝は淫婦となり果てたるか、汝の恥辱と呵責とは永遠に續く。

第十一章

神的力量に於ける第七の本源靈に就いて

神的力量の中に於ける神の第七の靈は、形體 (Körper) で、他の六つの靈から産れる。そして凡ての天上の形像 (Figur) はそれから成立し、其の中に於て凡ての物は形成し、又凡ての美と喜とは其れから生ずる。これ眞の自然の靈、否自然其物で、物の感知性はそれによつて生じ、又それによつて天及び地の凡ての被造物は構成されてゐる、否天其物もそれから出来、又完き神に於ける凡ての自然性も此の靈から成り立つてゐる。夫故若し此の靈がなければ如何なる天使も、人間もなく、そして神は只探究し得ない力からのみ成つてゐる探究し得ない本質であるであらう。

そこで疑問が起る、此の様態はどんなであるかと。若し諸君が、神の凡て七つの靈に透入してそれ等がどんなであるかを視、吟味する處の理性的なメルキユリウスの靈であるならば、然らば諸君は、此の第七の靈の解明に依つて、全神性の作用と本質とを了解し、心に會得するであらう。然し、諸君が此の靈に依つて何物をも理解しないならば、然らば、此の書物を捨て、置き、そし

て其の中の冷或は温に就いて何等の判断をも下す勿れ、それは諸君はあまり多くサタンに捕はれ、決して此の世に於ける哲學者ではないから。諸君の判断を中止せよ、然らざれば、諸君は悪い運命を受けるであらう。夫故私は眞實に忠告したい、後の生命の來る迄待て、そうすれば天の戸は開け、諸君はそれを理解するに至るであらう。

扱深義を注意せよ。此處で私は全神的形體を心臓の中心に於て捕へ、どうして自然が生ずるかその全形體を明かにしなければならぬ。其の時諸君は、何故神の凡て七つの靈は常に他のものを産み、何故神性は初も終も無いかの最高の理由を知るであらう。夫故諸君の靈の樂、永遠なる神的喜び、天上的愉快、及び永遠に終のない形體的喜びを見よ。

扱注意せよ。電光が中心に昇る時、神的生誕はその完全なる働きに於てある。神に於ては常に永遠に斯様であるが、然し、吾々憐れな肉の子等に於てはそうでない。此の世の生命に於ては、吾々人間の中に光榮ある神的生誕があるのは、只電光の續く間のみである。夫故吾々の認識は部分的であるが、神に於ては電光は常に又永遠に不變である。

見よ、神の凡ての七つの靈は皆同様に産れて、何れが最初、何れが最後と云ふことはないが、然し、吾々は如何に神的生誕が起るかを其の核心に於て見なければ、吾々はそれを解し得ないで

あらう。何故なれば、被造物は凡て七つを同時に理解することは出来ないが、然し、其等を見ることは出来る。即ち、若し一つの靈が動かされば、それは凡て他の靈をうごかし、斯くて生誕はその完全な力に於て現はれるから。人間には初があるが、神には初がない。夫故私は又被造物の仕方て書かなければならない。でなければ、諸君は何物も理解し得ないであらう。

見よ、凡て七つの靈は電光がなければ暗黒の谷である。然し電光が鹹い性質と苦い性質との間で熱の中に昇る時は、彼は甘い水の中では照り、熱の炎の中では苦く、そして鹹い中では形體的となり、乾き且つ明かとなる。

扱此れ等四つの靈が電光の中で動く時は—それは凡て四つはその中で生命を得るから—此れ等の四つの力は恰も生命が昇る様に電光の中に昇る。そして電光の中に昇つた力は愛、即ち第五の靈である。此の力は電光の中で、恰も死んだ靈が生き、突然非常に明かな處に置かれた様に喜ばしく、愛らしく活動する。此の活動に於て又他の力を動かす。第一に鹹い力が鼓動し、熱はその鼓動に於て透明な調音を造る。そして苦い力は調音を分け、水はそれを柔かくする。これ第六の靈である。

扱、音は凡て五つの靈の中に恰も愛すべき音楽の様に昇る、そして其儘存続する。何故なれば鹹い性質がそれを乾かすから。扱、此の發した響、それは今乾いて存続する處の此の響、の中に凡て六つの本源靈の力がある、それは恰も他の六つの靈が其に形體化した種子の様なもので、それから一つの靈を造る。それは凡ての靈の性質を有し、神の力に於ける神の第七の靈である。此の靈はその色に於ては青空の色である。何故なれば、それは凡て六つの靈から産れたから。其處で熱の真中に存する電光が他の靈を照らし、其れ等が電光の中に昇り、そして第七の靈を孕ませる時は、電光も又六つの靈が産むと共に第七へ昇つて行く。然し第七は何等特別の性質を持たないから、電光は其の中ではより明かにはならないで、却つて第七から凡て七つの靈の形體的本質を集める。そして電光は此れ等七つの靈の真中に存し、凡ての七つから産れる。

七つの靈は光の父、光はその子で、彼等がそれを永遠より永遠に常に産む。そして光は照らして、常に永遠に七つの靈を生々と喜ばしくする。何故なれば、彼等は凡てその發現と生命とを光の力から取るから。之れに反して彼等凡ては光を産み、凡ては同時に光の父である。そして光は何等の靈を産まず、却つて凡て七つを生々と喜ばしく、常に出産に於てある様にする。

見よ、私は諸君がいかにもしてそれを理解し、此の高い勞作が何等の利益もなく無益に終らない爲めに、それを諸君にも一度示そうと思ふ。

鹹い性質は最初の靈である、彼は結集して凡てのものを乾かす。甘い性質は第二の靈である、彼はそれを穩和にする。第三の靈は苦い靈で、彼は第四と第一とから成立する。此の第三の靈がその狂暴を以て鹹い性質の中で摩擦する時は彼は火を點火する。そして火の暴性が鹹い性質の中に昇る。此の暴性の中に於て苦い靈は獨立的となり、甘い中で穩和にされ、堅い中で形體的となり、そして存在する。第四も又そうである。

扱此れ等四つの力の中に於て電光は熱の中に現はれ、甘い源水の中に昇る。そして苦い性質はそれを凱戰的にし、鹹い性質はそれを輝くやうにし、又乾かして形體的にする。甘い性質はそれを穩和にする。かくてそれは最初の輝を甘い中からとる。そこで電光或は光は心臓として中心に存在する。此の中心にある光が四つの靈の中に照る時は、四つの靈の力が光の中に現はれ、生々となる。そして光を愛する、即ち、彼等はそれを己れの中に取り容れ、それを孕む。斯くの如くして取り容れられた靈は生命の愛で、これ第五の靈である。

彼等が愛を彼等の中に取り容れた時は、彼等は非常な喜を以て作用し活動する。何故なれば、一つのもは他のものを光の中に於て見、そして一方は他方を刺戟するから。この時音が現はれる。堅い靈は叩き打つ (Pochen) が甘い靈がその叩きを穩和にする。苦い靈はそれを各々の性質

の種類に應じて分離し、第四の靈は響鳴を造らせ、第五は喜を造らせる。かくして結成された響鳴は音で、即ち第六の靈である。

此の音の中に凡ての六つの靈の力が現はれ、天使的の仕方て語るならば、感知し得べき形體 (ein begreiflicher Körper) となつて、他の六つの靈の力及び光の中に存在する。これ自然の形體で、この中で凡ての天上的被造物、事象、生物等が形成される。

神聖なる門。―光は凡て七つの靈の中に於て成立し、凡て七つの靈の生命は光によつて成立し又其れによつて凡ての七つは榮え、喜ばしくなり。そこから天の喜が生ずる。そして光は七つの靈の心臓で、此の光は吾々基督者が崇め尊び、聖三一體の一つの人格とする處の神の眞の子である。

そして神の七つの靈は凡て共に父なる神である。何故なれば、何れの靈も他の靈以外には存せず、凡て七つは各々他のものを産み、その一つがなければ他の凡てもないから。光は然し他の人格である。何故なれば、それは七つの靈から常に産れ、七つの靈は常に光の中に昇り、そして此れ等七つの靈の力は常に光の輝から第七の自然の靈へ出現し、凡ての物を第七の靈の中に於て形造るから。そして此の光に於ける出現は聖靈である。

力の中に産れる電光或は心臓は中心に止まつてゐる、これ子である。そして凡ての力の中の輝は父と子とから出て、父の凡ての力に行き、第七の自然靈に依つて、凡ての物を七つの靈の力と作用と、及びその差別と衝動とに應じて、形造る。これ吾々基督者が神性に於ける第三の人格として崇め尊ぶ眞の聖靈である。

斯くて汝等盲目なる猶太人、土其古人及び異教徒よ、汝等は神性の中に三つの人格があることを見るであらう、汝等はそれを否定することは出来ない。何故なれば、汝等は此等の三人格の中に於て生き、存在し、又汝等の生命をそれによつて、又その中に於て有し、そして最後の日には此等三人格の力によつて死から復活し、永遠に生息するであらうから。

扱、若し諸君が此の世に於て自然の法則に従つて聖く正しく生活し、神の子であり、且つ、諸君に自然の法則を教へる處の明かなる電光を、自然の智慧に反する狂暴な誇りによつて消さないならば、然らば諸君は凡ての基督者と永遠の喜に於て生活するであらう。「自法は自然の中心から出る神的秩序である。その中に生活し得る人は何等他の法則を要しない。何故なれば彼は神の意志を満すからし」。

諸君の不信仰には何等の力、理由もない、夫故諸君の不信仰は神の眞理を抑止しない。信仰は然し希望の靈を吹き起し、吾々が神の子であることを確證する。此の信仰は電光の中に産れ、自ら征服し勝利を得るまで、長く神と闘ふ。

諸君は怒の中に、諸君の光を消し盡す嫉妬の靈を吹き起して、吾々を審判する時、それによつて諸君自身を審判してゐるのである。然し諸君が甘い木によつて生長し、凡て悪い影響を抑壓し自然の法則の中に聖く正しく生活するならば、それは諸君に正しきものをよく示すであらう。

然し諸君は狂暴な枝から生長し、「此の意味は、時々蘗などの生ずる神なき種と云ふ意味である。只意志が碎けたのであるならば、回復の手段はあるが、然しそれは稀有な、貴重な事であるけれども善い木に於ても時々枝が枯れてしまうことがある」。そして盲目ではないか。諸君が其の中に生れ、其の中に生活し、そして其の中に最後まで止まる處の、神の愛から諸君を引き離すものは誰であるか。神、其の中に於て諸君が此の世で生活した處の神から諸君を引き離すものは誰であるか。

諸君が畑に蒔いたものはライ麦であれ、小麦であれ、大麦であれ、莢であれ、莢であれ、凡て芽を出すであらう。最後の火に値ひしなものは又燃えないであらう。然し神は彼の善い種を滅ばさず、耕して永遠の生命の中に於て實を結ばせるであらう。

凡ての物は神の中に在り、神の中で生息することを知つて、しかも何故尙雜草は小麦の前に誇るか。諸君は神は偽善者で、人の人品或は名を重んずると思ふか。吾々凡ての父は誰であつたか。アダムではなかつたか。彼の子カインが神の前に悪い行をした時に、何故彼の父アダムは助けなかつたか。然し斯く記されてある、罪を犯すものは罰せらるゝ(エゼキエル十八ノ四、二十)。若しカインが彼の光を消さなかつたならば、誰が彼を神の愛から引き離すものがあらうか。

然らば諸君、諸君も基督者であり、光を知ると誇るならば、何故諸君は光の中を歩まないのか。諸君は只名が諸君を神聖にすると思ふのか。見よ、彼等の燈をよくとぼした多くの猶太人、土其古人、異教徒は諸君よりも前きに天國に行くであらう。

然らば基督者は何の利益を持つてゐるか

多くのものを有する。何故なれば、彼等は生命の道を知り、如何に墮落より昇るべきかを知つてゐるから。然し、誰れでも其處に止まらうとするならば、彼は穴に投げ込まれ、凡ての神なき異教徒と共に絶滅されなければならぬ。夫故汝の爲すことを注意し、汝が誰であるかを思へ。汝は他人を審判しながら、汝自身は盲目である。然し靈は云ふ、汝は汝よりも善い人を審判く何等

の理由もない、吾々凡ては一つの肉を有し、吾々の生命は愛に於ても怒に於ても、神によつて在るのではないかと。汝の蒔くもの、それを又汝は蒔らなければならぬ。

諸君が見棄てられる原因は神ではない。何故なれば、正しき事を爲すべき法則は自然の中に書き記されてあり、そして諸君は其の本を諸君の胸の中に持つてゐるから。諸君は諸君の隣人に丁寧に親しくすべきであり、又諸君自身の生命、即ち諸君の肉體及び精神を辱かしめ、穢してはならない事をよく知つてゐる。

實に此の中に神の核心、及び愛がある。神は人の名或は姓を見ない。誰でも神の愛の中を歩む人は即ち光の中を歩む。そして光は神の心臓である。神の心臓の中に座する人、其の人を誰が吐き出そうか。誰もない、これ彼は神の中に産れてゐるからである。

オ、汝盲目なる、半ば死んだ世界よ、汝の審判を止めよ。オ、汝等盲目なる猶太人、土其古人異教徒よ、誹謗を止めよ、そして神に従順に光の中を歩め。然らば汝は如何にして汝の墮落より上り、如何にして此の世に於て地獄の怒に對して自分を防ぎ、如何にしてそれを征服し、神と永遠に生活し得るかを知るであらう。

實に神は只一人である。若し諸君の眼から蔽が取り去られて、彼を見、彼を知るならば、然ら

ば諸君は又凡て諸君の兄弟、基督者をも、猶太人をも、土其古人をも或は異教徒をも、見、且つ知るであらう。或は諸君は思ふか、神は只基督者のみの神であると。否異教徒も又神の中に生きてゐる。何人でも正しい事をなす者は神に愛せられ、又喜ばれる(使徒行傳十ノ三十五)。或は基督者なる諸君、諸君は神がどうして諸君を惡から救ふかについて、何を知つたか、諸君は神が人類を救ふ爲めに彼の子を人間とした時に、彼と和ぐことについて何をなしたか。彼は只諸君の王であるか。彼は凡て異教徒の慰なり、と書かれてあるではないか(哈基、二ノ八)。

聞け、一人の人を通して此の世に罪が來、其の一人を通して凡ての人に及んだ(ロマ書、五ノ十八)。そして一人を通して此の世に救が來、其の一人を通して凡ての人に及んだ。人々の智慧に何の頼みあるか。實に諸君は諸君が尙罪の中に死んでゐた時に、神は諸君に對して何を爲したかを知らなかつたではないか。

丁度罪が一人を通して凡ての人を差別なく支配する様に、慈悲と救も一人を通して凡ての人を差別なく支配する。然し異教徒、猶太人、土其古人には盲目が到來した。然し彼等も又産みの苦みにあつて、休息を求め、恵みを願つてゐるが、彼等はそれを正しい場所に求めない。神は然し到る處にあつて、そして心の奥底を見る。彼等の産みの苦みの中から光が生れた時に、彼等を審

判かんとする諸君は抑も何人であるか。

見よ、汝盲目なる人間よ、私は汝にそれを示そう。牧場へいつて色々の草や花を見よ、汝は鹹いのや、甘いのか、酸いのや、白いのや、黄いのや、赤いのや、緑のや、其他の多くを見るであらう。彼等は凡て地から生長するではないか。彼等は互に相並んでゐるではないか。一つのもは他の美しい姿を羨み嫉みなどするか。然し彼等の一つがあまり高く生長して、液が十分でない爲めに枯死した時、地はそれに何をなすことが出来るか。地はそれにも他のものと同様にその液を與へる。然し若し其の間に茨が生長し、農夫が來て蒔る時は、彼はこれをも一所に蒔つて火に投げすて焼いてしまふ。然し多くの花は彼の倉に集められる。人間に於ても又同様である。色々異つた天賦と技能とがある。一人は他の人より神の中に於てより輝やかである。然し彼等は決して靈の中で枯死しないから、何れも棄つべきでない。然し若し此の靈が枯れてしまへば彼は薪となる外何の役にも立たない。若し土其古人が鹹い性質で、異教徒が苦い性質だとしてもそれが諸君に何の関係があるか。光が鹹い性質や苦い性質の中で光つても、それはやはり照らすのではないか。諸君は然し熱、そこで光が甘い水の中から昇つた處のその熱の中から産れた。熱が諸君を焼き盡さない様に注意せよ、諸君はそれを消すべきである。

扱、諸君は云ふであらう。然らば土其古人や猶太人や異教徒が彼等の盲目に止まる事は正しいかと。否。然し、私はこれを云ふ、目の無い人がどうして見る事が出来るか。僧侶が酩酊してなす騒ぎを平信徒は何で知らうか。彼は彼の朴直に於て生活し、悩みながら産れる。

更に諸君は云ふであらう。然らば神が土其古人、猶太人及び異教徒を盲目ならしめたかと。否、却つて神が彼等に光を點じた時に、彼等は彼等の心の嗜慾に耽つて、靈に導かれようとしなかつた、夫故外的の光は消えたのである。然し、それは人の中に産れることの出来ない位全く消えてしまつたのではない。何故なれば、人は神から生じ、又愛或は怒の何れの中にせよ、神の中に於て生活するから。

若し人が求めあこがれる時は、彼はそのあこがれに於て孕むべきではないか。そして一度孕めば、彼は又産むことが出来る。然し外的の光が彼に輝かない間は、人は彼の産んだ彼(人)の子を知らない。然し最後の審判の日に於て光が昇る時、彼は彼(基督)を見るであらう。

見よ、私は諸君に秘義を語る。花婿が花嫁に冠する時は既に來た。何處に冠があるかを當てよ。北方である、そは光は鹹い性質の中に於て輝くから。然し花婿は何處から來るか。熱が光を産む處の中心から來て、光が輝く處の北方鹹い性質の中に行く。これ等は南方に對しては何をするか

彼等は熱の中に眠つてゐる。然し嵐は彼等を目醒すであらう。多くのものはその中で恐れ死ぬ。

然らば、西に於ては何をするか。彼等の苦い性質は他のものと摩擦するであらう。然し、彼等の甘い水を味ふ時彼等の靈は穩和になるであらう。東に於ては何をするか。汝は初から傲慢な花嫁である。冠は初から汝に呈示されてゐる。然し、汝は自分をあまり美しいものと思つてゐる。汝は他のものと同じ様に生活するであらう。

神的、天上的自然、その作用及び特質に就いて

若し諸君が天には如何なる性質があるか、聖なる天使は如何なる性質を有するか、又神聖な、天上的、神的自然とは一體如何なるものであるかを知りたいならば、然らば、次ぎの様に神の此の第七の靈に於ける事情をよく注意せよ。

神の第七の本源靈は、即ち自然の本源靈である。何故なれば、他の六つの靈は第七の靈を産みそして第七は、自分が産れた時は恰も他の六つを懐く母の様に、再び他のものを産み、そして形體的、自然的本質は此の第七に依つて成立するから。

此處で、その意味を注意せよ。六つのものは、其の各々の力と種類とに従つて、各々完全な生誕

に於て昇る。そして彼等が昇つた時は彼等の力は互に混じて、硬性はそれを乾かす、そして恰も（手）全き一つの本質の様になる。此の形體的乾燥を私は此の書物で神的サルタと呼んで来た。

202

何故なれば、その中には全神性の種子があり、そして恰も其の種子を受けて常に再び種子の凡ての性質に應じて實を産む母の様であるから。

此の六つの靈が昇ると共に、それ等のメルキユリウス、即ち音或は響も真中に昇り、第七の靈の中に恰も母の中に於ける様に存在する。それによつて第七の靈は六つの靈の作用に應じて、色々の實や色を産む。

然し此處で、諸君は神性は靜止してゐるものではなく、恰も愛する喜ばしい格闘、運動或は闘争であるかの様に、絶えず作用し、立ち昇ることを知らなければならない。例へば非常な愛を以て愛し合ふ二人の被造物が、互に戯れ、抱き合ひ、把み合ひ、或る時は一方が上になり、或る時は他方が上になり、又一方が勝てば次ぎにゆづつて他のものを勝たしめて、楽しんでゐる様である。

諸君は又これを比喻を以つて斯く解することも出来る。即ち七人が楽しい遊戯を始めて、其の中一人が他の人に打ち勝てば、第三の人は来て負けた方の人を助け、かくて彼等の間に親しい喜

しい遊びが出来る、これ實に彼等凡ては一つの愛の意志を有し、しかも互に遊戯、即ち愛に於て闘ふからである。

神の六つの靈が第七の靈の中に於ける作用も又斯様で、或る時は一つが非常に高く昇り、或る時は他がより高く昇り、しかも互に愛を以て闘ふ。そして光が此の戦から昇る時は、聖靈は他の六つの靈の闘戯の中に於て光の力の中で作用する。其の時第七の靈の中に生命の凡ての實、及び凡ての色や生物が生ずる。此の性質は最も強いものであるから、實の形體及び色も又そうである。この格闘或は戦に於て神性は自ら無限な知り盡し得ない多くの種類、様式、構造を形造る。何故なれば七つの靈は七つの重なる本源で、メルキユリウスが其の中から昇る時は、彼は凡ての物を衝動し、又苦い性質はそれを動かし、區別し、鹹い性質はそれを乾かすから。

（「自然と三性とは一つでない、區別がある。たとへ三性は自然の中に住み、捕捉し難く、しかも永遠に結び付いてはゐるが」）。

扱第七の靈に於て自然の構成はどうであるかを此處に注意せよ

甘い水は自然の初である。そして鹹い性質はそれを引き集めて、若し天使の仕方で語るならば

203

自然的に、或は感覺的にする。扱それが引き集められた時は、それは天の様に青く見える。然し光或は電光がその中に昇る時は、それは貴い碧玉、或は私の言葉で呼ぶならば、其の上には太陽が輝いて非常に眩く、明かなるガラスの海の様である。

然し、苦い性質が其の中から昇る時は、それは恰も生きてゐるかの様に、或は生命がその中から昇つたかの様に、分離し、形成する。そして人間的に語るならば、吾々の目をくらし、見る事を得ざらしめる處の青い電光の様に青い様態をとる。

然し、熱が其の中に昇る時は、青い様態は恰も紅玉が青い電光の中から閃く様に、半ば赤くなる。

然し、神の子なる光が此の自然に海を照らす時は、それは黄い白い色を得る。私はこれを何物にも比較することは出来ない。諸君は後の生命に入る時までそれを見ることを待たなければならぬ。何故なれば、これ實に眞の自然の天で、神から生じ、その中には天使が住まひ、天使は初めにそれから造られたのであるから。

見よ、此の自然に天からメルキユリウス、即ち音が昇る時は、そこに神的な、又天使の喜が生ずる。これそこには美しく花咲き、生長し、又完全の状態に於てあるあらゆる果樹、草木の形、色、及

び天使の實が愛すべき匂と味とを以て生じ、それを見るのは非常な祝福であるからである。

私は然し此處では天使の舌を以て語るのである。諸君はそれを恰も此の世の物の如く地的に解してはならない。

メルキユリウスの有様は斯様であるが、然し諸君は、恰も人が大きな喇叭をとつて吹く様に、神性の中で、強く叩いたり、打つたり、響かせたり、吹いたりしてゐるのだと思つてはならない。否、否、人よ、汝半ば死んだ天使よ、そうではない。却つて凡ては力の中に起つてゐる。何故なれば、神の本質は力から成り立つてゐるから。然し天使は聲高く歌ひ、奏し、吹き、響かせる。何故なれば、神は彼等が天の喜を増し加へる爲めに、自身の中から天使を造つたのであるから。

アダムも又、神が彼を造つて、エヅアが彼から未だ造られなかつた時は、斯様な姿であつた。然し、敗壞したサルニタはアダムの中の生命の木と戦つてこれを征服し、遂にアダムは勞れて眠つてしまつた。そこで若し神の慈悲が彼の助に來て、彼から妻を造らなかつたならば、彼は尙眠つてゐなければならなかつたであらう。然し此れについてはその場所で語らう。

扱これが上述した様に美しい、神聖な天である。それは又全神性の中にあり、初もなく終もなく、如何なる被造物も彼の感覺を以てそこまで達することは出来ない。

然し諸君は此の事を知らなければならぬ、即ち或る場所に於ては、時には一つの性質が他よりも強く現はれ、時には他のものが勝ち、時には第三、時には第四、時には第五、時には第六、時には第七が勝つことを。斯様にして永遠の格闘、活動及び喜ばしき愛の上昇があり、此の上昇の中に於て神性は益々不思議に、益々理解し難く、探究し難く現はれる。夫故天使と雖も其の中に於て十分には喜び得ず、十分には愛の歩みを得ず、又麗はしい *Te Deum Laudamus* (吾等は神汝を讚美す) を、大いなる神の各々の性質、彼の不思議な啓示及び智慧、美及び色、實及び形態に應じて、十分には歌ひ得ない。何故ならば、神の性質はかく常に永遠に昇り、又其れ等には何等の初も、真中も、終もないから。

そして私が此處に、凡ての物は如何に生じ、形成され、又如何に神性が昇るかを書いたといつても、諸君はそれが始め静止し、或は消滅してゐて、後再び昇るのであると思つてはならない。否、私は只讀者の不理解の爲めに、幾分なりとも讀者がそれを理解し、その意味に達する様に斷片的に書き記すのみである。

諸君は又私が天に昇つて、私の肉の眼を以てそれを見たと思つてはならない。オ、否、開け、汝等半ば死んだ天使よ。私は諸君と同じ様なものである。そして私の外的本質に於て諸君よりも

より大いなる光を持つてはゐない。又私は諸君と同じく罪ある、死すべき人間である。そして私は毎日、毎時間、私の肉の中にある私の暴性、私の敗壞した性質、の中で私を惱ます悪魔と戦はなければならぬ。時には私が勝つが、時には私よりも強い。彼は時々私を征服するが、私を全々滅ぼしはしない、否吾々の生命は悪魔との絶えざる戦である。

(此の戦は、悪魔の浸入した、敗壞したアダムの系の人間の死ぬまでの高貴な武士の冠である。ソフェストはこれについて何も知らない。何故なれば、彼は神からではなく、肉と血とから生れたから。そして生誕の道は彼に開かれてゐるのに、彼は悪魔に阻まれて入らうとしない。神は何人をも盲としない)。

若し彼が私を撃てば、私は退かなければならぬ。然し、神的力量は私を助ける。其の時彼は一撃を受ける、そして時々戦ひに負北する。然し彼が征服された時は、私の靈には天の門が開ける。其の時靈は神的及び天的本質を見る。肉體の外に於てははなく、心臓の本源に於て、電光は腦の感性 (*Sinnlichkeit*) に昇つて来る、その中に於て私の靈は思考する。

人間は天使と同じく神の凡ての力、神の凡て七の靈から造られた。然し、彼は今敗壞してゐるから、神的生誕は彼の中に始終は湧かない。そしてたとへそれが湧いても、高い光は直ちに凡て

の人に照らない、又たとへ照つても敗壞した性質には理解し得られない。何故なれば、聖靈は罪ある肉體の中に捕へられず、却つて電光の様に――丁度吾々が石を打つた時出る火の様に昇るか
ら。

然し、電光が心臓の本源に捕へられる時は、彼は恰も朝紅アサキの様に、腦の七つの本源靈に昇つて行く。そしてそこに目的及び認識がある。何故なれば、此の光の中に於て人は他のものを見、嗅ぎ、味ひ、聞き、そして恰も全神性がその中に昇つたかの様であるから。

此の中に於て靈は神性の深み迄見透す。何故なれば、神に於ては近いと遠いとは一つで、そして私が此の書物に於て書く神、その神は聖なる精神の形體の中に於ても、又天の中に於ても三性として存するから。此の神から私は私の認識を取るの、決して他のものから取るのではない。私は又此の神より以外の何物をも知らうと欲しない。そして此の神が又私が常に彼を信じ、彼に委せると云ふ私の靈の確信を造るのである。

たとへ天使が天から語つても、私は決してそれを信ずることは出来ない。そしてそれを確く保持することは出来ない、私は常に眞實その通りであるかどうかを疑ふであらうから。然し、太陽自身が私の靈に昇るから、私はそれを確信し、そして私自身聖なる天使、天及び地に於ける凡て

の物の到来、生誕を見る。そは聖なる精神は神と一つなる靈で、たとへそれは被造物ではあるが然し天使と同様である。又人間の精神は天使より更に深くを見る。何故なれば、天使は只天の華麗を見得るのみであるが、精神は天と地獄――その間に生きてゐるから――とを見得るから。

夫故精神は稍もすれば撃ち碎かれなければならない。そして毎日、毎時間、悪魔、即ち地獄の様な性質と戦ひ、そして此の世界に於て非常な危険の中に生活しなければならぬ。夫故此の生命を苦痛に満ちた、絶えざる殺戮、戦争、苦闘、争亂の惱の谷と云ふのは至當である。

然し冷たい、半ば死んだ肉體は此の精神の戦を解しない。彼は自分に何事が起つたかを知らず只氣鬱で、悶えてゐる。そして一つの部屋、或は一つの場所から他へ移つては、安逸と休息とを求めてゐる。然し其の場所へ来れば彼は何物もそこに發見しない。そこで時々疑惑と不信とが降りかゝつて、彼は恰も神から衝き出されたかの様になる。然し、彼は靈の戦を解しない。即ち靈が如何に或時は勝ち、或時は負けるか、如何に烈しい苦戦と闘争とが地獄と天との性質の間にあるか、如何なる火を悪魔が吐き出し、天使がそれを消すかを知らない。私はこれについて考へる事を、各々の神聖なる精神に委せる。

諸君は此處で、私が他の人から話された歴史を書くのではなく、却つて私は常に自ら此の戦に

立たなければならぬこと、且つそれが非常に大きな戦で、時々私も他の凡ての人々と同じく、打ち倒されなければならぬと云ふ事を知らなければならぬ。

然し此の烈しい苦戦と闘争、及び吾々が共になした熱心との爲に、私には此の啓示と此れを凡て紙上に書くこと云ふ烈しい衝動とが與へられた。

然し此の次ぎ及びその後何が続くであらうかは私も十分には知らない。只時々或る未來の秘密が其の深みに於て私に示されるのみである。

何故なれば、電光が中心に昇る時、吾々はそれを透し見るが、然し恰も嵐が閃めいて火の電光が昇るが、直ちに復た消える様に、それを把握することが出来ないから。

精神に於ても又同様で、彼が戦を貫徹した時は彼は電光の様に神性を見るが、然し罪の本源は直ちに再びそれを蔽ふ。何故なれば古いアダムは、その肉體を以て地に屬して、神性には屬しないから。

私がこれを書くのは私の名譽の爲めではない。却つて讀者が、私の智慧が何處に立つてゐるかを知つて、彼が私から私でないものを探がさず、却つて私であるもの、即ち凡ての人、それは吾等の王なるイエス、クリストに於て永遠の喜の冠の爲めに戦ひ、完全の希望の中に活きる處の、

凡ての人（と一）なる私を探す爲めである。――完全の初めは既に目焦に迫つてゐる復活の日である、それは電光の昇る東の圏内に明かに見ることが出来、その中に自然は恰も夜が明けた様に現はれてゐる。

夫故諸君は罪の中に眠つてゐるのを發見されない様に注意せよ。げに賢者はそれを注意するであらうが、神なき人は彼等の罪の中に止まつてゐる。諸君は云ふだらう、愚者はどうであるか、何時、彼等の夢は果てるであらうかと。これ彼等が肉の快樂の中に眠つたからである。見よ、如何なる夢であるであらうか。

私は若し私がこれをなす必要がなかつたならば、私の穩かな心情の中に休んでゐたい。然し、世界を造つた神は私よりも遙かに強い。私は彼の手の造つた物である。彼は私を彼の欲する處に置くことが出来る。

そして私は此の世と悪魔との見世物でなければならぬにしても、しかも私の希望は神の中なる未來の生命にある。彼の中へ私は敢行し、決して聖靈に逆らはない。アメン。

第十二章

聖なる天使の生誕と到來、並びに彼等の統治、秩序、及び
天上的歡喜の生活に就いて

(「主の言葉は Fiat (wordes 受く) に依つて本源靈を意志の中に把握した、これ天使の創造である」)。

扱、斯う云ふ疑問が起る、一體天使とは如何なるものであるかと。

見よ、神が天使を造つた時、彼は彼等を第七の本源靈、—それは即ち自然である—或は神聖なる天から造つたのである。

造つた、(schun) と云ふ言葉を諸君は、丁度地が凝固させられたと吾々が云ふ様に、凝固する或は結集すると解しなければならぬ。即ち同様に、全き神が動いた時に、鹹い性質は自然のサルニタを結集し、それを乾かして天使が出來たのである。そして各々の性質は凡ての場所に於て夫々運動していた様に、天使も亦斯の如きものとなつた。

深みを注意せよ。

先づ神の七つの靈があつた、其れ等七つの凡ては動搖し、光も又其の中に動いてゐた。そして神の七つの靈から昇る處の靈も又動いてゐた。

然るに造物主は彼の三性に従つて、三つの群勢 (Heere, hosts) を、各々遠く離れず、却つて互に相並んで一つの圏の中にある様に、造らうとした。扱注意せよ、靈(神の七つの靈)がそこに活動し、上昇した時、そこに被造物も又同様に生じ、そして各々の群勢の真中にはその心臓が結成されて、それから一つの大天使、或は大公が出來た。

丁度神の子は神の七つの靈の真中に産れ、そして神の七つの靈の生命であり光である様に、同様に、又天使の中の一人の王は彼の領域の真中に於て、自然から、即ち自然天、凡ての七つの本源靈の力から造られた。そして彼は今一つの群勢の心臓で、彼の全群勢の性質、力、強さを有し、又彼等の中最も美しいものであつた。

神の子が神の凡ての七つの靈の心臓、生命、及び力である様に、同様に天使の王も又彼の群勢の中に於てさうである。

扱て又、神的力量の中には七つの優れた性質があつて、それから神の心臓が産れる様に、同様に

各々の群勢の中には、或る有力な君主としての天使が、各々の首性質に従つて造られてゐる。その数を私は正確には知らない。彼等は王の傍にあつて他の天使等の指揮者である。

此處で諸君は、天使は凡て一つの性質ではなく、又彼等の力と強さとに於て互に同じくないと云ふことを、知らなければならぬ。成程各々の天使は凡て七つの本源靈の力を持つてゐるが、然し各々の中には何れか一つの性質が最も優勢で、その性質に依つて彼は榮光を與へられる (Glorified) のである。これ創造の時にサルニタは各々の場所にあつたから、天使も又かく (差別的に) なつたのである。そして天使の中最も優れた性質に従つて彼は呼ばれ又榮光を與へられる。

牧場の花はその性質に従つて各々の色を取り、又その性質に従つて各々の名を持つ様に、聖なる天使も又同様である。或るものは鹹い性質が最も強い、彼等は明褐色で、そして冷に最も近い性質である。

然るに神の子の光が彼等を照らす時は、彼等は其の性質に於て、褐色の電光の様に全く明るくなる。或るものは水の性質を有し、聖なる天の様に輝やかである。そして光が彼等を照らす時は結晶した海の様に見える。

或るものは苦い性質が最も強い。彼等は恰も電光の様に見える貴い青い石の様である。そして

光が彼等を照らす時は、彼等は恰も紅玉がそこから照らしてゐるかの如く、或は又生命がそこに起原を持つてゐるかの如く、赤緑に輝く。

或るものは熱の性質である。彼等は最も光り輝いて、黄く赤く、そして光が彼等を照らす時は恰も神の子の電光の様に見える。―或るものは愛の性質が最も強い。彼等は天上的喜悅の眺めであり、全輝やかで、光が彼等を照らす時は、恰も藍碧の愛すべき眺めの様に見える。

或るものは音の性質が最も強い。彼等も又輝やかで、光が彼等を照らす時は、彼等は電光の上昇の如く、恰も何物か自ら高まらんとするかの様に見える。

或るものは全自然、恰も凡ての混合の様である。光が彼等を照らす時は、彼等は恰も凡ての靈から造られた聖なる天の様に見える。

王は、然し、凡ての性質の心臓で、彼の領域を、泉の様に真中に持つてゐる、丁度太陽が遊星の真中にあつて、星の王であり、此の世界に於ける自然の心臓である様に。斯様にチュルビム、即ち、王なる天使も大きくある。

そして、丁度他の六つの遊星は太陽の傍にある指揮官で、太陽が彼等を支配し、その中に活動する爲めに彼等の意志を太陽に與へる様に、凡ての天使も又此等の意志を王に與へる。そして君

主なる天使は王天使と共に評議に與る。

然し、諸君は知らなければならぬ、彼等は凡て相互の間に只一つの愛の意志を持ち、その何れも他のものゝ姿や美を羨まない。何故なれば、彼等の間は神の靈の間に於けると同様であるから。彼等は又凡て同時に同じ神的喜びを持ち、又凡て同時に何等の區別のない同じ天の食物を食ふ。彼等は只色と力の強さに於て差別はあるが、然し、完全性に於ては何等の差別もない。何故なれば、各々は神の凡ての靈の力を其の中に持つてゐるから。夫故神の子の光が彼等の上を照らす時は、各々の天使の性質は色によつて顯はれるのである。

私は彼等の姿や色について只少しを語つたのみである。そこには更に多くのものがあるが、然し簡潔を期する爲めにそれを書くことが出来ない。何故なれば、神性は無限に上昇し現はれると同じく、天使の間にも探り盡し難い多くの色や姿があるから。私は諸君に、其の世界に於ては只五月の花薫る野の外に、他に正しい譬を示すことは出来ない、然しこれとて死んだ地的の模像に過ぎない。

天使の悦びについて

扨疑問が起る、然らば神の天使は天に於て何をするのであるか、或は何故又は何の目的で神は天使を造つたのであるかと。

汝等貪慾者よ、これに注意せよ、汝等此の世界に於て傲慢、虚榮、名譽、權力、金銀財寶をひさばり、貧しきものゝ汗と血とを搾り、彼等の勞作を強奪し、しかも自らは愚直な人民よりも善い者とし、神が自分を此の爲めに造つたのであると思ふ汝等貪慾なる者よ。

問ひ、何故神は天使の中に君主を造つて、凡てを同様に造らなかつたか。

見よ、神は秩序の神である。神が彼自身に於ける統治、即ち彼の生誕、彼の上昇に於てかくくになし動く如く、天使の秩序も又同様にあり。

彼の中には七つの首性質があり、それによつて全神的本質が驅馳されて、此れ等の七つの性質の中に於て無限に現はれ、しかも七つの性質は無限の中に於ける最初或は第一で、それによつて神的生誕はその秩序の中に永遠不變に存立する、そして神の七つの靈の真中に生命の心臓が産れ、それから神的喜びが昇る。天使の秩序も又この様である。

天使の君王は神の靈に従つて造られ、チェルビムは神の心臓に従つて造られた。そして神的本質が活動すると同じ様に天使も又活動する。神の本質の中に昇り、主としてその働き、例へば音

の上昇、神的活動、争闘、戦の上昇等に於て自らを現はす性質、その性質に最も適應してゐる天使の君主は彼の合唱を、彼の群勢と共に、唱歌、彈琴、舞踏、歡喜及び歡呼を以て始まる。

これ天の音樂である。各々の天使は彼の性質の聲に従つて歌ひ、君主はその合唱を、主唱者が生徒を導くやうに導く。そして王は喜び、彼の天使と共に大神の榮の爲め、天の悦の増大の爲めに歡呼する。これ神の心臓に於ける聖なる遊戲である。そして此の爲めに、神の喜び名譽の爲めに、彼等は造られたのである。

扱、天使の天上的音樂が昇る時、天的華麗、神的サルニタの中には、あらゆる生物、あらゆる型、あらゆる色が現はれる。これ神性は無限に、知り盡し難い種類、色、形、喜に於て現はれるからである。

扱、神性の中の或る本源靈が、恰もそれが首位或は第一であるかの様に、彼の上昇と愛の闘に於て特に著るしく現はれる時は、それに屬する君主なる天使も直ちに彼の部下と共に、彼の性質に従つて、唱歌彈琴吹笛、及び神の靈の中に昇るあらゆる天上的技術を以て、彼の天の音樂を始める。

然し、中央に中心が昇る、即ち神の子の生誕が凱戦として特に著るしく現はれる其の時は、凡

ての天使の全創造に於ける三つの王の統治から音樂と喜びとが昇る。

この喜が抑もどんなであるかに就いては、私は各々の精神にそれを考へる事を任せる、私はそれを私の敗壞した性質に於て把握することは出来ない、そしてそれを書くことは尙更出来ないのである。此の歌に依つて私は讀者を他の生命、そこでは讀者自ら合唱隊の中にあるであらう處のその生命の中へ導き入れたい。そこで始めて彼は此の靈を信するであらう。此の世に於て理解し得なかつたものをそこで視るであらう。

諸君はこれが決して石などから造り出した事ではなく、却つて電光が中心に昇る時は、靈はそれをよく見、認識する事が出来ると云ふことを知らなければならぬ。夫故注視せよ、此の場所に於てあまりに嘲笑する勿れ、恐らく諸君は神の前に嘲弄者とされ、王ルチファの様な事が諸君にも起るであらう。

扱疑問が起る、天使は歌はない時は何をするのであるかと。

見よ、神性がする事を彼等も又する。神の靈が、愛すべき抱客、接吻、相互の食ひ合として、互に自分の中に他を優に愛らしく産み、互の中に昇る時に、如何なる美味と美香とに於て生命と永遠の爽快とが昇るであらうか、これについて諸君は前に充分讀んだであらう。同じ様に天使も

又優に親しく、慈悲深く愛らしく、天の領域に於て互に散歩し、そして天の驚くべく愛すべき姿を視、生命の恵みある實を食ふのである。

そこで諸君は問ふであらう、彼等は互に何を語り合ふかと。

見よ、汝、傲慢虚飾の人間よ、世界も汝にはあまりに狭く、汝に等しいものは他にはないと汝は考へてゐる。今顧みよ、汝は汝の中に果して天使の性質を持つか、悪魔の性質を持つかを。扱誰に私は天使を比較すべきであるか。

私はそれを小さな子供—かの五月美しい薔薇の花の咲く時、互に美しい花の中を散歩し、それを摘み取つて立派な花環を作り、そしてそれを手に持つて喜び、常に美しい花の色々の形を語り合ひ、又彼等が美しい花の中を行く時は互に手を取り合ひ、彼等が家へ歸る時はそれを兩親に與へて喜び、兩親も又子供を喜び、そして神の美しい五月に互に喜び合ふ、小さな子供に比較するのが一番よいと思ふ。

そこには心よりの愛、穏和な愛、親しい會話、恵みある同棲以外に何物もない。そこでは一人は常に他のものを見、他のものを尊敬することを喜ぶ。彼等は何等惡意或は奸計或は欺瞞を知らない、却つて神的果實と愛情とは彼等凡てに共通で、そこに何等の不滿も嫉妬も反對もなく、彼

等の心は凡て愛の中に結合してゐる。

この天に於ける愛する子供等が互にかく親しくふるまうと云ふ事に於て、神性は、恰も兩親の其の子供等に於けるが如く、最上の愉快と満足とを持つてゐる。何故なれば、神性は又自分自身の中、一つの本源靈は他の本源靈の中に於て、同じく遊び樂しむから。

夫故天使は彼等の父がする以外の何事もすることが出来ない。これ福音書にある様に、吾々の天使的の王なるイエスキリストが地上に吾々と共にあつた時證明した處である。彼は言ふた、「誠に實に爾曹に告げん、子は父の行ふ事を見て行ふの外は何事をも行ふこと能はず、そはすべて父の行ふ事を子も亦行へばなり」(約翰、五ノ十九)。また「もし改まりて嬰兒の若くならずば天國に入ることを得じ」(馬太、十八ノ三三)と。

これによつて彼は、吾々の心が、神の聖なる天使の様に、愛に於て結合し、又吾々は神の天使の様に新しく、愛を以て互にふるまひ、互に愛し、尊敬を以て相ひ迎へなければならぬ事を言ふたのである。

決して吾々が互に詐り欺き、大なる貪慾の心から他人の口にある一片を奪ひ取り、又は他人に對して誇り傲ぶり、彼の悪い悪魔の奸計を用ゐる待ない人を輕蔑すべきではないのである。

オ、否、否、斯の如き事を天使は天に於てしてはゐない、却つて彼等は互に相愛し、何れも自分を他より美しいとは思はず、各々他に依つて喜を持ち、他の美しい姿と愛とを喜ぶ、そこから彼等相互の愛が生じ、互に手をひいて導き合ひ親しく接吻するのである。

深みを注意せよ。

丁度生命の電光が神的力の真中に昇る時は、神の凡ての靈は彼等の生命を得、非常に喜び、そして其の時愛すべき神聖な抱客、接吻、味ひ、感じ、聞き、見、嗅ぎがある様に、天使に於ても一つのものが他のものを見、聞き、感ずる時、彼の心臓には生命の電光が昇り、そして神性に於ける如く一つの靈は他の靈を抱容する。

此處に於て神の天使の根本理、最高の秘義を注意せよ。

若し諸君が、天使の心臓に昇る彼等の愛、謙遜及び友愛を知りたいならば、次ぎの事を注意せよ。

各々の天使は全き神性と同様に造られ、言はゞ小さな神である。これ神が天使を造つた時彼はそれを自分自身から造つたからである。そして神は一つの場所にも他の場所にも差別なくあつて到る處父、子及び聖靈である。

此の三つの名及び力の中に、天や此の世界及び諸君の心が考へ得る凡てのものがある。そして

若し諸君が、略んどその中を見得ない様な、又は略んど見別け得ない様な小さな圈を描いても、否諸君が想像し得る最小の點よりも尙小さい様なものであつても、その中には既に全き神的力がある、そして神の子はその中に産れ、聖靈はその中に於て父と子とから出る。若しそれが愛の中にならば、それは怒の中にある、「聖きものには汝（エホバ、神）は聖く、邪惡なるものには汝は邪惡なり」（詩篇十八ノ二十六）とある様に。何人でも神の怒を己の上に喚び起すものは、怒は喚び起された其の場所に、神の凡ての靈の中に於て現はれる。之れに反して、神の愛の喚び起される所には、愛は其の場所の全き神性の全き生誕の中にある。

そして此の點に於ては何等の差別もない、天使は凡て各々他のものと同じく、天的自然なる神のサルニタから造られた。只一つ彼等の間の相違は、神が彼等を造つた時、各々の性質はそれぞれ非常に運動して、その最高の生誕及び上昇の中に於てあつたと云ふ事である。夫故天使は多種多様な性質を有し、種々なる色や美を有つ様になつた、しかも凡ては神からである。

かく各々の天使は神の凡ての性質を持つてゐるが、然しその中或る性質が特に最も強く、それに従つて彼は名づけられ、又その中に於て榮光を與へられる。

丁度神の中の諸々の性質は、その一つの性質は常に他の性質を産み、その中に昇り、それを心から愛し、一方は他方から常にその生命を得、そして電光は甘い水の中に於て熱の中に昇り、生命と喜とはそこに起源を持つてゐる様に、天使に於ても又同様である。彼の内的生誕は、彼以外に神の中にある外的生誕に外ならない。

丁度、神の子は天使以外に甘い水の中の熱の真中の源泉に於て、神の凡ての七つの霊から産れ又七つの霊はそれから彼等の生命と喜とを得ると同じ仕方、神の子は又、甘い水の中の熱に於ける心臓の真中の源泉に於て天使の中に産れ、そして再び天使の凡ての七つの本源霊を照らす。

又聖霊は父と子とから出て、凡てのものを構成し、形成し、愛する様に、天使に於ける聖霊も彼の仲間の中に出て行き、それを愛しそれと共に喜ぶ。

神の霊と天使の霊との間には、只天使は被造物で、彼等の形體的本質は初を有つてゐると云ふ事以外に何等の相違はなく、彼等が造られたその力は神そのもので、永遠からあり又永遠に存続するものである。夫故彼等の動作は人間の思想の様に迅速で、彼等が行かうと欲する所に彼等は既にあるし、又彼等の欲するがまゝに大きくも小さくもなることが出来る。

そしてこれが天に於ける神の真正の本體、否、天そのものである。若し諸君の眼が開かれたな

らば、諸君はそれを地球に於て、諸君が今あるその場所に於て明かに見ることが出来るであらう。何故なれば、神はそれを肉體の中に閉されてゐる人間の霊に見させる事が出来、又自ら肉の中に於る彼に啓示することが出来るやうに、彼は又自らそれを欲するならば、肉體以外に於てもなすことが出来るから。

オ、汝此の世の罪の家よ、如何に汝は地獄と死とに圍まれてゐるか。醒めよ。汝の復活の日は迫つてゐる。夜は明ける、朝紅^{アサベレ}が現はれてゐる。オ、汝愚かなる死んだ世界よ、何故汝は象徴^{シンボル}、奇蹟を求むるか、汝の全身は凍つたのか。汝は眠より醒めやうとしないのか。見よ大いなる象徴が汝に與へられてゐる、然るに汝は眠つてそれを見ない。夫故主は汝に、汝の罪によつて汝が喚び起した彼の熱心に於て、一つの象徴を與へるであらう。

天使の凡て三つの王國の全き天上的喜悅に就いて

靈は明かに次ぎの事を示す、即ち各々の天使の造られた場所、即ち、其の中及び其れから彼が被造物になつた處のその天的自然の場所或は位置は、彼自身の座であり、彼が神の愛の中に止る間、彼はそれを自然法に従つて所有する、と云ふ事を。何故なれば、それは彼が被造物となる前に

永遠から持つてゐた位置で、彼がそれから造られた處のサルニクは既にその場所にあつたから、夫故その座は、彼が神の愛の中に活動する間は、自然法に従つて彼に屬するからである。

然し、諸君は、神は其の爲めに束縛されて、彼が天使を最初造つたよりも天使が他の動作をしなくても、彼をそこから追ひ出すことが出来ない、と思つてはならない。何故なれば、天使は愛の中に、又從順の中に止まる間は、其の場所は自然法に従つて彼のものである、然るに彼が傲つて其の場所を怒の火に點火する時は、彼は彼の父の家を點火し、彼の造られた其の場所の反對意志となり、そして彼の傲ぶり以前には一つであつたものを二つとするから。

若し、斯うなれば、彼は彼の形體的自然法を保有し、場所は又己れのもを自分に保有する。しかし、初を有する被造物が、被造物以前に存して何等の初もない第一のものに反對し、且つ彼が造つたのではなく、却つてその中に於て彼が愛によつて被造物に造られた處の、その場所を敗壞し、そしてその愛を怒の火にしやうとするならば、愛は正當に怒の火と共に被造物をも吐き出してしまふのである。

こゝから此の世界に於ける権利 (Rechte) と云ふものが生じた。即ち、子が父に逆ひ父を打つ時は彼は父の遺産を失ひ、父は彼を家から追ひ出すことが出来る。然るに彼が父に従順であるな

らば、父は彼を廢嫡する何等の権力も持つてゐない。

此の地上の権利は、他のモーゼの書にかゝれてある多くの此の世の権利と共に、その起源を天から取つてゐる、即ちこれ等凡てはその最初と起源とを天に於ける神的自然から取つてゐるのである。これを私はその場所に於て神性に於ける正しい根據から證明しやうと思ふ。

扱或る者は言ふであらう、

然らば天使は彼が造られたその場所に全然結び付けられてゐて、そこから離れてはならず又離れることは出来ないのかと。

否、神の靈は、彼等が上昇して互に活動し合ふことが出来ない様に束縛されてはゐない様に、天使も又全く彼等の場所に結び付けられてはゐない。

丁度、神の靈は常に相互の間に昇り、彼等の生誕の中に於て愛の遊戯をなし、しかも各々の靈は彼の自然的の座、或は位置を神の生誕の中に有して、決して熱が冷に變り、或は冷が熱に變ることなく、却つて各々の靈は各々の自然的位置を保有し、しかも他のもの、中に昇る——こゝから生命はその起源を得るのである。

之れと同様に、聖なる天使も凡て三つの王國の中に於て互に運動し活動し、それによつて一つ

のものは他のものを受けて孕む、即ちそれが他のもの、姿、友愛、及び徳から彼の最高の喜をう
る。そしてしかも各々のものは、彼がその中に於て被造物になつたその彼の自然的の座、或は位
置を彼の所有として保持するのである。

又丁度、此の世に於て一人の人に、彼が心から待ち望んで居た親しい血縁の友が外國からでも
歸つて来る時は、彼は非常に喜び、親しく挨拶し歓迎し、又そこに楽しい愛の會話があつて、主
人は客に出來得る限りのもてなしをする——しかもこれさへ天のものに較ぶれば只冷たい水であ
る。

聖なる天使が互の間にするこゝもこれと同様である。即ち一つの王國の主が他の王國に行く時
或は一つの君主的性質の主が他の君主的性質の主のもとに行く時は、そこには只愛の抱容、全く
悦ばしい會話、親しい尊敬、全く恵にみちた愛の散歩、正しい謙遜な行爲、親しい接吻と指導と
の外何物もない。そしてこゝに愛すべき合唱の舞踏が始まる。

小さな子供が五月の花の中を散歩し、時々非常に大勢のものが一所になる時は、彼等は親しい
會話をなし、多くの色々の花を摘む。それがすめば彼等はそれを手に持つて暫くの間合唱の踊を
なし、彼等の心からの喜を歌つて楽しむ。天に於ける天使も又、彼等が他の群勢を迎へた時はこ

れと同様である。

此の世界の敗壞した自然は、自ら天上的の形を造り出そうとして最上の努力を以て働いてゐ
る。そして時々、小さな子供が兩親の教師とならなければならぬ、若し兩親がそれを理解する
ことが出來たならば、或はしやうと思ふならば。然し悲しい哉、今や敗壞は若い者と年寄りに及
んでゐる、諺にも云ふ様に、大人（七）の歌つた様に若い者も又習つたから。

天使の此の深い謙遜によつて靈は此の世の子等に、彼等も又相互の間に斯様な愛を持つてゐる
か、彼等の間に斯様な謙遜があるか、彼等はどんな天使の種類であると思はれるか、彼等は果し
て天使に似てゐるかどうか——彼等もその中には第三の天使の王國を持つてゐるのである——を顧る
ことを忠告する。

見よ、靈は此處に暫くの間汝の目の前に汝の愛、汝の謙遜、汝の友愛を現はし示すであらう。
汝美しき天使の花婿よ、汝の装ひを見よ、如何に楽しい喜を汝の花嫁は汝に於て得るであらうか
汝愛すべき天使、日毎惡魔と舞踏する汝よ。

今日に於ては、或る人が昇進して少しの位置でも得るならば、彼には最早彼と同じくないもの
は何等の價値もなくなる、彼は他の人々を只彼の足場と思ひ、直ちに奸計を以て彼等の財寶を奪

ひ取らうとはかる。若し奸計を以て出来ないならば、暴力を以ても、彼の傲慢心を満足させやうとする。

若し實直で、自分の言葉も丁寧に使ひ得ない様な人が彼の前に来る時は、彼は彼を恰も犬かの様に輕蔑する。そして若し其の人が彼に用事があつても、彼の目には只世間的に名望ある人のみが正しいのである。顧みよ、汝は實に如何なる天使であるか。次の章の惡魔の墮落に於て汝は汝の鏡を見出すであらう。

又今日此の世の學藝について幾分か學び、或は普通の人々よりも幾分か多く研究した人には、最早如何なる人も彼と並ぶことが出来ず、學藝については決して彼と語ることが出来ず、又彼の傲慢な道を従うことが出来ない。一言で云へば、愚直な人は彼の愚者とならなければならぬ。そして彼は傲慢な天使で、彼の愛に於ては死んだ人間である。此の點も次ぎの章に於てその鏡を持つであらう。

第三に、若し今日或る人が他の人よりも富んでゐるならば、貧しい人は彼に愚者とされなければならぬ。若し彼が彼の隣人よりもよい着物を着るならば、貧しい者は最早彼には何等の價値もない。夫故かの古い歌は今日最も流行してゐる。それは斯うである、

富めるものは貧しきものを強いて

彼より彼の汗を奪ふ

只彼の銀貨の鳴り響かん爲めに

此等の天使も又次ぎの章に於て、彼の鏡の前に招かれるであらう。

第四に、實に全々惡魔の様な一般的傲慢、各々他のものを超え、輕蔑し、詐り瞞し、貪り、嫉み、憎み、其の爲めに世界は今地獄の火の様に燃えてゐる—ア、しかも永遠に！—處の傲慢がある。オ、世よ、汝の謙遜何處にありや、汝の天使の愛何處にありや、汝の友愛何處にありや、一方に於て口が今、「神汝を惠まんことを」と云へば、他方に於て心は「然り用心せよ」と思つてゐる。

オ、汝美しき天使の王國よ、如何に汝は美しく装つてゐたか、如何に惡魔は汝から殺戮の窟を造つたか、汝は花の装ひの中にあると思ふか、否、地獄の中にある、若し汝の目が開くならば汝はそれを見るであらう。或は靈は酔つてゐて汝を見ないと思ふか！オ、彼は汝をよく見る、汝の恥は全く裸で神の前にある。汝は淫亂の女である、夜晝淫を賣つて、しかも言ふ、我は貞節なる處女であると。

オ、如何に汝は、聖なる天使のもとに於ては美しい鏡であるか、汝のうまさ愛と謙遜とを嗅げ、それはむしろ悪魔の臭がしはしないのか。これ等のもの凡ては次ぎの章に於て客として招かれるであらう。

三つの天使の王の君主的首位或は権力に就いて

神性はその本質に於て三重である、即ち神の七つの霊からの顯出が父と子と聖靈とに於ける唯一の神として、三重に顯はれて産れ、その三重の中に全き神的力量が存在し、凡てのものも又存在する、しかも三つの人格は、神性の中に於て別々に離れた本質ではなくて、互の中に一つとなつてゐる。丁度同じ様に神が發意して天使を造つた時、三つの異つた天使が自然の最もよい核心、神の自然に於ける三性の本質から、神の七つの靈に於ける三性が持つてゐると同じ様な権と力とをもつて造られた。何故なれば、神の三性は神の七つの靈の中に昇り、そして又再び凡て七つの靈の生命及び心臓であるから。斯様に又三つの天使の王も、各々彼の群勢或は自然の場所に於て昇り、その場所の天使の統御については自然的の主である。場所は然し、不變なる神の三性が自ら保有し、王は天使の統御を保有するのである。

扱丁度神の三性は全き 中の凡ての場所に於て唯一の本質で、互に人體の各々の肢の様に結合し、又凡ての場所と、人間の肢が各々同じくないがしかも神の一つの身體である様に、一つの場所は他の場所よりも異つた構造であるが、然し凡て一つの場所であると同様に、三つの天使の王國も互に結合して別々に分離してはゐない。何れの天使も、これ余の王國である、他の如何なる天使も來てはならないと云ふ事は出来ない。勿論それは彼の最初の自然的の(自然法による)世襲財産であり、又何時までともそうであるが、然し、他の凡ての王及び天使は、一人の父から産れた彼の正しい自然的の兄弟で、凡て同時に彼等の父の王國の世嗣である。

丁度神の本源靈は各々彼の自然的生誕の座を持ち、彼の自然位置を保持するが、然し、他の靈と共に唯一の神である。若し他のものがなかつたならば彼も又無いであらう。聖なる天使の主も又斯様に造られてゐる。そして神に於けるより以外の形態を有しない。

夫故彼等は凡て、彼等の父の國に於て、愛する兄弟の様に互に親しく平和に住んでゐる。そこには何等これ以上遠くへ行つてもよい悪いと云ふ様な限界はない。

扱或る愚鈍な人は問ふであらう、何に依つて天使は歩むか、或は何の上に彼等の足を踏むのであるかと、

私は此處で諸君に眞の根據を知らせようと思ふ。天に於ては此處で諸君が私の文字の中に見出すよりも決して異つたものはない。何故なれば、靈は曇らせられることなくして此の深みを見、又それは非常に理解し得らるべきものであるから。

天の全き自然は七つの本源靈の力から成つてゐる。そして第七の本源靈の中に自然、即ち、凡ての性質の感知性がある。それは全々輝やかで雲の様に厚く、結晶した海の様子に明瞭で、それを透して凡てのものをみる事が出来る位である。しかも全深みは上も下も皆斯様である。

天使も又斯様な體を持つてゐるが然しもつと乾いて堅く結集しゐる。そしてその體は自然の核心、自然の最上或は最美の光輝 (SHINE) である。

彼等は彼等の足を、雲の様に硬い結晶の海の様子に明かな神の第七の靈の上に踏み、その中に於て彼等の欲するがまゝに上に昇り下に降る。彼等の動作は神的力量そのもの、様に迅速であるが、然し凡てその各々の性質に従つて、或るものは他のものよりもつと迅速である。

此の同じ第七の自然靈の中に又、天的の果實、色及び凡て感知得られるものが生ずる。其の様子は恰も天使が天と地との深みに住み、そこで昇つたり降つたりするのであるかの様な形である。そして彼等が何處に居やうとも彼等の足は、恰も地球の上に立つかの様にその上に休んでゐる。

古代の人々は天使を羽を持つた人間の様に描いた。然し彼等は何等の羽をも要しない。彼等が人間の様に手や足は持つてゐるが、然しそれは天的の仕方に於てゐる。

死者の復活の日には天使と人間との間に何等の區別もないであらう。彼等は同じ一つの形式を持つてあらう。私はこれについてはその場所に於て明かに證明しやうと思ふが、我等の王イエスキリスト自身も明かに言ふてゐる、復活すれば彼等は神の天使の様であると(馬太二十二ノ三十)。

三つの天使の王の大なる榮光と美とに就いて

これ實に人々が犬に向つて抛げつける眞の根棒である。何故なれば、此の歌によつて王ルチアは恐らく悲痛の爲めに彼の髯を引き抜くであらうから。

扱深みを注意せよ

王或は大公ミカエルに就いて。

ミカエルとは神の強さ或は力を意味する。そして斯く呼ばれるのは、實に、彼が七つの本源靈からその核心として結成され、父なる神の代りとしてそこにあるからである。

然し其の意味は、彼が全き深みに於ける七つの靈から成り立つ創造的な父としての神であると云ふのではなく、却つて、自然の被造物の中には、七つの本源靈に於ける父としての神の様に、

凡ての被造物を支配する被造物もあると云ふ意味である。

神が自ら創造的になつた時は、彼の三性に従つて創造的になつたのである。そして丁度、神に於ては三性は最も大きく最も優れたものであるが、しかし彼の驚くべき整合、様態、變化は計ることが出来ず、彼の活動に於て多種多様に顯はれると同じ様に、彼は又彼の三性の最高の首位(Primat)に従つて、三つの主、或は君なる天使を造つたのである。

ついで彼は七つの本源靈から夫々の性質に従つて天使の君主を造つた。即ち、音の天使或は君主、或は迅速の使者なるガブリエル(Gabriel)やラファエル(Raphael)及びミカエル王國の他の多くのものである。

然し諸君はこれを、恰も此れ等の王なる天使が神性、即ち被造物とは異なる神の七つの本源靈の中を支配してゐると思つてはならない。否その各々のものは彼の被造物の上を支配してゐるのである。

丁度神の三性は神性に於ける無限の本質、及び多種多様な型像や形態を支配し、それ等を變化し構成する様に、三つの天使の王も又心臓及び最深の根源に到るまでの彼等の天使の主である。

たとへ彼等は彼等を造つた神自身の様に、自ら形體的に變化することは出来ないが、然し彼等は

天使等を形體的に支配し、恰も肉體と精神とが互に結合してゐる様に彼等に融合し結合してゐる。

何故なれば、王は彼等の頭、彼等は王の四肢であり、又本源的君主としての天使は、(die Quell-fürsinnig) 丁度人間に五感即ち手足、口、鼻、目、耳等がある様に、王の顧問或は有司で、それによつて王は彼の職務を遂行するから。

扱又、凡ての天使はその王に結合してゐると同様に、王も又彼の創造者なる神に、肉體と精神との様に、結合してゐる。神は肉體を意味し、天使の王は精神を意味する。彼は神の體の中にあり、その中に於て被造物とされ、又その中に精神は恰も彼等の巢の中にあるかの様に、永遠にある。夫故神は彼を彼の所有物として、丁度精神が肉體に於て榮光を與へられる様に、かく高く榮光を與へるのである。

斯く王或は大公ミカエルは、彼の榮光或は明晰透明に於ては、父なる神と同様である。そして神の山(Berge Gottes)に於ける神の王或は君主で、彼が造られたその深みに於て、彼の職務を持つてゐるのである。

彼及び彼の天使等がその中に於て造られた處のその空間は彼の王國で、彼は自然に於ける父な

る神の愛する子で、被造物としての子で、彼に於て父はその喜を持つてゐる。

諸君は彼を神の心臓即ち光と同視してはならない、これは全き父の内にあつて、父なる神自身の如く初もなく終もない。

此の君主は被造物で初を持つてゐるが、然し彼は父なる神の内に入り、又彼が彼自身から造つた愛する子として彼の愛の中に彼と結合してゐる。夫故神は彼に、天に於ては神自身以外に彼よりも高く、美しく又力あるものは何物もない位の、名譽と力と權との冠を與へた。これが靈の認識に於ける眞の根據によつて、正しく書き記された一人の王である。

他の、現今は彼の墮落の故にルチファと呼ばれる、王に就いて

王ルチファよ、茲に汝が何物をも聞かず、又見ない爲めに、少しく汝の目を閉ぢ耳を塞げ。然らざれば、汝は汝の椅子に他のものが座し、汝が世の初以來出来る丈け陰蔽し抑壓してゐた汝の恥が、未だ世の終にも達しない前に全々暴露されるのを見て、無殘な恥辱をうけるであらう。今自分は汝の王^(二四)としての首位を書き記すであらう、汝の爲めではなく人間の爲めに。

此の力あり榮ある美しい王は、彼の墮落の故に、彼の本當の名を失つてしまつたのである。何故なれば、彼は今ルチファ、即ち神の光からの追放者と呼ばれるから。彼の名は始めは斯ふでは

なかつた。何故なれば、彼は明かな光の中に於ける神の心臓の被造物的君主或は王、天使の三人の王の中最も美しいものであつたから。

彼の創造に就いて

丁度ミカエルが父なる神の性質、様態、特性 (Eigenschaft) に應じて造られた様に、ルチファは又子としての神の性質、様態、美に應じて造られた。そして愛する子或は心臓として愛に於て彼と結合し、彼の心臓も亦恰も彼自身神であるかの様に光の中心にあつた。そして彼の美は凡てのものに優つてゐた。彼の抱圍^(二五)或は主なる母は神の子であつたから、彼は神の王或は君主として存したのである。

彼の領域、場所及び空間、そこに彼が彼の群勢と共に住み、その中に於て彼が被造物とされ、又それが彼の王國であつた處の、その領域は造られたる天、及び、吾々が吾々の王イエスキリストと共に住む此の世界であつた。

吾々の王^(二六)は今、王ルチファの如き神的全能を以て、追放されたルチファの王的椅子に座し、王ルチファの王國は彼のものとなつてゐる。王ルチファよ、これを如何に見るや。

扱、丁度父なる神は彼の子と大いなる愛を以て結合してゐる様に、同様に王ルチファも王ミカエルと共に、一つの心臓或は一つの神かの様に、大いなる愛を以て結合してゐた。これ神の子の源泉はルチファの心臓にまで達したからである。彼は彼の形體の中の光を彼の所有として持つてゐた、その光は、それが光る時は、彼の外にあつた神の子の光と、恰も一つのものゝ様に、作用し結集した。彼等は二つであつたが、然し、肉體と精神との様に互に、結合してゐた。

そして丁度神の光は父の凡ての力の中を支配する様に、彼も又神の力ある王として凡ての彼の天使等を支配した。そして彼の頭には天の最も美しい冠を戴いてゐた。

此處で暫く私は彼を抛棄する。何故なれば、私は次ぎの章に於て尙多く彼を取り扱はなければならぬから。彼は暫くの間尙彼の冠を誇るであらう、然し間もなくそれは奪ひ取られなければならない。

第三の天使の王ウリエルに就いて

此の祝福の君主、王は、光、或は電光、或は光の現出から彼の名を得、そして聖靈としての神を意味する。

丁度聖靈が光から出て凡てのものを形造り、凡てのもの、中を支配してゐる様に、此のチェルビムの權と慈悲祝福とも又同様である。彼は凡ての彼の天使の王及び心臓である、即ち彼の天使等は彼を只視さへすれば、彼等は彼等の王の意志を感傳 (impart) するのである。

丁度心臓の意志は身體の凡ての肢に感傳し、心臓が決定したものを全身體が實行する、即ち心臓の中心に聖靈が昇つて全身體の凡ての肢を照らす様に、此のチェルビスも又、彼の全き光輝と意志とを以て、凡ての彼の天使に感傳し、彼等の凡ては恰も一つの體の様になつてゐ、そして王はその中の心臓である。

此の光輝ある美しい君主は聖靈の様態と性質とに應じて造られた。そして誠に神の輝く美しい君主で、他の君主とは愛に於て、一つの心臓の様に、結合してゐる。

これが實に天に於ける神の三つの君主である。若し生命の電光、即ち神の子が神の中心及び本源靈に昇つて榮えを顯はす (凱旋する) 時は、聖靈も又自ら凱旋しつゝ、昇る。此の上昇と共に聖三一體が此等の三つの王の心臓にも昇り、そしてその各々はそれ〴〵の性質と様態とに従つて凱旋し榮える。

此の上昇に依つて全き天の群勢、凡ての天使等は撻ち榮え、喜ばしくなり、美しき *Te Deum*

Ianlanus (我等は汝を讚美す) が昇る。そして此の心臓の上昇に依てメルキュリウスは心臓、及び天の全サルニタの中に喚び起される。其の時神性の中には、天の不可思議な美しい型像が色々な色彩や様態に於て昇り、各々の靈はそれ〴〵特異な形態に於てあらはれる。

私はそれを、紅玉、綠枉玉、黃玉、縞瑪瑙、青玉、金剛石、碧玉、赤玉、紫水晶、綠玉石、紅縞瑪瑙、紅玉などの寶石以外に何物とも比較することは出来ない。

斯様な様態と色彩とに於て神の自然天 (Zurthimmel Gottes) は、神の靈の上昇と共にあらはれる。若し神の子の光がその中に照るならば、それは恰も上に述べた種々なる石の色の、明かな海の様である。

天的自然に於ける性質の驚くべき整合、變化、及び上昇に就いて

靈は私をして天の様態を認識せしめるから、私はそれを書き記さないのでおくことは出来ない、そしてかくすることを欲する彼の (神の) 意志を果なければならぬ。惡魔はこれに對して嘲弄者と輕侮者とを喚び起すであらう、然し、私はそれ等にかゝはつてはゐない。私にはこの神の慈悲ある啓示が十分である。彼等はそれを永遠の恥辱を以て經驗する時まで嘲るであらう、然しその時悔悟の泉は彼等を嚙むであらう。

私は又自ら天に昇つて肉の眼を以てそれを見たのではない、況して誰からも聞かされたのではない。何故なれば、たとへ天使が來てそれを私に言つたとしても、神の照明がないならば、私はそれを理解することが出來ず、況して信じないであらうから。これ、惡魔は自ら天使の貌に裝つて人間を誘惑するから、彼が果して神から遣はされた善い天使であるかどうかと云ふ事を私は常に疑うからである。(哥林多、後書、十一ノ十四)。

然しそれは照り輝く光として、聖靈の天上的生誕或は上昇の様に、靈の烈しい衝動によつて生命の中心に産れるから、私は、たとへ世界が常に私を嘲らうとも、それに反對することは出来ない。

靈は確證する、最早極めて暫くの間である、その時たてば電光は此の世界の全範圍に昇るであらう、此の靈はその日に對する使者、先驅者、豫告者であると云ふことを。

其の時聖靈の生誕の中に發見されなかつた人には永遠に此の生誕が昇らず、却つて彼は死んだ堅い、暴性と敗壞との源が永遠にその中に昇る處の炎の石として、暗黒の源に止まるであらう。其處で彼は地獄の忿怒の生誕の中に於て永遠に嘲るであらう。何故なれば、樹の性質に應じて實も又それと同じ様になるから。

諸君は天と地獄との間に住んでゐる。その何れに諸君が種を蒔かうと、其處に於て諸君は又蒔り取るであらう、そしてそれが永遠の食物となるであらう。若し諸君が嘲弄と輕侮とを蒔くならば、諸君は又嘲弄と輕侮とを蒔り取り、それが諸君の永遠の食物となるであらう。

「さればオ、人の子等よ、心せよ、あまりに此の世の智慧に信賴する勿れ、それは盲で、盲に生れついてゐる。然し若し生命の電光がその中に生れるならば、それは最早盲ではなくて見る事が出来る。約翰三ノ三にクリストは言つてゐる、「人もし新に生れずば神の國を見ること能はじ」と。實に彼は斯の如き方法で、聖靈―それは心臓の甘い源水の中に於て電光の中に昇る―の中に新らたに生れなければならぬのである。」

夫故クリストは―光の生誕は心臓の甘い水の中に昇るから―水の中での洗禮、即ち聖靈の再生を命じたのである。此れ大いなる秘義で、又世の初以來今日まで凡ての人に隠されてゐたものである。私はそれを其の場所に於て明かに記し、證明しやうと思ふ。

扱天の樣態を注意せよ。

若し諸君が此の世界を見るならば、諸君はそれによつて天の模型 (Typical) を見る。星は天使を意味する。何故なれば、丁度星は此の世の時の終りに至るまで不變であるなければならぬ様に

同様に天使も又天の永遠の時の中に於て永遠に不變で存しなければならぬから

元素は天の樣態の驚くべき整合、變化を意味する。何故なれば、丁度星と地球との間に於ける深みはその樣態に於て常に變化し、或は美しく輝き、或は曇り、或は風、或は雨、或は雪となり深みは急ち蒼く、急ち綠に、急ち白く、急ち暗くなる様に、天が色々の色や姿に變化することも又同様であるから。然しそれは此の世界に於ける様な風にはなく、却つて凡て神の靈の昇りに従つてゐる。そして神の子の光は永遠にその中に照る。然し生誕に於ける上昇は或る時は他の時よりもその程度に於て一層大きい。夫故神の驚くべき智慧は理解し得られないのである。

地は天的自然、即ち第七の自然靈を意味し、その中に構成、形像、色彩などが生ずる。鳥や魚や獸は天に於ける型象の多様な樣態を意味する。

これを諸君は知らなければならぬ。何故なれば、靈は明かに、天に於ては此の世界の獸や鳥や魚の様な凡ての型象又凡ての樹、草、花が生ずることを、明かに證明するから―しかし凡て天の形、明かさ、樣態に於てゐる。

然し彼等は生ずると同じ様に又再び消えてなくなる。何故なれば、彼等は、自然靈の中に於ける上昇する性質の生誕の中でかく造られたので、天使の様には結成されてはゐないから。

若し一つの形象が靈の中で形成されて存在する時、他の靈はこれと戦つて勝つ時は、それは再び、凡てそれ／＼の性質に應じて、破壊され變化させられる。これ神に於ては神聖なる遊戯の如きものである。

夫故此の世界に於ける被造物、例へば獸、鳥、魚、蟲の如きものも、永遠の本質としては造られず、却つて暫時的のものとして造られ、天の型象の様に消滅する。これ私が只單に手引として此處に書いたのみである。諸君は此の世界の創造の場所に於て尙十分に記されてゐるのを見るであらう。

第十三章

ルチファ王国の怖るべき、嘆くべき又痛ましき墮落に就いて

私は凡ての傲慢な、貪慾な、嫉妬深い、又怒り易い人々を此の鏡の前に招きたい。此處で彼等は彼等の傲慢、貪慾、嫉妬及び忿怒の起源を見、且つその結果と最後の報とを見るであらう。學者等は罪の初と悪魔の起源とに就いて種々なる怪物を造り、それについて様々な争をした。各々は自分こそ斧の柄を握んでゐると思つた。然し、それは今日に至るまで彼等總てに隠されてゐた。

然るに、今や恰も明かな鏡を見る様に、全く十分に啓はれ様としてゐる。夫故神の啓示の大きな日、その日には暴性と點火された火とは、光から分離される處の、日が近づいたと云ふ事が想像される。

夫故何人も自ら盲となつてはならない。何故なれば、人間が先きに失つたものを取り返す日が迫り、朝紅アサカ（黎明）が始まつたから。今や眠より醒むべき時である。

扱疑問が起る、然らば、ルチファ王國の最初の罪の起源は何であるかと。

此處に於て諸君は神性の最高の深みを再び捕へ、王ルチファは何から造られたか、或は彼に於ける最初の悪性の第一の源は何であつたかを視なければならぬ。悪魔と彼の徒黨、及び今も尙罪の中に孕まれる凡ての神なき人々は辯護して言ふであらう。神は彼等を放逐して彼等に不正な事をしたのであると。

或は今の世は言ふであらう、神は彼の豫定の計劃に於て或る人々は救はれ、或る人々は罰せられる様に定め、其の爲めに王ルチファが、神の怒の見せ物となる様に、放逐されたのであると。恰も地獄或は悪が永遠からあつて、神は其の中にも被造物がなければならぬと豫め定めたかの様に。そして彼等はそれを聖書によつて證明しやうと色々議論し主張する、たとへ彼等は正しい神の認識もなく、聖書の理解もなく、又聖書の中には或る誤つた事柄が挿入されてはゐるが。

クリストは云つた、悪魔は始より人を殺す者なり、偽り人なり、又眞理に居らずと、(約翰八ノ四十四)。然し、此れ等の辯明者や論争者は、忠實に悪魔に加擔して神の眞理を偽にかへ、神を以て常に渴き常に怒る悪魔で、悪を造り、且つ今も造らんとしてゐるものとする。夫故彼等は悪魔と共に凡て人を殺す者、偽り人である。

何故なれば、丁度悪魔が地獄と地獄の呵責との創立者、又父で、自ら地獄の性質を彼の玉座として造り備へた様に、此れ等の記者も又、虚偽と地獄の呵責との創設者で、悪魔の偽を助け完うし、慈悲深い、愛ある、親しい神を殺人及び怖ろしい破壊者とし、且つ神の眞理を偽にかへるからである。

豫言者を通して神は云つた、「我活くる如く確に、我は悪人の死するを悦ばず、却つて彼穢つて活きんことを悦ぶ」と。(以西結、三十三ノ十一)。又詩篇にはかく云つてある、「汝は悪き事を悦ぶ神に非ず」と(詩、五ノ四)。

のみならず神は人間に法律を與へて惡を禁じ、善を命じた。夫故もし、神が惡を欲し同時に又善をも欲するならば、彼は自ら自分に不一致でなければならぬ。且つ其の結果神性の中には破壊性があつて、一つの性質は他と反對に趨り、一つは他を破壊することにならなければならぬ。

扱此れ等は凡てどうなつてゐるか、或はどうして惡はその最初の起原を取つたか、これについて私は最も簡明にその最大の深みを明かにしようと思ふ。

これが爲めに靈は凡て悪魔に誘惑された人々を此の學校の鏡の前に招き、導いた。彼等はそこで惡魔をその心の中までも見るであらう。何人でも彼が出来得るのに偽を慎まうとしない人は、

此の世に於ても彼の世に於ても最早助はない。悪魔と共に蒔く人は悪魔と共に收めなければならぬ。電光の中心に於て示されてゐる、收穫は既に全く白くなつた、凡ての人は彼の蒔いたものを取り入れるであらうと。私は此處で私に托せられた金を、命せられた様に、利子を殖やす爲めに貸出そうと思ふ。私と商つて利を得たいと思ふ人は、誰でも、たとへ基督者でも、猶太人でも土其古人でも、異教徒でも、自由である。私には凡ては平等である。私の商店は凡ての人に開放されてゐる。何人も欺かれ偽はられることはなく、常に正しく取扱はれる。凡ての人はこゝで彼の主人の爲めに儲けうる様によく注意して取引するがよい。何故なれば、私の品物は或る人々には全く不思議で、又凡ての人が私の言葉を解するのでないから、凡ての商人が私の商品を取引するに適しはしない事を怖れるから。

夫故私は各々の人に、注意して取引をし、自ら富んでゐるから貧しくなる事はないと思ひ違はない様に警告した。實に私は不思議な商品を買つてゐる。凡ての人がそれを理解はしないであらう。

誰でも自ら飽満し、酩酊の狀に於て墜落し敗滅に陥る人は、その罪自らにある。彼は實に彼の理性と心情とが支導せらるべき光を心に要する。それがなければ私の商店に來ない方がよい。でなければ彼は自ら自分の豫想を欺くであらう。何故なれば、私の賣る商品は實に貴く高く、又全く鋭い理解を要するから。それ故注意せよ。そして諸君は梯子のない處へ高く昇つてはならない。諸君は墜落するであらうから。

然し、私にはヤコブの梯子が示された。それに依つて私は天迄も昇り、そして私の賣る商品を受取つた。夫故私の後に昇りたい人は酩酊してゐない様に注意せよ。否却つて彼は靈の劍を帯んでゐなければならぬ。何故なれば、彼は非常に高さに昇らなければならぬから。そして眩暈が時々彼の頭に来る。のみならず、彼は地獄の眞中を通して昇り、そこでいかなる侮辱と輕蔑とを受けなければならぬかを經驗するであらう。

私も又それを時々、悲しい心を以て、此の頭に經驗しなければならなかつた。太陽は時々消えた。然し再び昇り、そして度々消えれば消える程、益々明かに美しく再び昇つた。私はこれを私の名譽の爲めに書くのではなく、若し諸君にも同様である時に諸君がそれを失望しない爲めに書くのである。何故なれば、天と地獄との間にあつて悪魔と戦ふとする人には、悪魔は力強い王であるから、それは極めて困難な仕事に屬するから。

夫故靈の冑を着ることを注意せよ。それを着ないで私の商店に來てはならない。諸君は此れ等

の商品を悪く取扱ふであらうから。若し諸君が戦はうと思ふならば悪魔と世界とに離別せよ、でなければ諸君は勝たないであらう。若し諸君が勝たないならば、私の本は静かに置いて、諸君は昔の儘に止まれ。でなければ諸君は悪い報を得るであらう。「自ら欺く勿れ、神は慢るべき者に非ず」。(加拉太、六ノ七)

それは實に地獄の門を通して神に進まんとする人には「狭い道」である。彼は悪魔の多くの強迫を忍ばなければならぬ。何故なれば、人間の肉體は極めて若く柔かいが、悪魔のは粗く堅く其上暗く、暑く、苦く、鹹くあつて、此の二人は非常に悪い戦ひ相手であるから。

夫故私は恰も此の大なる秘義の序言の如きものとして、諸君に眞面目に警告する、若し諸君が此れを理解せず、しかも理解したいと欲するならば、諸君は聖靈の爲め、聖靈を以て神が諸君を照らさん爲めに、神に祈れと。聖靈の照明がなければ、諸君は此の秘義を解することは出来ない。何故なれば、人間の靈には堅い閉鎖があつて、これが先づ第一に開かれなければならぬ。人間はこれをなす事が出来ず、只聖靈のみが其の鍵であるから。夫故諸君が神性に入るべき開いた門を欲するならば、諸君は神の愛の中に歩まなければならぬ。これを私はこゝに諸君の注意までに云ふたのである。

扱注意せよ。

凡ての天使は第七の本源靈、即ち自然の中に造られ、自然から彼の形體が結集し構成された。そして彼の形體は彼の所有として與へられ、且つ恰も全神性が自由である様に、彼は自ら自由である。

彼は彼以外の何等の衝動をも有しない。彼の衝動と運動性とは全く彼の形體の中にある。その形體は全き神と同じ状態仕方である。又彼の光、認識及び生命は恰も全神の本質が産れると同じ仕方で産れる。何故なれば、彼の形體は結集し體化した自然靈で、他の六つの靈を含むが、これが形體の中に産れるのは恰も神性の中に産れると同じであるから。

扱、ルチファは天に於ける神の凡ての王の中で最も美しい、最も力強い體を持つてゐた。そして彼が彼の體の中に於て常に産んだ處の彼の光は、神の心臓、即ち子と合體して、恰も一つの物の様であつた。

然るに彼が自ら斯く美しい事を見、彼の内的生誕と大なる力とを感じた時に、彼の靈―これは彼が彼の形體の中に産み、彼の活ける生氣的靈、或は子、或は心臓である―は神的生誕よりも更に勝ち榮え、神の心臓以上に昇らうとして自ら傲ぶつた。

此處で深義を注意せよ。

中心の源泉、それは心臓で、そこから生誕があるが、に於て鹹い性質は苦い性質及び熱と摩擦する。そこで光が点火する。これ子である。子は彼の體の中に於て常に光を孕み、光は彼を照らし又活かす。

此の光はルチファに於ては天の様態に優る程美しく、そしてその光の中に完全なる理性があつた。何故なれば、凡て七つの本源靈は此の光を産むから。

抑然し、七つの本源靈は光の父で、彼等の欲する丈けの光を産むことが出来る。光は本源靈が彼に許したよりもより高く昇ることは出来ない。然るに光が産れた時は、それは凡て七つの本源靈を照らし、それ等凡ての七つを理性的にし、そして凡て七つは又光の生誕に彼等の意志を與へる。

抑然し、凡ての人は必要に従つて、光の生誕に於ける彼の意志をかへる力を持つてゐる。若しその時は、その靈はかく榮える事は出来ず、却つて彼の華麗を棄てなければならぬ。夫故凡て七つの靈は十分な力を持ち、その各は手綱を手に持つてゐて、産れた靈を制御し、彼れに適當以上昇らない様にする事が出来る。

然し天使の中にあつて光と理性とを産む七つの靈は、全き神と結合してゐて、神よりも外のもの、或はより高いもの、或はより多いものではなく、却つて同じ種類のものでなければならぬ。これ即ち彼等は全體の只一片で、神がそれを、神自身と同じ形式、方法に於て活動する様に、自分自身の中から造つたのであるからである。全體其物ではない。

然るにルチファに於ける本源靈はそうしなかつた。却つて彼等は、自ら最高の置位に座するのを見て、非常に強く烈しく活動し、遂に彼等の産んだ靈をして全く火の様になり、心臓の源泉へ恰も傲慢な處女の如く昇るに至らしめた。

若し本源靈が、未だ被造物とならず、創造前に神と伴つてゐた時の様に、穏和に愛らしく活動したならば、彼等は又神の子に等しい愛すべき穏和な子を産んだであらう。そしてルチファに於ける光と神の子とは一つの物、一つの作用、活動、一つの愛すべき抱擁、心情、モラル纏であつたであらう。何故なれば、神の心臓である大いなる光は、ルチファに於ける小さな光と、恰も若い子の様に愛らしく穏やかに、遊んだであらうから、ルチファに於ける小さな子は神の心臓の愛する兄弟でなければならぬから。

此の目的の爲に父なる神は天使を造つたのである。即ち神は彼の性質に於て多様で、彼の愛の

働きに於ける變化に於て理解し得られないと同様に、神の子とも云ふべき小さな靈、即ち天使の小さな光も又、神の心臓の前で大きな光の中に穩かに愛らしく遊び、それによつて神の心臓に於ける喜が益々増り、従つてそれが神に於ける神聖な遊戯となる爲めである。

天使に於ける自然の七つの靈は、彼等が創造前になした様に、彼等の父なる神の中に於て優に愛らしく遊び、そして彼等が自分自身から産み、彼等の體の光及び理性である處の新生の子を喜ぶべきである。そしてその光は神の心臓に穩かに優さしく昇り、神の光の中に於て恰も子が母の許で喜ぶ様に喜び、かくてそこに心からの愛と親しき接吻、全く穩和で愛すべき味がなければならぬ。

此の中に音が昇り、歌と樂と、生命と歡呼とをもつて響き、又凡ての性質は其の中で喜び、各々の靈は父なる神自身の様に、神的勞作をなさなければならぬ。七つの靈はこれをその完全なる認識に於て持つてゐた。何故なれば、彼等は父なる神と共に作用するから、神の様に凡てを見感じ、味ひ、嗅ぎ、又聞くことを得るから。

然し、彼等が自ら傲ぶつて烈しく點火した時、彼等は自然法に逆つて、父なる神がなしたよりも異つた事をした。これが全神性に反する源であつたのである。何故なれば、彼等は形體のサル

ニタを點火し、傲ぶり誇る子を産んだが、此の子は鹹い性質の中に於て堅く、粗く、暗く又冷たく、甘い性質の中に於ては燃え立ち、苦く又火の様であつた、そしてその音は硬い烈しい火の様な響で、その愛は神に逆ふ傲慢な敵意であつたから。

其の時點火された花嫁は、恰も傲慢な獸の様に、七つの自然靈の中に立ち、そして自分は神以上で、何物も自分に較ぶものがないと考へた。愛は冷却して神の心臓も彼女に觸れることが出来なかつた。何故なれば、兩者の間には反對意志があつたから、即ち神の心臓は非常に愛すべく穩和に活動したが、天使の心臓は全々暗く、堅く、冷く又火の様に活動したから。神の心臓は天使の心臓と接觸し、作用すべきであつたが、こゝに於て柔いものに對する堅いもの、甘いものに對する鹹いもの、光明に對する暗黒、又愛すべき溫暖に對する火、愛すべき調音に對する荒い叩きであるから、それは不可能であつた。

聞け、ルチファよ、汝が惡魔になつたのは誰の罪か、それは汝が許る様に神であるか。

オ、否、汝自身、汝の形體の中の本源靈、それは汝自身に外ならない、が斯の如き子を産んだのである。汝は神が、それに依つて汝が造られた處のサルニタを點火したと云ふ事は出来ない。

否汝が既に神の君主、王であつた後に、汝の本源靈がそれをしたのである。

夫故汝が若し、神が汝を斯く造つたとか、或は神が十分の理由もなく汝を汝の位置から吐き出したと云ふならば、汝は詐り者、人殺である。何故なれば、天の凡ての群勢は汝に反對して、汝自身此の狂暴の性質を造つたと證明するから。

若しそうでないならば、神の面前に出て自ら辯護せよ。然し汝はこれをせずとも自らよく知つてゐる、又それを敢てするに及ばない。汝は寧ろ再び新らしく蘇生る爲めに、神の子から親しい接吻を受けやうと欲しないか。若し汝が正しいならば、もう一度神を見よ、怖らく汝は健全になるであらう。

然し暫く待て、そうすれば他の者が汝の椅子に座つて接吻を受け、父に従順な子となつて父の行ふ様に行ふであらう。たゞ暫くの間待て、そうすれば地獄の火が汝を接吻し、汝は直ちに汝の寶冠を失ふであらう。

扱或る者は問ふであらう。然らばルチファの中にあつて、その爲めに彼が彼の位置から追ひ出された處の、神に反する敵意とは、一體何であるかと。

此處で私は諸君にルチファの核心及び心臓を精密に示そうと思ふ。そうすれば諸君は悪魔とは何であるか、或はどうして彼が悪魔になつたかを知るであらう。夫故注意して彼を客に招かない

様にせよ。彼は神、凡ての天使及び人間の仇敵、而も永遠の仇敵であるから。

若し諸君がこれを正しく會得し理解したいならば、諸君は或る人々のする様に神を悪魔としてはならない。彼等は云ふ、神は惡を造つた、そして尙或る人々の失はれる事を欲する、其人々は悪魔の詐りの増長を助け、かくて神の眞理を詐りに變へて、自ら嚴しい審判を招くのであると。

へ、注意せよ。全き神性は核心に於ける彼の最も内的な、最も最初の生誕に於て、全く嚴しい、怖ろしい鋭さを持つてゐる。其の中に於ける鹹い性質は極めて怖ろしい、鹹い、暗黒な、冷たい結集である、丁度水が氷になり、しかも絶えられない程嚴しく冷たい冬の様に。

見よ、斯く冷たい冬に於て、太陽が取り去られ、ば、其の冷たさはどんなで、又その粗い、堅い暗黒はどんなであらう。何等の生命も其處にはあり得ない。

最も内的な核心に於ける鹹い性質は、斯の如き状態で、それ自身、他の性質以外、神の中に、自存する。何故なれば、嚴しさは形體の結集と膠着とを造り、堅さはそれを乾かして、被造物として存する様にするから。

そして苦い性質は引裂き、突き貫し、斷ち切る源である。何故なれば、それが堅い鹹い性質を分割し、驅馳して可動性を造るから。そして此等二つの性質の間に、彼等の堅い、烈しい、苦い

摩擦、分裂、動亂から熱が産れる。これは苦い性質と鹹い性質との中に、暴しい點火として昇り、堅い火の響として突き進む。其れから堅い音が生じ、それが昇つて鹹い性質に取巻き閉ざされ、そして堅くされて、一つの形體がそこに成立する。

かくて此の形體の中に、此等四つの性質の暴性を消し得る何等の性質もないならば、其の中には絶えざる敵意があるであらう。何故なれば、苦い性質は鹹い中で烈しく暴れ、引き裂き破ることに依つて、それに反對する。鹹い性質も又苦い性質を引き寄せ、捕へて、夫自身の道を取り得ない様にするによつて、苦い性質に反對する。そして熱はその狂暴な點火と上昇によつて、凡ての物を暑くし、怒り狂はし、又冷に全々反對であると云ふ點で、此等の兩方に反對する。音は又狂暴者の様に暴力を以て凡ての物を突き進むことに依つて、他の凡てに非常に大なる敵となるであらうから。

これ實に神の最も深い、内的な、隠れた生誕で、これによつて彼は自ら、シナイ山の十誡にある様に怒り、嫉む神と呼んだのである（出埃及、二十ノ五、申命、五ノ九）。そして斯かる性質の中に、地獄とその永遠の呵責及び永遠の敵、殺戮の窟とがある。そして悪魔は斯の如き被造物となつたのである。✓

扱彼は然し神の仇敵で、辯護者及び悪魔の助手を強いて、神は惡と共に又善を欲し、或る人々を永遠に罰せられる様に造つたと云はせようとする。夫故神の靈は彼等を永遠の敵意に於て、此の鏡の前に招く。其處で彼等の心臓は打ち開かれ、神とは何であるか、或は悪魔とは誰であるか、或はどうして彼は悪魔になつたかを、彼等は見なければならぬ。

若し諸君の心が、諸君の放慢や、瀆神や、又そこに浸つて敢て離れようとしぬ怖ろしい罪によつて、死の中に閉ざされてゐないならば、然らば目を覺して見よ。私は天と地、星と元素、及び凡ての被造物や人間を、その全き實體そのものに於て證據とする。そして凡て此等の事物を其の場所、殊に被造物の創造の場所で明瞭に證明しようと思ふ。

若し此等の事物に於て諸君が満足しないならば。神に諸君の心を開かんことを祈れ。然らば、諸君は天と地獄及び全き神性を其の凡ての性質に於て知り、且つ見るであらう。其の時諸君は確かに悪魔を正しとすることを止めるであらう。私は諸君に諸君の心を開いてやることは出來ない。

扱神の正しい生誕を考へよ。

見よ、私か上に述べた様に、此等四つの性質に於ける神の最も内實の本質に於ての生誕は、斯

く鋭 (scharf) がある。

諸君は然しこれを正しく理解しなければならぬ。

鹹い性質は斯くそれ自身の性質の中に於て、其れ自身鋭くあるが、然しそれのみで、即ち他の性質なくしては無い。又夫自身から、或は夫自身の中に産れて、全く自由ではあると云ふのではない。却つて他の六つの靈がこれを産み、彼等がその手綱の中に捕へて、彼等の欲する丈の力を與へるのである。何故なれば、甘い源水は直ちに鹹い性質を鞭打つて、それを柔げ、全く薄く、柔く又輝かしめるから。

然し、それが斯様に鋭いのは、その結集によつて形體が構成される目的の爲めである。でなければ神性は存在せず、況して被造物はないであらう。そして此の鋭さに於ける神は凡てを理解し凡てを把握する鋭い神である。これ神の生誕と鋭さとは到る處に於て斯様であるからである。

然し、若し、私が諸君に、小さい圓い圈内に於ける神性の生誕を、その最も深みに於て記すならば、こうである。譬へば、諸君の前に七つの輪を持つた車輪があつて、その輪の各々は他の輪の中に造られてある爲めに、前でも、後でも、横でも凡ての方向へ、何等の變換なくして、行くことが出来る。そしてそれが進む時は、一つの輪は常にその轉廻に於て他のものを産み出し、

然もその何れも消滅せず、凡ての七つは見える様になつてゐる。七つの輪はその轉廻に従つて中心に穀を産み、従つて穀は輪が前、後、横、或は上、下へ行かうとも、變化することもなく常に自由である。そして穀は常に幅を産み、従つて幅はその轉廻に於て常に正しく、(そして幅から真直に車の輻の方へ向ひ) しかも何れの輻も消滅せず、却つて常に他のものと轉廻し合ひ、そして風の吹く處何處でも行つて何等の變換を要しない。

扱私に諸君に云ふ處を理解せよ。

七つの輪は神の七つの靈で、それ等は常に一つのもは他のものを産み、そして七つの輪を互に内に有する車を轉廻する様に、一つの輻は常にその位地に於ては他のものと異つて轉廻し、七つの輪は丁度圓い球の様に互に輻で箱をかけた様になつてゐる。然も吾々は凡ての七つの輪を各々その特有の轉廻に於て見、又その輻や幅や穀をもつた全體の構造を見ることが出来る。七つの穀は中央に一つの車の様になつてゐて、何れの方向に轉廻することも出来る、そして輪は常に此れ等の穀を産み、穀は常に凡ての七つの輪の中に於て輻を産む。然も何れの輪も、又何れの穀も、輻も、幅も消滅せず、そして其の車が七つの輪をもつてゐても常に一つの車で、何方へ風が吹かうと常にその方へ進んで行く。

扱注意せよ、

七つの輪は相互の中にあつて、一つのは常に他のものを産み、何れの側へも行く、しかもその何れも消滅せず或は變換しない。これ父なる神の七つの本源靈である、彼等は七つの輪の各々の車に於て穀を産み、しかも七つの穀ではなく只一つで、それが凡ての七つの輪に適合するのである。

そしてこれ心臓、即ち輪の最内の形體で、その中に於て輪は回轉する。これ神の子を意味し、父なる神の凡ての七つの靈がその圈内に於て常に産むもので、彼はその凡ての七つの靈の子である。そして彼等は凡て彼の光の中に於て作用し、(子は)その生誕の真中にあつて神の凡て七つの靈を保ち、かくして彼等は彼等の生誕に於て彼と共に轉廻する。

即ち、彼等は上、下、後、前、或は横に昇る、同様に神の心臓は常に真中にあつて、そして各々の本源靈に適合する。夫故神の一つの心臓であつて七つではない、それが凡ての七つの靈から常に産れ、凡ての七つの靈の心臓及び生命である。

扱幅は穀及び輪から常に産れ、凡ての輪の轉廻に適合し、そしてそれ等の根、支柱、或は柱で此の中に彼等は存し又これから彼等は産れる。これ聖靈としての神を意味し、丁度幅が穀と輪と

から出てしかも輪の中に止まる様に、父と子とから出る。

扱幅が數多くあつて、常に輪の中に於て轉廻する様に、聖靈も又神の輪の中にある職工で、凡てのものを全き神の中に於て構成し形成する。

扱車はその中に七つの輪を持ち、そして穀は凡ての七つの輪に適合し、凡ての七つの輪はその一つの穀に於て進む、同様に神も七つの本源靈をその中に持つてゐる唯一の神で、一つの靈は常に他の靈を産むが、しかも凡ての輪が一つの車である様に、唯だ一つの神である。

扱注意せよ、

車の結合した構造は鹹い性質を意味し、それが神性の全形體的本質を結集し、それを保ち、乾かして實在する様にする。そして甘い源水は靈の馳驅或は上昇から産れる。光が熱の中に産れる時は、鹹い性質は非常な喜を以て驚駭する、これ沈降或は稀薄化で、堅い形體的本質は穩情の様に沈靜する。

此の驚駭或は光の瞥見は、鹹い性質の中に優に穩和に又震へながら昇るが、今水の中で苦くなり光はそれを乾かし、そして彼を親しむべくし、又甘くする。

こゝに即ち生命と喜とが成立する。何故なれば、驚駭或は電光は今や、前述の自ら轉廻する車

の様に、凡ての性質の中に昇り、そして凡ての七つの霊は恰も一つの圈内にある様に、相互の中に昇り、その中で産れ、光は七つの霊の真中で輝やかになり、そして再び凡ての霊の中に於て照り、それによつて凡ての霊は凱旋し、又光の中に於て喜ぶからである。

丁度七つの輪は彼等を保持する一つの車に、彼等の心臓による様に、よつて轉廻し、又彼等は穀を保持する、同様に七つの霊も又一つの心臓を産み、心臓は七つの霊を保持し、そしてそこに聲と心からの愛と接吻の神的喜とが昇る。

何故なれば、霊が彼等の光と互に作用し、轉廻し、上昇する時は、一つの霊は常に他の霊に彼の味を與へる、即ち彼は他のものを刺戟する爲め、そこに常に生命が産れるからである。

かくして一つのものは他のものを味ひ、感じ、響の中に於て一つのもは他のものを聞き、そして響或は音は凡ての七つの霊から心臓に進入し、心臓の中に於て光の電光の中に昇る、その時聲と神の子の喜とが昇る。そして凡て七つの霊は凱旋し、各々彼の性質に應じて、神の心臓の中で喜ぶ。

何故なれば、甘い水の中の光の中では凡ての鹹性、硬性、苦性、熱は柔らげられ、愛すべくなり、そして七つの霊の中には神の神性な遊戯の様に、愛すべき争闘と驚くべき産出の外何物もな

いから。

然し私が上に書いた彼等の鋭い生誕は核心として隠れてゐる、これそれが光と甘い水とから柔らげられるからである。

丁度酸く苦い青林檎が太陽の爲めに強いられて、食べられる様になるが、然し吾々はその凡ての性質を味はうと同じく、神性も又その性質を保持するが、然し楽しい愛すべき遊戯の様に、穏和に争ひ闘ふ。

然し若し本源霊が傲ぶつて、互に迅速に貫徹し、そして烈しく摩擦し、壓迫する時は、甘い水は壓し出て、狂暴な熱が點火し、そしてルチファに於ける様に、凡て七つの霊の火が上昇するであらう

これ實に神性の眞の生誕で、永遠以來凡ての場所に於て斯様であつた、そして又永遠に斯様であるであらう。然し敗壞者ルチファの國に於ては、私が上に暴性について書いた様に、これより他の様態であつた。そして此の今半ば點火されてゐる世界に於ても、改造の日に至るまでは、これより他の様態である。これについては私は此の世界の創造の場所で書かうと思ふ。

此の美しい愛すべき天的サルニタ、即ち神的性質の中に、ルチファ王國は、他の王國よりも

つと大きく運動することなくして造られたのである。ルチファが造られた時、彼は完全なものと
して存し、又神の子の最も美しい透明を以て飾られ附與された最も美しい天の君主であつた。苦
しルチファが、彼の主張する様に創造の運動の時にかく敗壞して（造られて）ゐたならば、彼は決
して彼の完全性、美、透明を所有せず、却つて直ちに狂暴な暗黒な悪魔となつたであらう、決
してチルビムではなかつたであらう。

王ルチファの光り輝く生誕と美とに就いて

見よ汝、殺戮虚妄の靈よ、私は此處に汝の王としての生誕、即ち、如何に汝が被造物となつた
か、如何に神が汝を造つたか、又如何に汝が嘗ては美しくあつたか、如何なる目的の爲に神は汝
を造つたかに就いて記そうと思ふ。

若し汝が、これよりも違つた事を言ふならば、汝は詐り者である。何故なれば、天と地又び凡
ての被造物又全神性は汝に反して、神が汝を神の讚美の爲めに、恰も君主ミカエル及びウリエル
の様に、神の君主、王として己自身から造つた事を證明するから。

扱注意せよ。

神性が創造を發意して彼の形體の中に被造物を造らうと欲した時、彼は本源靈を點火すれば、
それが永遠に燃え續けるであらうから點火せず、却つて、非常に穩かに鹹い性質の中に發動し
た。これが神的サルニタを引き寄せ乾かして形體が生じた。そして天使の達する限りの場所、或
は空間に於ける、凡て七つの本源靈の全神力は形體の中に捕へられ、形體の所有となつた。そ
れは再び永遠に亡ぼされ得ず、又亡ぼされてはならず、却つて形體の永遠の所有でなければなら
ない。

凡ての七つの本源靈の捕へられ、或は結集された方は、扱、形體の中にその所有を得、形體の
中に昇つた。そして凡て七つの本源靈から全神性が産れると同じ方法によつて産れた。

一つの性質は常に他を産んで、しかも全き神に於ける様に、その何れも消滅しない。そして形
體以外の神性が三性に於て産れる様に、全形體も又三性に於て産れる。

然し私はこゝに次ぎの事を記さなければならぬ。即ち、王ルチファは彼の凡ての天使の群が造
られてある限りの場所或は空間、又彼が彼の天使と共に被造物となり、そして神がそれを創造の
時に際して、王國の一領域と決意した限りの範圍、この限りの全範圍に於ける心臓として、彼の全
王國から集成されたのであると云ふことを。此の範圍とは造られたる天と地、並びに地と全範圍

との深みを包括してゐる。ルチファの下にある諸の君主は夫々の異なる性質に應じて造られ、そして彼等は彼の顧問であると共に又凡て彼の天使である。然し諸君は知らなければならぬ、即ち、各々の天使は凡て七つの霊を持つてはゐるが、その中に何れか一つが主となつてゐることを。

扱見よ。王が斯く彼の全き王國の包括として結集し構成された時、其の時其の瞬間に、神が彼の形體の中に所有として持つてゐた神の聖三一體の生誕が昇り、言はゞ被造物以外に別に神の中に産れたのである。(自由をこれにこれを理解せよ、即ち本質的ではなく、却つて恰も火が鐵を灼熱し、しかも鐵は鐵として残る様に、或は光が暗黒を滿たし、暗黒の源は光に變り、喜となるが、然し中心に於ては暗黒として残る——これを吾々は自然として理解する、何故なれば靈は只光輝によつてのみ包まれるから——様に)。

形體の結集と共に直ちに、新生の王に於ける如く、非常な榮光を以て、神の中に生誕が昇つた。そして凡て七つの本源靈は全く喜ばしく、榮を示した。そして其の瞬間に直ちに光は、心臓の中心に新たに生れた王の子として、七つの靈から生れ、昇つた。それは又直ちに凡て七つの本源靈の形體を、心臓の中心から、照明し、外部から神の子の光がそれを照明した。

斯くてルチファの心臓に於ける新らしい子の生誕は、又全形體を通して貫き、形體以外にあつ

た神の子によつて榮光を與へられ、天の大なる美を以て、神の子の美に従つて新しく恵まれ、そして彼にとつては、全神性がそれと共に働いた愛する心臓或は所有物の如きものであつた。

斯くて又直ちに心臓に於て新らしく生れた子の靈は、ルチファの光から彼の口を通して昇つた。そして神の聖靈と共働し、愛する兄弟として最高の喜を以て迎へられた。

即ち斯くして美しい花嫁がそこに立つたのである。私は彼女について今より何を書くべきか。

彼女は神の君主ではなかつたか、又最も美しい神の愛であり、又被造物中の愛する子ではなかつたか。

怖るべき、傲慢な、今や嘆くべき罪の初、其の最も深みに就いて

此處で注意せよ。王ルチファが斯くの如く美しく、立派に、高く又神聖に造られた時、彼は正しく父なる彼の造り主を褒め、尊びたたへ、そして造り主神のすることを彼も爲すべきであつた。

即ち、彼の造り主神が非常に穩和に、愛すべく又喜ばしく作用し、又神の中の一つの本源靈は常に他のものを愛し、相共に共働し、又常に他のものが天的華麗を構成するものを助ける様にするべきであつた。——それによつて天的華麗の中に常に美しい形や生物、種々なる色や實が生ずる。

そしてこれは、神の本源靈が神の中に於て、神聖なる遊戯としてなすところである。

扱見よ。神は今彼自身から永遠の被造物を造つたから、彼等は天的華麗の中に於ては神自身と同じ様に活動すべきではない。否、斯様には彼等は造られてゐない。何故なれば、造物主は次ぎの理由に依つて天使の體を、彼（造物主）が彼の神性の中に止まつてゐた時よりも、もつと乾いて造つたから、即ち、諸々の性質がもつと堅く、もつと強くなつて、音或は響が聞える様になり又七つの靈が天使の中、心臓の中心に光と靈、これは神力的の中に於て心臓の光から天使の口迄出て来る、を産む時、神の凡ての性質の力の中に於て聞える響として、愛すべき音樂として、歌ひ響き、そして神の構成或は作用の中に於ける愛すべき、樂しき聲として、神の形成の中に昇らんが爲めである。

そして聖靈が天の實を造つた時に、神を讚美して天使の口から出づべき音は、又實の形成の中に一所にあるべきであつた。そして他方に於て又、其の實は天使の食物であるべきであつた。

夫故、吾々も亦「主の祈」に於て、吾等に、日常の糧を與へよと祈る（馬太、六ノ十一）。斯くて吾々が吾々の光の中心から、生氣的靈を通して吾々の口から、神力的の中に吐きだす處の「與へよ」と云ふ其の音或は其の言葉は、神力的の中に於て、神が其の後吾々の食物として與へる處の

吾々の日常の食物を造るに、共にその形成を助け、生産を助けるものとして、助けなければならぬ。

そして斯く吾々の音が神の音の中に形體化して實が造られる時は、その實は吾々の健康に有効でなければならぬ。そして吾々は神の愛の中に在り、又その食物は、吾々の靈が神の愛の中に於て共にその形成を助けたから、吾々の自然の權利として使用しなければならぬ。

此處に神の最も内的な、最も大なる深みがある。オ、人よ、自ら考へよ、私は其の場所に於て尙十分説明するであらう。

扱斯の如き目的の爲めに、神は天使を造つたのである。そして天使も又斯くの如く行うのである。何故なれば、凡て七つの本源靈の力に依つて、彼等の光から中心即心臓の中に昇つた彼等の靈は、丁度聖靈としての神が父と子とから出る様に、彼等の口から出る。そしてメルキュリウス、歌、談話、楽しい遊戯によつて、神の中（即ち自然の中）に於て凡てのものが形成されるのを助けるから。

即ち、丁度神が自然の中に働いて、あらゆる形像、生物、果實、色彩などを造る様に、斯様に天使も又全く單純に行動する。そして彼等は僅かに小枝に乗るか、或は僅かに天の様な五月の美

しい花を喜び、それについて全く單純に語るのみであるが、しかも其の音或は言葉は神的サルニ
タの中に昇つて、その構成を助けるのである。諸君はこれに就いての多くの例を此の世界に持つ
てゐる。例へば若し多くの被造物或は人間が何物かを見る時は、其の物は被造物の中にある毒の
爲めに敗壞する。之れに反して又或る人々或は動物其他の被造物でも、彼等の音或は言葉に依つ
て、或る何物かの中にある悪性を變へて正しい形にすることが出来る。これ凡ての被造物がそれ
に服従してゐる處の神的力量である。何故なれば、凡て生活し、運動するものは皆神の中にあるし
凡て造られたものは、それが愛からにせよ、怒からにせよ、凡て彼から造られたのであるから。
罪の源泉

扱ルチファが斯く王として造られ、其の靈は彼の構成されると共に彼の中に昇り、神によつて
非常に優れて親しく歓迎され、そして榮光の中に置かれた時、其の時彼は直ちに天使としての柔
順と經歷とを初め、そして（神自身のなす様に）父の家の愛すべき子として、神の中に活動すべ
きであつた。しかも彼はこれをしなかつた。

却つて、彼の光が彼の心臓の中に産れ、彼の本源靈が突然高い光を以て感染され、包擁された
時、彼等（本源靈）は凡て非常に喜び、彼等の形體は自然法に反して立ち、そして直ちに神自身より

もより高い、傲慢な、美々しい作用を始めた。

然し靈が斯く自ら傲ぶつて、各々烈しく勝ち誇り、自然法に反して昇つた時に、本源靈は非常
に強く點火した。即ち、鹹い性質が形體を非常に強く引き寄せた爲め、甘い水は遂に乾燥してし
まつた。

そして甘い水の中に於て熱の中に昇り、それによつて苦い性質が甘い水の中に存在する處の、
強大な明かな電光は、恰も彼が非常な喜の爲めに鹹い性質を引き裂かうとするかの様に、非常に
怖ろしく、強く鹹い性質と摩擦した。

即ち電光は恰も他の本源靈に堪え難い程左様に明かであつたから、苦い性質は鹹い性質の中で
非常に強く震へ摩擦し、遂に熱が自然法に反して點火され、又鹹い性質は甘い水をその堅い結集
によつて乾かしたのである。

然し熱の性質は、鹹い性質からその力を取り去る程、非常に強く烈しくなつた。これ熱は甘い
水の源泉の中に成立するからである。

然し甘い水は鹹い結集によつて乾いてゐるから、熱は最早炎或は光となり得ず（何故なれば、
光は水の油性から生ずるから）、却つて點火された熱い、然し未だ全くは灼熱しない暗黒な鐵の

様に、燃え閃いた。或は若し、諸君が非常に堅い石を火の中へ投げて、諸君の欲する丈け長く強い熱の中に置いて、その石は灼熱しない。これ水があまり少いからである。

扱斯く熱は乾いた水を點火した。そして光は最早上昇し、或は點火し得ない。これ水は既に乾いて、火或は大いなる熱によつて全く消滅されたからである。

此の意味は、凡て七つの性質の中にあつた水の靈が食ひ盡されたと云ふのではなく、其の性質或は上位 (Oberstelle) が暗い、熱い、酸い性質に變化したと云ふのである。

今此の世界にも繼續されてゐる酸い性質は、其の最初の起源或は初を此處に有するのである。

しかし天に於て神の中及び天使の中にあつては決して此の世界に於ける様ではない。何故なればこの世界に於てはそれは苦しみの家、惱みの家であり、善の忘却であり、又それを意味するから。

扱この事が起つた時、本源靈は、私が先きに七重の車の型で説明した様に、互に相摩擦した。何故なれば、彼等は常に互に順に昇り、互に食ひ合ひ、或は互に影響し合つて、そこから生命及び愛が生ずるから。

然るに凡ての靈の中には、只熱い、火の様な、冷たい又堅い破壊があるのみであつた。夫故一つの悪い源は他のものを味ひ、其れによつて全形體は狂暴なものとなつた。これ熱は冷に反し、

冷は熱に反してゐるからである。

扱然し甘い水は乾いてゐるから、苦い性質（これは光が點火した時第一の電光から生じ、産れた）は、恰も形體を破壊しようとするかの様に、凡ての靈を通して形體の中に昇り、最も悪い毒の様に暴れ狂ふた。

そしてこゝから、吾々憐れな人類が今の世界に於て喘まなければならぬ、最初の毒が生じたのである。又こゝから苦い、有害な死が肉體に到來したのである。

此の狂暴、混亂の中に於てルチファの生命、即ち彼の愛する子が彼の心臓の中心に産れた。此の生命或は愛する子が如何なるものになつたであらうか、私は理性的精神にこれを考へることを委せる。

父があつたと同じものに子も又なつた、即ち、彼は暗い、鹹い、冷い、堅い、苦い、熱い、酸い臭い源泉となつた。そして愛は苦い性質の貫徹及び味の中にたち、傲慢な王の體に於ける凡ての本源靈の敵となつた。

斯くて音は苦い性質の貫徹を通し、熱を通して昇り、水を乾かし、鹹い堅い性質を通して心臓なる愛する新らしい子に昇つて行つた。此處で靈は出て行つた。彼が心臓の中に産れた如く、今

彼は口へ出て行つた。然し彼が如何に神の前、神の中、並びに他の王國の天使等の前で歓迎される客であつたであらうか、これ諸君の考察に委せる。彼は今神の子と一致し、一つの心臓、一つの神となるべきであつた。あはれ！、永遠に！誰がこれを十分に記し語ることが出来ようか！。

第十四章

天に於ける最も美しい天使ルチファが如何にして
最も怖ろしい悪魔となつたか

殺戮の窟なる家

王ルチファよ、今汝の帽子を目の上へ惹き下せ、汝の天の王冠が奪ひ去られるのを汝が見ない爲めに。汝は最早天に於て統べ治めることは出来ないのである。然し尙暫くの間靜かに止れ。吾々は先づ汝をよく視、如何に汝は美しい花嫁であるか。汝の淫業の汚點シミが洗ひ去られて、汝は再び美しくならないかどうかを知らうと思ふ。吾々は汝の操と徳とを少しく記そうと思ふ。

オ、汝等、王ルチファを辯護する哲學者及び辯護士よ、來れ、彼が尙王冠を有する間に、進み出て彼の爲めに辯護せよ。何故なれば、吾々は此處で彼に對し犯罪の訴をしようと思ふ、若し諸君が勝てば、彼は諸君の王たるべきである、若しそうでなければ、彼は地獄につき落され、彼

よりもよく治める他のものが彼の王冠を得なければならぬから。

扱注意せよ。

ルチファがかく怖ろしく墮落した時、凡ての彼の本源靈は神に逆ふ敵となつた。これそれ等の凡ては神よりも異つた活動をしたからである。そして神とルチファとの間には永遠の敵意が生じた。

扱或人は云ふであらう、然らば如何に長くルチファは神の光の中に居つたのであるかと。

深義！ルチファの王としての形體が構成された時、同時にルチファの中に又光が點火した。何故なれば、彼の本源靈が形體の構成について活動し始め、自然法に従つて産み始めたや否や、心臓の中の生命の電光は甘い源水の中に生じたから。かくて王としての形體は完成し、そして心臓に於ける靈は光から出て、口を通して神の心臓へ行つた。

此の時彼は非常に美しい君主、王であつた。そして神的本體に對して非常に愛らしく、心地好く、又彼から大なる喜びを以て受け容れられた。同様に靈も又心臓から形體の凡ての源泉に行き凡ての七つの靈を點火した。かくて王の體は忽ち榮光に輝き、神の王として、凡ての天の群勢に優る知り盡し難い光明の中に立つに至つた。

此の明かな輝く電光の中に於て忽ち、恰も人が火を點火する様に、七つの本源靈が點火された。これ彼等は彼等の靈の怖ろしい透明に驚駭し、そして最初の電光の中に於て直ちに勝ち誇り、傲慢になり、非常に喜び、そしてより高い生誕へと動いた（志した）からである。

然し若し彼等が彼等の座に止まつて、彼等が永遠以來なした様に活動してゐたならば、高い光は彼等に何等の害をもなさなかつたであらう。何故なれば、彼等は何か他の物から造られた新しい靈ではなく、却つて何等の初もなく、永遠に神の中に居り、神性と自然法とをよく知り、如何に彼等が活動すべきかを知つてゐる古い靈であるから。

又神がその形體を造つた時も、彼は始めに本源靈を敗壞せず、却つて王ルチファの體を、凡てのもの、最も善い智慧がその中にある處の、最も善い核心から結成したのである。

若しそうでなくて、初めに性質が死んでしまつたならば、更に新しい生命の必要が起り、かくて天使が永遠に存在し得たかと云ふことは疑はしくなるであらう。

正しくこれを理解せよ。

神が天使を自分自身から造つたのは、神の靈の働きによつて自然の中に現出し、又その作用によつて再び消滅する處の形像（觀念）よりも、彼等の方がより堅く強く構成され、従つて彼等の

光が其の堅さによつて更に明かに照り輝き、形體の音が更に明かに鳴り響き、それによつて神に於ける喜びの國が更に大きくならんが爲めである。これ神が天使を造つた原因である。✓

然し、天使は新しい光、或は新しい靈を産んだと云つた。これ次の様に解すべきである。

本源靈がより堅く構成された時に、光は前にサルニタの中にあつた時よりもより明かに、形體の中に於て、又形體以外に、光り輝いた。それは前にはサルニタが薄かつたが、今は（堅いから）その時よりも、より明かな電光が形體の中に昇るからである。

夫故、本源靈は傲慢になつて、彼等は神の子よりも更に美しい子、即ち光を有すると考へた。

夫故彼等は又より多く活動し、高まらうとし、彼等の父なる神の活動と神の子の生誕とを輕蔑し彼等もこれをなし得ると考へた。これ彼等はかく非常に立派に構成されたから、又自ら立派に男々しく昇揚し、最も美しい天の花嫁と見られようとしたからである。

彼等はいよく、彼等自身が全き神ではなく、只その一片 (ein Stück) であることを知つてゐた。

夫故、彼等は又何處まで彼等の全能が達するかをもよく知つてゐた。然し彼等は最早舊態を欲しなかつた。却つて、全き神よりもより高くならうと思ひ、そして全神性、全王國の上に彼等の領域を持たうと欲した。

夫故、彼等は全き神を點火し、彼等の力によつて全き神を支配しやうとの考へで、傲ぶり立つた。凡ての形像を彼の性質の中に造り出そうとし、彼は神性の主人で、そして他の何物も彼と並んで主人であつてはならないと考へた。

これ實に貪婪、嫉妬、傲慢、忿怒の根源である。何故なれば、狂暴な作用の中に忿怒が昇り、それが熱い火、冷たい火、及び苦い膽汁の様に燃えたから。

本源靈は外部から自身の中に何等（傲慢）の衝動を得るのでなく、却つて傲慢の衝動は七つの本源靈の助言によつて、形體の中に自ら生ずるのである。彼等は凡て彼等のみが神であると云ふ事に於て一致した。

然し、彼等はそれを彼等のもとの座に於ては始め得ず、又結果を收め得なかつたから、彼等は互に諂ひ、結托して、神の生誕に逆つて立ち、最深の深みに於て活動しやうとし、そうすれば、彼等は神に於ける最も強い君主であるから、何物も彼等と同様であり得ないであらうと考へた。鹹い性質は最初の殺戮者、偽善者であつた。何故なれば、彼がかく美しい光を産んだのを見た時、彼は尙一層怖ろしいものとなり、凡てを彼の全統治のもとに引き寄せ、嚴しい君主としてそれを支配しやうと欲して、神が彼を集め造つたよりも更に一層堅く結集したから。彼がこれをな

した程度に應じて土や石が生じたのである。これ世界の創造の場所に記そうと思ふ。

苦い性質は第二の殺戮者であつた。彼が電光の中に昇つた時、彼は破壊と非常な力とを以て、鹹い性質の中で、恰も形體を斷ち割らうとするかの様に、引き裂いた。然るに、鹹い性質はそれを許した。何故と云ふに、他に、彼は苦い靈を虜にし、その傲慢心が無くなる迄、甘い水の中へ漬けて置くことも出来たであらうから。

熱は第三の殺戮の靈であつた。彼は彼の母、甘い水を殺した。然し鹹い靈がこの原因である。何故なれば、彼はその強い結集と硬化とによつて、苦い性質と共に火を烈しく喚び起し、點火したから。火は鹹い性質と苦い性質との劍である。

然し、火は甘い水の中から昇つたのであるから、彼は彼の方の中に鞭を持つてゐて、鹹い性質を水の中に抑へて置くことも出来た筈である。然るに、彼も又偽善者となつた。そして大なる性質、即ち鹹い性質と共に偽つて、甘い水の殺戮を助けたのである。

音は第四の殺戮者である。何故なれば、彼は彼の響を甘い水の中の火から取つた、そして愛らしく全形體の中に昇るべきである。然るに、彼は此の時かくせず、甘い水の中に於て鹹い性質の中に昇つた後、彼は又鹹い性質と共に偽つて、恰も雷鳴の様に烈しく爆發し、それによつて、彼

の新らしい神性を示そうとしたから。そして、火は更に電光の光る様に昇つて、それによつて、神の中の如何なる者よりも遙かに優つてゐると考へた。

斯くの如き事を彼等凡ては、彼等の母なる甘い水を殺してしまふ迄行つたのである。そこで、全形體は暗黒の谷となり、最早これを助け得たであらう神に於てさへ、何等助けの手段もなくなつてしまつた。これ愛は變つて敵意となり、全形體は暗黒な惡魔となつたからである。

Taufel (惡魔) の Tau と云ふ語の起原は強い Poelen (撞鼓、叩き) 或は Tönen (響鳴) で、Fael の起原は Falle (墜落) である。故に、今や王ルチファは Taufel と云つて、最早 Jerubia 或は Seraphin といふはなご。

抗議、扨或人は云ふであらう。

然らばルチファが自分の傲慢を抑へる様に、神は彼の慢心を妨げることが出来なかつたであらうかと。

これ重大な問題である。凡て惡魔の辯護者はこれを口實とする。然し、彼等凡ては訴訟の法廷に召喚されてゐる。彼等をして、その主人を辯護する責任が彼等にあり、若し出来ないならば、正しい判決は彼の上に下され、彼は彼の王冠を失ふであらうことをよく注意せしめよ。

驚異すべき啓示

見よ、王ルチファは彼の全領域に於ける元首及び権力ある王で、彼の全領域の核心から造られたのである。然るに彼の傲慢な上昇によつて全領域を點火し、凡ての物を、恰も彼が自分の形體の中で活動する様に、(思ふまゝに)活動させようとした。

彼の形體以外にある神性は、彼に對しては穩和に働き、又彼を照らして後悔する様に、戒めやうと欲した。然し今や、ルチファには、神の子を支配し、全領域を點火し、そして斯くして自ら全天使群に對して、全き神であらうと欲する以外何の意志もなかつた。

夫故、神の心臓が穩和な心と愛とを以て、ルチファに來た時、彼はそれを只輕蔑した。そして自分は更によいものと思ひ、却つて、火と冷とを以て、烈しい雷鳴の中に於て、神の子に逆ひ、かくて彼を征服し、自ら君主になつたと思つて神の子の光を輕蔑したのである。

扱諸君は云ふ、どうして彼は斯の如き力を持つたのであるかと。

然り、彼はそれを持つてゐた。これ彼は神性の大なる部分であり、又その核心から造れたからである。彼は又王であり大いなる君主であるミカエルを亡ぼそうと企てた。夫故、ミカエルは遂にルチファと戰つて彼を征服し、又ルチファの王國に於ける神の力も王ルチファに烈しく逆つた

から、彼は遂に敗北者として彼の玉座から投げ出されてしまつたのである(點示録十二ノ七九)。

諸君は又言ふ、神は彼が懺悔する様に彼の心臓を照らすべきではなかつたかと。

否、ルチファは自分自身の光より以外の光を持つことを欲しなかつた。そして自ら電光と光とを内に持つてゐたから、彼は彼の形體以外にある神の子の光を輕蔑した。かくて彼は益々自ら傲ぶつて、遂に彼の水(こゝでは、榮光の光の中に産れた永遠の生命の水である。然し、中心に於ては硫黄の靈或は硝酸の如きものである)は全く乾いて燃えてしまつた。そして、彼の光は全く消え、かくて斯様な始末になつたのである。

凡ての彼の天使の墮落に就いて

扱、或者は問ふであらう、どうして然らば、凡ての彼の天使も墮落する様になつたのであるかと。

主人が命じた様に彼の僕はなした。彼が自ら傲ぶつて神たらんと欲した時に、彼の天使等もそれを見て、それに従つた。そして、彼等凡ては、恰も神性を破壊しやうとするかの様な行をした。これ彼等は凡てルチファに服従し、彼は彼等凡ての天使を支配するからである。何故なれば、彼

は彼の凡ての天使が造られた處のサルニタの核心から造られ、そして凡て彼の天使の主であつたから。

夫故、彼等凡ては彼の様に行ひ、凡て神性に於て首位たらんとし、そして彼等の主と共にその全領域に於て、凡ての神的力量を強く支配しようとした。彼等は凡て互に一つの意志で、この意志を取り去られることを欲しなかつた。

扱諸君は云ふ、

然らば、全き神は、天使創造の時以前に、斯くなり行くと云ふ事を知らなかつたのであるかと。

否、若し、神が天使創造以前にそれを知つてゐたならば、それは永遠の豫定の意志で、何等神に對する敵意ではなくなる、そして、却つて、神は彼を始から惡魔に造つたと云ふ事になるであらう。

神は彼を光の王に造つた。然るに彼が不柔順で、神以上にならうとした時に、神は彼を彼の座から投げ出したのである、そして吾々の時代に於て他の王を、王ルチファが造られたと同じ神性から造つた。そして彼をルチファの玉座に据え、ルチファが墜落前に持つてゐた様な權威と力とを彼に與へた。此の王を、イエスキリストと云ふ。彼は神と人との子である。これについては其の

場所に於て尙明かに證明しやうと思ふ

神に對する王ルチファ及び彼の全群勢の大いなる罪、

反抗及び永遠の敵意に就いて

これ人間の眞の鏡である。靈は此の法廷の前へ凡ての人間を、鏡の前へ招く様に招いた。そこで彼等は隠れたる罪が如何なるものであるかを見ることが出来るであらう。

この事は世の初以來隠れてゐて、如何なる人の心にもかく全く明かには啓示された事はない。

私は、讀者が此の高い啓示について多分驚くであらうよりも、更に一層自ら驚いてゐる。

私がこれを書くのは私の名譽の爲めではない。これ私の名譽は未來についての私の希望の中にあるからである。私は實に凡ての人々の様に憐れな罪人で、同じく此の鏡の前に出づべきものである。而も私は、神が斯様な愚直の人間に斯くも全く明かに啓示されること、及び、世には私の様な世の嘲り、馬鹿者よりも、もつと多くのよい記者があつて立派にそれを書くことが出来るのに、私をしてそれを書かしめると云ふ事を、驚き怪むのである。

然し、私は彼に逆ふことは出来ない、又それを欲しない。何故なれば、私は度々若しそれが彼

の意志でないならば、此の仕事を私から取り去つてくれる様に非常に努力したが、私は彼に對する此の仕事によつて彼の建築に只石を集めるのであると云ふ事を發見したから。

扱、私はあまり高い處まで昇つた。私は後を振り返ることは出来ない。怖ろしく眩暈がするであらうから。そして最後の目的、そこへ達するのが私の心の凡ての願、喜であるが、その目的まで只僅かの階段を残すのみである。

夫故、私は強い神に信賴した。そしてそこから何が生ずるであらうかを敢て試み、又注視しようと思ふ。私は又只一つの死すべく破壊すべき肉體を有するのみである。然も、私は敢てこれしようと思ふ。若し、私に私の神の光と認識とが残つてゐるならば、それで私は此の世に於ても彼の世に於ても十分である。

又私は、若し私が彼（神）の名の故に、私に毎日遭遇し、最早略んどそれに慣れてゐる處の恥を忍ばなければならぬとしても、私は、私の神に對して決して怒らない。私は豫言者ダビデと共に歌ふであらう、わが身とわが心とはわれに衰ふるも、神よ、汝はわが頼り處、わが救、わが心の慰なりと（詩篇七十三ノ二十六）。

罪には七つの種類或は様態がある。その中の四つは重なる源泉である。そして第八の様態は死

の家である。

扱注意せよ。

△七つの様態とは、形體に於ける七つの本源靈で、それ等が點火される時、各々の靈は神に對して夫々特別な敵意を産むのである。

此れ等の七つから四つの新らしい他の子が産れる。彼等は新らしい神で、舊い神に對しては、恰も互に永遠の敵意を誓つた二人の仇敵の様に、全々敵である。

第一の子は傲慢である。

第二の子は貪慾である。

第三の子は嫉妬である。

第四の子は忿怒である。

扱吾々はこれ等の根源を究め、何處にその起源があるかを見、又如何にそれが神に對する敵であるかを見よう。其の時諸君は罪の起源と根源とを見、又何故、それが神に於ては堪え得られな

いかを知るであらう。

人々が失はれるのは神の豫定である、でなければ、彼は凡てのものを替へることが出来たであらうと、主張し、證明しようとするものよ。

召喚。

此處に於て吾々の王國の靈は、三度諸君を、諸君の辯護する王ルチファと共に、最後の裁判の前に召喚する。夫故答辯せよ。此れ等の七つの種類及び四つの新らしい子は、天の父の家に於て今判決されなければならないのである。

若し諸君が、ルチファの七つの靈は正當に四つの新らしい子を産み、従つて正當に天及び全神性を支配すると云ふ事を、證明することが出来るならば、然らば、王ルチファは再び彼の玉座に据えられ、彼の王國は再び彼に返されるであらう。若しそうでなければ、地獄或は洞窟が彼の永遠の牢獄として與へられ、そして彼は其處に彼の子と共に永遠に捕はれなければならないであらう。諸君は正しい判決が諸君の上にも與へられない様に注意せよ。

諸君は惡魔の正義を主張しようとしたが、何を以て彼は諸君に報ゆるであらうか。彼は地獄の憎惡以外何物もその力の中には持つてゐない。何を諸君は報酬として得ようとするか。當て見よ彼の有する最もよいもの、彼の庭の最もよい果實、最も好い香は何であるか。

第一の種類に就いて

第一の靈は鹹い性質である。これは神の中に於ては、愛すべき結集、乾燥、寒冷で、事物の構成に用ゐられる。そしてその深みに於ては幾分鋭くあるが、然し甘い水を以て調和して、全く穏和に愛すべく、又喜ばしくなる。

そして甘い水の光がその中に來る時は、喜び進んでそれに彼の生誕を與へ、それを乾かし、明かに照り輝かせる。そして音が光の中に昇る時は、それ(鹹い性質)は又その音或は響を穩和に親しくさせる。又それは凡ての靈から愛を受け取る。熱も又それを、親しく冷されんが爲めに、惠む。斯く鹹い性質は凡ての性質と親しい意志を有し、そして自然の靈の形成を助け、又其の中に凡て六つの靈の意志に従つて、あらゆる形、姿、實、植物の生ずるのを助けるのである。

それはその子等の全く謙遜な父で、子等を心より愛し、彼等と親しく遊ぶ。何故なれば、それは正しく、その中に産る、他の六つの靈の父であるから。

扱、神がルチファと彼の群勢とを造つた時に、神は彼等を此の親しい神性、彼自身、天と此の世界の場所(Loc)から造つた。それには何等他の質料はなかつた。此の生けるサルニタは全く穩

和に、何等の殺戮も何等の大きい運動もなく結集させられた。

然し、かく結集された靈は認識、智慧、及び神の永遠無始なる法則を持ち、そして如何に神性が彼等を産んだかをよく知つてゐた。彼等は又、神の心臓は全神性の中第一であることをよく知つてゐた。彼等は又、彼等自身の結集した體以外には何物も、自ら左右する所有物のない事をよく知つてゐた。何故なれば、彼等は、神性は永遠からそうであつた様に、彼等の形體以外、或は別に、自ら産れたものである事を知つてゐたから。

又彼等は彼等自身が全空間或は場所ではなく、却つて其の場所の喜と驚くべき整合とを増加し神性の此の空間或は場所と好く親しく調和し、作用し、或は彼等の形體以外にある性質と親しく共働しなければならぬと云ふ事をよく知つてゐた。

彼等は又、凡ての型、形、生物を彼等の欲するまゝに處理する力を持つてゐた。凡ての物は神の中に於ける楽しい愛の遊戯であつた。彼等は、たとへ凡ての天の型、生物を破壊して、其の代り他のものを造つたとしても、それは少しも創造者なる神の意志に逆つたのではない。何故なれば、凡てのものは只神の中に於ける遊戯であるであらうから。

彼等は實に凡ての形像、生物と遊戯し、それを意のまゝに使用する目的で造られたのである。

形像は又斯の如く永遠から造られたので、そして再び本源靈によつて消滅し、變化させられる。何故なれば、これが神の、天使創造の時以來の永遠の遊戯であるから。

これに就いて諸君は、若し諸君がそれを見ようと思ひ、そして盲目でないならば、極めてよい例を持つてゐる。即ち、獸や鳥や其の他凡て此の世界の生物である。此れ等は凡て神が、抛擲されたルチファの群勢の代りに、ルチファの位置(○)から造り、そして第二の群勢を意味する處の人間が造られたよりも、以前に創造されてゐたものである。

然し、それならば、鹹い性質はルチファに於て何をしたのであるか。

神が彼をかく優美に造つた其の時に、彼は自ら非常に力強く權威あることを感じ、彼の周囲の物よりもより美しい形體を持つてゐることを見た。夫故、彼は彼の形體の中に於て自ら傲慢に傲ぶり、彼の形體以外のサルニタよりも更に強くならうと思つた。

然し、彼自身ではそれをなし得なかつたから、彼は他の靈に諂つて、彼に父として従ひ、そして彼等凡てが各其の性質に依つて、彼自身の様に、行はせやうと欲した。

かくて彼等がそれに一致した時、彼等は又同じ様な一つの靈を産んだ。それは口に出、目に出、耳に出、又鼻に出て、形體以外のサルニタに影響した。

何故なれば、鹹い性質の目的は、彼自身が斯く立派に全王國から核心として造られたのであるから、彼は又彼が他の靈と共に産んだ處の靈によつて、彼の形體以外の神の全サルニタを力強く支配し、凡てのものをその権力のもとに持ち來そうと欲するにあつたから。

彼は凡ての物を彼が産んだ靈によつて、全き神性のなす様に、造り成そうとした。彼は全神性中の第一者たらんとした。これが彼の目的である。

然るに、彼は彼の正しい自然的地位にあつては、それを完成することが出来なかつたから、彼は遂に自ら傲ぶり、自ら點火した。此の點火と共に彼は彼の靈をも點火した。靈はかくて狂暴な靈となつて口、耳、目、及び鼻に出た。そして暴君の様にサルニタを其の位置に於て打撃し、それを點火し、そして暴力を以て凡てを引き寄せた。

諸君はこれを正しく理解しなければならぬ。

出て行つた靈の鹹い源は、鹹い性質を其の場所に於て點火し、暴力を以てサルニタの中の鹹い性質を支配した。そしてサルニタの鹹い性質はこれを欲せず、却つて甘い水と共に此の靈に反對して戰つた。然しそれは何の役にも立たなかつた。戰は長く續けば續く程大きくなり、遂にサルニタの鹹い性質が點火された。

此の事が起つた時、その戰は非常に大きくなり、鹹い性質は遂にサルニタを結集して、堅い石がそれから生ずる迄に至つた。此の世界に於ける石の起源はこゝにある。そして、サルニタの中の水も又、それが此の世界に今日ある位に迄厚くなつた程、強く引き寄せられた。

然し、鹹い性質がルチファの中に點火した時、それは又全然冷たくなつた。何故なれば、冷たいものが本來鹹い性質自身の靈であるから。夫故、彼は又其の冷たい火を以てサルニタの中の凡てのものを今點火してゐる。そして、此の爲めに水は、此の世界に於ては、かく冷たく、暗く、厚くなつたのである。又此の爲めに、凡ての物はかく堅く、理解し得られない物となつたのである。天使の時以前には決してこうではなかつた。實にこれ神のサルニタに於ける大なる反逆心、大なる鬭争、永遠の敵對である。

扱、諸君は云ふであらう。神は彼がこんなに迄ならない様に抵抗すべきであつたと。

然り、憐れな盲目の人間よ、此の時神の前に立つてゐたものは人間や獸ではなく、神に對する神である。強者に對する強者である。どうして神は彼に抵抗すべきであるか。親しい愛を以ては何等の効がない。ルチファは只それを、輕蔑し、そして自ら神たらんとしたのである。

夫故、神が怒を以て彼に對抗しなければならなかつた時は、これ遂には必ず起らなければなら

ないが、神は自ら王ルチファの住むサルニタの中に於て、自分の性質に點火し、烈しい妬みを以て彼と戦はなければならなかつたのである。そして此の爲めに王國は非常に暗く、荒く、悪くなつて、その爲め他の創造が必ず續いて起らなければならなかつた。

汝等、哲學者及び王ルチファの辯護士よ、此處で汝等は、第一に、ルチファに於ける鹹い靈は正しい行をしてゐたかどうか答へ、自然に於てそれを證明しなければならぬ。私は諸君の牽強附會な文書をその證明には欲しない。活きた證據を欲するのである。

私も又諸君に活きた證據を提出する。即ち、造られた、感知し得られる天、星、元素、被造物地、石、人、及び最後に諸君の暗い、冷たい、暑い、堅い、粗い、悪い王ルチファ自身を提出する。凡てこれ等は彼の傲慢によつて斯様な現今の状態になつたのである。

此の靈に對する諸君の答辯を此處に提出せよ。若し出來ないならば、彼は罪の宣告を受けなければならぬ。何故なれば、母から産れた子は、産んだ母からその生命と肉體を得たのであるから、母に對しては謙遜で、從順でなければならぬと云ふのが、永遠から始めのない神の正義、法則であるからである。

同様に又母の家は、母の生きてゐる間は、子の所有ではない。却つて母は愛を以て子を扶持し

養育し、自分の持つてゐる最も美しい飾を彼に掛け、それを彼の所有として與へる。これ彼女の喜びが子によつて増し加へられ、彼女が彼と共に樂しまんが爲めである。

然るに、子は母に反抗し、凡ての物を母から剝奪し、彼女を支配し、更に彼女を打ち、彼女を正義公道に反する他の習慣に強制した。其れ故、子は家から衝き出され、墻の後に止まり、彼の子としての遺産を失はなければならなかつたと云ふことは全く正當である。

神と彼の子ルチファとは斯様な關係であつた。父は彼に彼と喜を共にすると云ふ希望を以て、父の最も美しい飾を付けてやつた。然るに、子はその飾を得た時に、父を嘲り、父を支配し、父の家を破壊しようとした。そのみならず又父を打ち、そして自ら何等の忠言をも教訓をも聞かうとしなかつたのである。

ルチファに於ける罪の始めの他の種類或は靈に就いて

他の靈は水である。丁度鹹い性質が他の六つの靈の父で、それ等を引き寄せ、保持する様に、甘い水は母で、その中に於て凡ての靈は懐胎され、保持され、産み出される。そして、甘い水はそれ等を柔らげ、潤はし、彼等はその中に、又それによつて生命を得る。斯くして又喜びの國の

光がその中から昇る。

王ルチファは實に此の様な甘い水を彼の形體的統治として得てゐたのである。然も其の核心、最上のものを得てゐたのである。これ神は彼の子に、彼と喜を共にする希望を以て、最も美しい飾を掛けたからである。

扱鹹い性質はその母なる甘い水と何を爲したか。

彼は苦い性質や熱に諂つて、彼等が傲ぶり、自ら點火して母を殺し、それを酸い状態に變じ、其れに依つて彼等は彼等の靈を以て嚴しく全神性を支配しようとしたのである。そして凡てのものは彼等の前に腰を折り首を垂れ、彼等は凡てのものを彼等の鋭さを以て形成しようとした。此の誤つた決意に従つて彼等は一致の行動をなし、そしてルチファの體に於ける甘い水を乾かしてしまつた。火がそれを點火し、鹹い性質がそれを乾かしたのである。其處で彼は全く酸い、鋭いものになつてしまつた。

彼等がかゝる作用をしてルチファの靈を産んだ時に、水の中から昇る靈の生命及び光は、全く酸く鋭くなつた。

扱此の酸い靈は又あらゆる彼の力を以て、形體以外に、神のサルニタの中にある甘い水に反逆

した。そして自分を第一のものであるとし、自分自身の力を以て凡てを形成しようと思つた。

これ神に對する他の敵對である。此の世に於ける酸い性質は斯くして生じた。それは決して永遠からあつたものではない。これについて諸君は良い例を持つてゐる、即ち、若し諸君が何か甘い物を温かくして其の儘おけば、それは自然に自分から酸くなつてくる。瓶の中の水でも、ビールでも、葡萄酒でもそうである。然し、他の性質は少しも變化せず、只水の性質による惡臭を得るのみである。

扱諸君は言ふ、何故神はルチファの形體から昇つた、ルチファの悪い靈を彼の處へ來させたのであるか、彼はそれを防ぐことが出来たであらうにと。

諸君は先づ、神とルチファとの間には、丁度兩親とその子との關係以外に何等の差別もない、否もつと遙かに密接であつたと云ふことを知らなければならぬ。丁度兩親は彼等の形に従つて彼等の體から子供を産み、それを自然的な、肉體の後繼者として彼等の家に置いて、子を扶育する様に斯様に、ルチファの形體も又神性に近くあつたのである。神は彼を彼の體から産んだ。夫故彼は又彼を彼の財産の後繼者とし、そして彼の所有として、彼がその中に造られた處の全領域を與へたのである。

最深の深み！

此處で諸君は、然し、知らなければならぬ、何によつてルチファは神に逆つて争ひ、神を怒らしたのであるかを。彼は決して彼の形體を以てこれをなすことは出来ない。何故なれば、彼の形體はその場所より遠くに達することは出来ないから。彼はこれを以ては何物もなすことは出来ない。然し尙他のものがある。

此處を注意せよ。

凡ての七つの本源靈から心臓の中心に産れた處の靈、其の靈は（彼が産れた時は尙形體の中にあるから）神と一つの本質として作用し、何等の差別もそこにはない。

此の形體の中に産れた靈が、目によつて何かを見、耳によつて聞き、鼻によつて嗅ぐ時は、彼は既に其の物の中にある。そしてその中に於て彼の所有物の中にある如くに活動する。

若しそれが彼の氣に入る時は、彼はそれを食ひ、自ら其の事物と感染し、それと力争して共に、一つの混合、或は性質を造る。其の事物が如何程遠く放れてゐても、たとへ神の中に於ける彼の本源の或は最初の王國程遠くとも、靈は瞬間にそれを支配することが出来る。そして何物にも障げられない。

何故なれば、彼は聖靈としての神と同じ力である、そして、聖靈としての神と形體の靈との間には何等の差別もなく、只神の聖靈は全き充滿であるが、形體の靈は全き充滿によつて貫かれる一片であるのみである。そして、彼が到る何處に於ても彼はその場所と感染し、其の場所に於て直ちに神と共に支配するからである。

何故なれば、彼は神からであり、又神の中にあり、そして生氣的（精神的）靈を産む處の、形體の七つの靈より以外に何物にも抑制されない。此等の靈はその手綱を手に持ち、彼を彼等の欲するまゝに産むことが出来る。（「神の靈は凡ての源を持つてゐる。然しそれは三つの原理に分れ、そこから三つの本源が生ずる。即ち一つは第一原理に従つて火の中に、他は第二原理に従つて光の中に、そして第三は此の世界の靈、空氣及び星の源の中に生ずる」）。

鹹い性質が父として、言葉或は子或は靈を造る時は、それは心臓の中心に捕へられ、他の靈によつて彼が善いかどうかを吟味される。若しそれが火の心に適ふ時は、火は電光（その中に苦い靈がある）を甘い水を通して發射し、それによつて彼は愛を受け、かくて共に鹹い性質の中へはいつて行く。

電光が愛と共に、新たに産れた靈或は意志を以て鹹い性質の中へ再びはいつて行けば、鹹い性

質は若い新しい子を喜び、自ら上昇する。其の時音は彼を捕へ、彼をつれて口や、目や、耳や、鼻へ出て行く、そして七つの霊の評議に於て決定した事を遂行する。何故なれば、霊は評議の決定通りになり、評議は彼を欲するまゝに變ずることが出来るから。

夫故、心臓の圏内には、七つの霊の評議によつて本源的嗜慾がある。彼等が靈を産む其の通りに靈は存在する。

斯くの如き方法で主ルチファは神性を怒らした（「即ち永遠の自然を第一原理に従つて點火した」）。彼は凡て彼の天使等と共に兇惡な惡魔として神性に逆ひ、全領域を彼の産んだ靈のもとに置き、これをして凡てのものを形成せしめ、又全領域は腰を折つて彼の産んだ靈の點火した銳さの支配を受けしめやうとしたのである。

そしてこれが天使の中に實體 (Substanz) をもつてゐると共に、又人間の中にも實體をもつてゐる。夫故、汝等、傲慢、貪慾、嫉妬、忿怒、誹謗、淫亂、竊盜、高利貸の人間よ、如何なる子、即ち靈を汝等は神に送るかを考へて見よ。（「精神は最初成れ (Gen) と云ふ言葉と共に、永遠の自然の中に把捉された（構成された）。これ第一原理による神の自然で、自然の永遠の原始である夫故、精神が原始に於て點火すれば、それは神の怒を永遠の自然の中に點火するのである」）。

諸君は云ふであらう、吾々は彼を神には送らない、只吾々の隣人、或は彼の造つた物の中に送るのみであると。

然らば、諸君は諸君の罪の靈を送る場所を私に示せ、それが人間であらうと、獸であらうと、着物、畑、金或は他の如何なるものであらうと、其處に神の居ない場所を示せ。彼から凡てのものを出、彼は凡ての物の中にあり、彼自身は凡ての物であり、そして凡ての物を保ち、支へるものではないか。

諸君はそこで言ふであらう、彼は彼の怒と共に凡てのもの、中にある。夫故凡てのものはかく堅く、悪く、又神性に似て居ないのであると。

然り、愛する人々よ。凡てこれ眞理である。神の怒は勿論凡てのもの、銀の中にも、金の中にも、石の中にも、畑、着物、動物、人間の中にもある。でなければ、彼等はかく堅くはないであらう。

然し諸君は知らなければならぬ、凡ての物は、それが全然全く悪いものでない以上、その中には愛の核心も又隠れた中心にある。そして人間は斯く全然悪いものでは決してない。神は凡ての物を所有する。只自然に關して云へば、彼は本質ではない。彼は彼自身を所有する。或は

諸君は、諸君が神の怒の中に沐浴して、それで正しい事をしたと思ふのか。注意せよ、彼が諸君の肉體と精神とを點火し、そして諸君は、ルチファの様に、永遠にその中で燃えない様に。

然し、神が此の世の時の終りに隠れたものを露はす時、其の時諸君は何處に神の愛或は怒があつたかを見るであらう。夫故、注意し用心せよ。そして諸君の眼を惡よりそむけよ。怖らく諸君は諸君を亡ぼすであらう。

私は此處に、神が私に啓示して彼の意志であるとしたものを記したのみであると云ふ事に就いては、天と地とを證據とする。

斯の如く、王ルチファは彼の形體の中に於て、甘い水を酸い銳さに變へ、それによつて全神性を彼の傲慢を以て支配しようと考えた。彼は又彼の銳さを以て、此の世に於ける王或は君主として、此の世の凡ての被造物、草や木、其の他凡ての物の心臓を掴み取る迄に至つた。

夫故、若し神的愛が尙此の世界の全自然の中になく、又吾々憐れな人類及び被造物が戦ひの將士を持つてゐなかつたならば、吾々凡ては瞬くまに地獄の穴に亡びたであらう。

夫故吾々は正に歌ふ、生命の最中にあつて吾等は死を以て圍まる。吾等恵を得んが爲めに何處に逃るべき。主クリスト、只汝にのみ！と。

吾々が頼らなければならぬ戦ひの將士がある、彼は即ち吾々の王イエスキリストである。彼は父の愛を其の中に有し、又神的力量と權威とを以て、點火された地獄の狂暴と戦ふのである。

彼の許に吾々は逃れなければならない。そして彼は此の世界に於ける凡ての物の中に於て神の愛を保持する。若しそうでなければ、凡ての物は亡びてしまつたであらう。

只望め、待て、祈れ、

尙暫くの間のみ

遂に惡魔の亡ぶるは。

汝等、神を惡魔とし、彼は惡を欲すと云ふ哲學者及び法律家よ、汝等の正義を保ち得るや否や尙一度汝等の答辯を試みよ。若しそれが出來ないならば、ルチファに於ける酸い靈は、神及び彼の凡ての天の群勢の破壊者、敵として罪を宣告されなければならない。

第十五章

ルチファに於ける罪の初の第三の種類或は様態に就いて

神に於ける第三の靈は苦い靈である。彼は生命の電光から成立した。即ち、生命の電光は鹹い性質と熱との摩擦によつて甘い水の中に昇つて行く。電光の形體は然し甘い水の中に残つて穏和な光、即ち心臓となる。そして電光は非常に震へ、怖と火と水と鹹い靈とに依つて、彼が其の中から昇る處の水の本源を通して苦くなるのである。

此の電光、或は狂暴な恐怖、或は苦い靈は鹹い性質の中に捕へられる。そして鹹い靈の中に於て明かな光に輝かされ、非常に喜ばしくなる。これ即ち可動性、即ち生命の根源で、この根源は鹹い性質の中に於て、言葉を形成し、分別し、これによつて形體の中に思想や意志が成立する。

此の高級榮光ある喜びの靈は、神的サルニタの中に於て、構成の爲めに非常に適當によく使用される。何故なれば、彼は主として音及び愛の中に活動し、生誕に於ける神の心臓に最も近く、喜びに於て彼と結合してゐ、彼自身も又喜の源、或は神の心臓に於ける上昇であるからである。

そして此處には只、丁度人間に於て肉體と精神との差別があると同一以外に、何等の差別もない。肉體は父の七つの本源靈を意味し、精神は父なる神の獨り子を意味する。(「精神の靈は神の心臓を意味し、精神は第一原理に於ける神の目を意味する」)。肉體が精神を産む様に、神の七つの靈も又子を産む。そして精神は産れた時は特異なものであるが、然し、肉體と結合してゐて、肉體がなくては存立し得ない様に、神の子も彼が産れた時は、特異なものであるが、然し父なくしては存立し得ない。

拵注意せよ。ルチファに於ける苦い性質も又これと同じ有様であつた。彼は彼の傲慢に對する何等の原因も持たず、又他の物から何等の衝動をも受けなかつた。然るに彼は父に従ふよりも、鹹い性質の傲慢に従つて、彼も又同じ様に全神性を支配しようと思つて、自ら傲ぶり點火したのである。

彼が形體の中に生氣的(精神的)靈を産んだ時、此の靈は又狂暴な、衝き刺し、怒り狂ふ、點火した、苦い、引き裂く靈、眞の地獄の火の性質、全く狂暴な敵愾物となつた。

拵生氣的(精神的)靈の中に於ける此の靈が、ルチファ及び彼の領域から神性の中へ思案した(思案する (speculire)) 即ち彼の意志をその中へ、産婦の中へ入れる様に入れた) 時に、それは最

早分裂、破壊、刺殺、殺戮、及び害毒の本源以外何物でもなかつた。これについてクリストは云つた「悪魔は始より人を殺す者なり、又眞理に居らず」と（約翰傳、八ノ四十四）。

然しルチファはこれに依つて神以上にならうとし、何人も彼の様に怖ろしく支配し、統治することは出来ないと考えた。凡ての物は彼の前に跪かなければならない。彼は彼の靈を以て、恰も王が彼の權力を以て凡ての物を支配する様に、全き神性を支配しやうとした。彼は最も美しかつたから、又最も力強くならふと思つた。

然し彼は父なる神の中の穩和な、謙遜な本質をよく見、よく知つてゐた。其の上彼は又、此の本質は永遠から斯くの如き穩和な心情に於て存在し、又彼自身も愛する柔順な子として、斯くの如き神的穩和に於て産まなければならぬ事をよく知つてゐた。

然るに彼は今、自然に於ける王として、斯く美しく立派に造られた。夫故、彼の美しい姿は彼を刺し、そして斯く考へた、自分は神の中にあり、又神から造られてゐる、誰が自分を征服し、或は變へるものがあらうか、自分は自ら神にならう、そして自分の鋭さを以て凡てのものを支配しやう、自分の形體は人間が尊崇する像でなければならぬ、自分は自ら新しい國を得やう、何となれば、凡ての領域は自分のものであり、自分のみ神で、他に神はないから、と。

彼は此の傲慢に依て自分自身を暗黒と盲目とを以て打つたのである。そして自分を悪魔とした此れ彼のならなければならぬもの、又永遠をうなづてゐなければならぬものである。（彼は神に就いて只その華麗を見たのみで、その中心に於ける、簸ひ杓子を以てゐる言葉を認めなかつた。彼は彼自身を鹹い暗黒を以て盲目にした。何故なれば、彼は自ら點火して、火の中に於て光と穩和な心情とを支配しようと思つたから）。

扱此の悪い悪魔の靈が（産婦の中心を理解せよ）神のサルニタの中に於て活動し、その中に於て凡てを敗壞した時に、そこには只刺傷、燃燒、殺戮、竊盜及び傲慢なる反逆があるのみであつた。神の心臓は愛と穩和の心情とを欲した。然るにルチファはこれを暴力によつて狂亂に變へやうとした。其故敵意と反逆とより外何物もない。彼は暴力を以て永遠から靜かな、穩和な心情の中にあつた神のサルニタを點火したのである。

神が彼を憎むもの、即ち彼等の悪魔の如き靈、咒咀、罪惡、心にある凡ての狂暴、傲慢、貪慾、嫉妬、忿怒を以て、神の怒と忿怒とを更に多く點火するものに對して自ら、怒の神、妬みの神と云つたのは此の點火に就いてある（出埃及記二十ノ五、申命記五ノ九）。凡て汝の中にあるものを汝は神、即ち自然の産婦の中に投げ入れる。夫故それは、精神の靈と雖も亦火に依つて試みら

れなければならぬ。そして害悪は火の中に止まらなければならぬ。

諸君は云ふ、どうして斯かる事があり得るか。

諸君が諸君の眼を開いて神の本質を見る時は、諸君は恰も荆棘を以て刺す様に神の本質を刺し、そして神の怒を動かす。若し音が諸君の耳に響いて、諸君がそれを神の本質から受け捕へる時は、諸君は恰も雷鳴をその中に投げ込むかの様にそれを感染する。

思へ、諸君は諸君の愛する新生の子が、凡ての七つの霊の子として、諸君の言葉と共に出て行く處の鼻及び口を以て、諸君は何を爲すかを。それはルチファが爲した様に神のサルニタを傷害しないかどうか。オ、兩者の間に全く何等の差違もない。

之れに反して神は言ふ、「我は我を愛する者には恩恵の神なり、彼等には我れ千代に至るまで恩恵を施さん」と（出埃及記二十ノ六、申命記五ノ十）。

注意せよ、彼等とは點火した怒の火に反して、彼等の愛と温情と愛の熱心な點火と祈とを以て怒の火を消し、點火した暴性を抑壓する人々である。

勿論此の場合に多くの烈しい衝突がある。何故なれば、點火された神の怒の火は、彼等が何處に止まるべきか分らない位彼等を攻撃するから。彼等の上には重い山が押しかゝつてゐる、愛の

十字架は重く彼等を壓する。

然し、豫言者ダビテの言つた言は、暴性と點火された火とに對する彼等の慰め、強い胃である。

「敬虔なる者には暗き中にも光あらはる」（詩篇百十二ノ四）。

正に此の神の怒と、惡魔の點火された暴性と、凡ての神なき人々とに對する戰に於て、敬虔なる人の心には光が昇るのである。そして神の親しい愛が彼を取圍み、彼をして彼の十字架に失望せず、更に進んで怒と狂暴とに對して戰はしめるのである。

若し此の地上に、尙神の怒と彼等の抗抵を以て消す或る敬虔なる人々とがなかつたならば、地獄の火はとうに點火したのであらう。そして、諸君は、今はそれを信じないが、どこに地獄があるかをよく見ることが出來たであらう。

然し靈は斯く言ふ、暴性が此の世界に於ける愛の抵抗を征服するや否や、火は急ち點火して、此の世界には最早何等の時間もないやうになると。

然し、暴性は今怖ろしく燃えてゐると云ふ事は少しも證明を要しない。何故なれば、今は晝であるから。見よ、神の特別な愛によつて小さな火が尙怒に反對して昇つてゐる。若しこれさへ弱くなる時、其の時こそ時間の終である。

然しルチファが神のサルニタの中に暴性を喚び起し、それが爲めに此の世界がかく荆棘となり、岩石となり、嫉妬、兇惡となつたに就いては、ルチファが果して正しいかどうか、これをルチファの代辯者、辯護士はこゝに答辯しなければならぬ。然らざれば、此の第三の苦い、刺す靈も又罪に宣告されなければならない。

ルチファに於ける罪の初の第四の種類或は様態に就いて

神の第四の靈は熱である。彼は苦い性質と鹹い性質との間に産れ、甘い水の中に受け容れられ光り輝き、そして生命の眞の源泉である。これ甘い水の中に於て彼は全く穩和になるからである。そこから愛が成立し、そしてそれは只愛すべき温かみであつて決して火ではない。その隠れた核心に於ては火の性質或は本源であるが、然し、その火は未だ點火されてゐない。何故なればそれは甘い水の中に産れるから。水のある處には火は決してなく、却つて愛すべき温かみと穩和な作用とがあるのみである。然し若し此の火が乾く時には、そこに燃える火が生ずる。

斯くて主ルチファは考へた、若し彼が彼の火を點火するならば、彼は權力を持つて神的力量を支配することが出来るであらうと。然し彼は又考へた、その火は永遠に燃え又照らさなければなら

ないと。彼の目的は光を消すのではなく、それを火の中で絶えず燃えさせようと思ふのであつた。そこで彼は水を乾かせば、光は燃え立つ火の中で動くであらうと考へた。然し彼は、若し乾いた水を點火すれば、その核心即ち水の油、心臓は消滅して光は暗黒となり、水は酸い惡臭となることを知らなかつた。

何故なれば、水の中の油或は脂肪は温情或は慈悲によつて産れ、そしてその脂肪は光がその中で光る處の油であるから、脂肪が燃え盡せば、水は酸い惡臭となり、更に全く暗黒となるのである。

ルチファの傲慢も又斯の如くであつた。彼は暫時彼の點火した光を以て勝ち榮えた。然し、彼の光が燃え盡した時は彼は黒い惡魔となつた。彼は燃える光を以て永遠に全神的力量を、全く怖ろしい神として、支配しやうと考へた。そして彼の王國の全領域を點火しやうとして、火の靈を以て神のサルニタと戦つた。彼はこれを或る程度に於て成し遂げ、神的力量をして燃えるに至らしめた。これ尙太陽や星によつて證明されてゐる。同様に又、火は時々元素の中のサルニタに於て點火するから、人は深み (die Tiefe) が燃えると思つてゐる。これに就いてはその場所を取り扱ふであらう。(彼は穩和から痛ましい火の意志に歸つて、暗黒に落ち入つた。讀者は如何なる場所に於

ても悪魔が神の光を点火したと思つてはならない。却つて只光がそこから照る處の自然の様態を点火したのみである。何故なれば、丁度火が光を捕へることの出来ない様に、彼も光を捕へることとは出来ないから。彼は火の中にはいつた、そして暗黒の中に追ひ出された。そして彼の被造物性以外には火も光も持たないし。

扱、斯の如き性質に依て王ルチファは自ら正しい地獄の浴場を作つた。彼は、神が彼に地獄の性質を造つたのであると、云ふ事は出来ない。否それは彼自身である。彼は此の爲めに神性を害ひ、神の力から地獄の浴場を作つて、それを彼の永遠の住家としたのである。

彼及び凡て彼の天使等が、彼等の形體の中に於て、火の本源靈を点火した時、甘い水の中の油は燃えた。そして光の生誕の時に怖ろしく上る處の電光或は恐怖から、狂暴、破裂、燃燒、刺殺及び全き反逆の本質が生じた。

其處で、此の性質の中に於て、生命から死の刺が生じた。何故なれば、熱によつて苦い性質は恰も全身がまつたく火の刺となつたかの様に、狂暴な、刺し、怒り、燃えるものとなつたから。かくて彼は鹹い性質の中に於て、恰も人が火の針を以て全身を刺される様に、引き裂き、暴れ狂つた。

これに反して鹹い性質の冷たい火は熱に反抗し、苦い毒に對して、恰も大きな暴動の様に、暴れ狂つた。そしてルチファの形體の中には殺戮、竊盜、燃燒、刺殺、全々怖るべき地獄の火、以外に何物もなくなつた。

此の火の靈及び眞の悪魔の靈は、かくて又、心臟の中心に於て傲ぶり、生氣の靈（此の語に於て、産婦、即ち、神の似姿なる七つの本源靈から産れる處の、中心から出る意志の靈を理解せよ）によつて全神的力量を支配し、そして新らしい力強い神として神の全サルニタを点火しやうとした。

扱私が此處に生氣の靈について書く時、諸君はそれが何で、又どんなであるかを、正確に知らなければならぬ。然らざれば、諸君は此の生誕を讀んでも無益であらう。そして諸君に、恰も神の面前まで昇つて來ながら、遂に神を見ることが出来なかつた、かの賢い異教徒の様な事が起るであらう。

精神の靈は、形體、或は、形體を保持し構成する處の七つの本源靈よりも更に精緻で理解し難くある。何故なれば、彼は恰も聖靈としての神が父と子とから出る様に、七つの靈から出るから。七つの本源靈は、その結集し形成した體を、自然即ち神的力量に於ける第七の自然の靈から得

る。此の（第七の自然靈）を私は此の書物で神のサルニタ或は感知性（Begrifflichkeit）と呼んだ。天的諸形象は此の中から現はれる。これは凡て七つの靈と同じく靈である。たゞ他の六つは其中に於ける非感知的本質である。何故なれば、神的力量は第七の、自然靈の感知性の中に於て、被造物には感知し得られない隠れたるものとして産れるから。

生氣的靈、即ち精神 \parallel 靈は然し、心臓に於て、恰も神の子が産れると同じ種類、状態に於て七つの本源靈から産れる。そして彼の座を心臓の中に保ち、其の座から神的力量の中へ、恰も聖靈が父と子とから出る如く、出て行く。何故なれば、彼は聖靈としての神と同じ精美を有し、聖靈としての神と共に作用するから。

生氣的靈が形體から出る時は、彼は隠れた神性と同一のものである。そして自然に於ける事物の構成に於ては、神の聖靈と同様にその中に與つてゐる。これについて諸君は例を持つてゐる。例へば大工が人工の家を造る場合、或は他の技術家が或る人工的作品を造る場合に、其の仕事が最初に始めるものは手―それは自然を意味する―ではなく、却つて七つの靈がそれについての最初の工夫で、そして生氣的靈は七つの靈にその形式を指示する。其處で七つの靈がそれを造り、理解し得るものとする時、其の時始めて手は與へられた型に従つて勞作するのである。何故なれ

ば、若し諸君が作品を造らうとする時は、諸君はそれを先づ心意（*Willen*）に持ち來さなければならぬから。

精神は最高の心意を理解する。彼は彼の父なる神が、天に於ける構成に於て、何を造り勞作するかをよく見る。夫故、彼は自然靈に對して、如何に事物を造るべきかのモデルを描く。そして此の精神の模型に従つて此の世界の凡ての物は造られたのである。敗壞した精神は、自ら天の型を造り得るように常に努力するが、然しそれをなし得ない。何故なれば、彼はその仕事、作品に對して只地的な、敗壞したサルニタ、然り、半ば死んだ自然を有するのみであるから。かゝるもの、中に於て彼は天の型を造ることは出來ないのである。

これによつて諸君は、追放された天使の靈は、天上的自然に於ては、如何に大なる力を持つてゐたか、敗壞の本質は如何なるものであるか、又如何にそれが天に於ける自然をその場所に於て敗壞し、此の世界を支配する怖るべき狂暴が成立したものであるかの狂惡な點火に依つて、それを荒蕪せしめたか、を知る事が出来るであらう。

誠に點火された自然は尙常に最後の日まで燃えつゞけ、そして此の點火された火源は永遠に神の敵である。然し果して此の點火した火が正しいか、神自身が彼を點火し、それによつて怒の火

が生じたのであるか、を彼の豫定論者は答辯し、自然に依つて證明しなければならぬ。然らざれば、此の火の靈も又罪の宣告を受けなければならない。

ルチファ及び彼の天使に於ける罪の初の第五の類或は様態に就いて

神力的に於ける第五の本源靈は慈悲深い愛である。愛は温情及び謙遜の眞の姿 (Anblick) で、又生命の電光から生れる。電光が驚駭として迅速に閃めく時は、それに依つて喜が生ずる。そして點火された光の材料は甘い水の中に止まり、火を通して電光の方へ鹹い性質に達するまで穏やかに押し進む。そして火を和らげ、鹹い性質を穏和に柔らかにする、これは水の生誕である。

然し、火が穏和な、甘い、柔かい味を味ふ時は彼は、穏和となり、穏やかな、全く愛すべき暖かみとなる。そして此の愛すべき穏和な暖かみを以て鹹い性質の中へ透入し、冷たい火を静め、堅いものを柔かくし、厚いものを薄くし、暗黒を光とする。

然し、苦い電光が鹹い靈及び火の靈と共に此の温情を味ふ時は、其處には最早單なる憧憬と希望と完成、全く穏和な愛すべき力、味、争、接吻及び愛の生誕以外何物もない。これ凡ての本源靈の嚴しい生誕は、此の透徹の中に全く穏和で、愛すべく、親しむべきものとなるからである。そして

こゝに神性が成立する。

神的生誕は最初の四つの本源靈の中にあるから、夫故彼等は、彼等の穏和な母なる水を持つてはゐるが、然し非常に強く厳しくなければならない。そして第五から慈悲深い愛が成立し、第六から喜が成立し、第七から成形即ち感知性が成立する。

扱、ルチファよ、汝の愛を以て汝は如何なる行爲をなしたか。汝の愛も又斯の如き源泉であるか。吾々は今又それを見、汝が如何に愛すべき天使であつたかを知らふと思ふ。

注意せよ。若しルチファが自ら傲つて點火しなかつたならば、彼の愛の源泉は神の中に於けるものと何等異つたものではなかつたであらう。何故なれば、彼の中には神の中にある以外のサルニタはなかつたから。

然るに、彼が彼の生氣的靈によつて全神性を支配しやうと傲ぶつた時に、甘い水の中にあつて愛の核心であつた處の光の材料及び心臓は、烈しい強迫的な火の源となつた。これによつて全形體の中に震動し、燃燒す統御及び生誕が出來たのである。

扱、生氣的靈が此の嚴しい鹹い火の生誕から生れた時に、彼は非常に怖ろしく形體から、自然、即ち、神のサルニタの中に進入して、そしてサルニタに於ける慈悲深い愛を破壊した。彼は狂暴

者の様に全く烈しく又火の様に、凡てのものを通して突き進んだ。そして彼の神であると思ひ、暴威を以て凡てを支配しやふとした。

これによつて神とルチファとの間に非常な反對と永遠の敵意が生じた。何故なれば、神の力は非常に穏和に、愛すべく、親しく作用して、人は全々その生誕を理解し得ない程であるが、ルチファの靈は非常に厳しく、迅速に、炎の様に動くから。

これについての例を諸君は星の點火されたサルニタに於て持つてゐる。即ち星は此の點火された狂暴の爲めに、虚榮を以て最後の日に至るまで急速に回轉しなければならぬのである。その後暴性は彼等から分離して、永遠の住家として王ルチファに與へられる。

これ神に於ては非常に彼の意志に反することであると云ふことは、何等の證明をも要しない。

然し、人は思ふかもしれない、かゝる狂暴な火が彼の形體に昇る場合には、非常な嫌厭と不快とを彼は持つてはなからうか、如何に度々彼の全形體は激怒するであらうかと。これ勿論惡魔の宿となつてゐる人々には起る事である。然し彼は客であるから、恰も馴らされた犬の様に靜かにしてゐる。一度然し彼が主人となる時は、彼は神の體に對して爲した様に、其の家を荒敗する。

夫故神の怒の火は尙、此の世界に於ける神の體の中に終りまである、そして多くの被造物は怒

の火に呑み込まれる。然し此の事については適當な場所に譲る。

扱、神自身が果して此の敵意と狂暴な火の本源とをルチファの中に造り、又點火したのであるかどうか、これをかの攝理と恩恵との辯護者は答辯し、又自然に於て證明しなければならぬ。然らざれば、此の愛の代りに存する敗壞した火の本源も又罪の宣告を受けなければならぬ。

ルチファ及び彼の天使に於ける罪の初の第六の種類或は様態に就いて

神の力に於ける第六の本源靈はメルキュリウス、即ち音で、そこから差別と天上的喜とが生ずる。此の靈は彼の起源を火の電光、即ち苦い性質からとる。そして甘い水を通して電光の中に昇る。この中に於て彼は自分を柔げ、明かな輝くものとする。鹹い性質の中に捕へられ、そこで彼は凡ての靈を、刺戟する。この刺戟から音が昇り、電光から彼の上昇する源が成立し、愛に於ける甘い水から彼の體或は根が成立する。

此の音は實に、神的喜悅、凱戦であつて、其の中に神に於ける神的な又穏和な愛の遊戯、及び形、構造、あらゆる事象が生ずる。

然しこゝで諸君は知らなければならぬ、この性質は、丁度人間の心臓に於て愛すべき、穏和

な喜の火が昇り、その中に於て生氣的（精神的）靈が天にあるかの様に勝ち榮えると同じ種類、仕方に於て、その刺戟を以て凡ての靈に全く穩和に又愛すべく透入する。

此の靈は又形體の構成には屬しないで、差別及び可動性、とくに構成に於ける喜と差別とに屬する。

生氣的靈が七つの本源靈の眞中に於ける心臓の中心に産れ、かくて七つの靈の意志が結集される時は、音は彼を形體の方へ導き出す。そして音は靈がその上に乗つて進む處の車であつて、七つの靈の評議に依つて決定されたものを實行する。

何故なれば、音は生氣的靈を通して神の自然の中、即ち彼の初の母である神的力量に於ける第七の本源靈のサルニタの中にはいり、そしてそれと共に、形を造つたり構像の區別に共働作用するから。

夫故、王ルチファが、音の中に於て、彼の傲慢な駒 (Pöbel) を、凡て七つの靈の中に於ける火の激動にかへた時に、それは神のサルニタの中に於ける怖ろしい反逆であつた。

何故なれば、彼の生氣的靈が彼の形體の中に産れた時に、彼は丁度炎の蛇が穴から出る様に、彼の形體から出て神のサルニタに刺し入つた。然し口が話す爲めに開いた時に、即ち七つの靈が

彼等の意志に於て言葉を構成し、音によつて神のサルニタに送つた時に、恰も炎の雷鳴が神の自然の中にはいつた様であつた、或は又暴れ狂ふ怒の蛇が自然を引き裂かうとするかの様であつたから。

夫故、吾々が悪魔を老蛇と呼ぶ起原はこゝにある（黙示、十二ノ九）。又夫故に、此の敗壞した世界に蠅や、蛇や、凡ての蛆蟲、蝦蟆、蠅、蟲、蛋、などがあり、又そこに此の世に於ける雷鳴電光、霰など、嵐の起原があるのである。

注意せよ。音が神的自然に昇つた時に、彼は凡て七つの本源靈から同時に、穩かに昇り、そして言葉、即ち事象を穩和に産んだ。即ち、一つの本源靈が一つの意志を創造して産まふとする時は、彼は穩和に他の本源靈を心臓の中心まで壓する、そして其處で其の意志は凡ての靈に依つて造られ、認容されるのである。

そして其の時他の六つの靈は彼を、神の生氣的靈から音の中に發言する。神の心臓から、即ち中心に結成された言葉として存在する神の子からと、解せ。

此の言葉の電光、或は言葉の震動、—それは音であるが、—は言葉から穩和に出て、言葉の意志を遂行する。そして此の言葉の流出が聖靈で、彼は心臓の中心に於て、父なる神の七つの靈の

評議に於て決定されたものを構成する。

斯くの如き穏和な種類、仕方に於て、王ルチファも又、産み、作用すべきであつた。そして神の正義に従つて、サルニタ、即ち神的自然の中に彼の生氣的靈を以て、自然に於ける愛する子として構成を助くべきであつた。

丁度子が家に於ては父の仕事を彼の仕方、技術に従つて遂行することを助ける様に、斯様に又ルチファも彼の天使達と共に、父なる神の大いなる家に於て、神の仕方、方法に従つて、彼の生氣的靈を以て、神のサルニタの中に凡ての形、生物を構成することに助力すべきであつた。

何故なれば、全サルニタは天使の形體の「樂の家」であるべきであり、又凡ては彼等の靈の樂に應じて發生し、構成して、彼等が如何なる形、被造物についても、常に永遠に何等の不快を持たず、却つて彼等の生氣的靈は凡ての構成の中心にあるべきであり、「天的本質からの構成は魔術的に起る。凡て自然と被造物との意志と能性とに従つて」、そしてサルニタは被造物の所有であるべきであつたから。

彼等がかく神的正義に従つて、彼等の穏和な生誕の中に止まつてゐたならば、凡ての物は彼等の所有であつたであらう。そして彼等の意志は常に永遠に満たされ、彼等のものと、及び彼等の

中には、單に愛の喜以外何物もなかつたであらう。地的に語るならば、恰も永遠の笑ひ、及び永遠の享樂に於ける絶えざる喜びであつたであらう。

何故なれば、神及び被造物は一つの心、一つの意志であつたであらうから。「精神の火から生れた像、及び愛或は神的中心は一つの本體の中にある」。

然るにルチファが傲ぶつて、彼の本源靈が點火した時、生氣的靈は音の中に於て、恰も蛇或は龍の様に、天使ルチファの凡ての形體から神のサルニタの中にはいつた。そして暴悪なる動物の様ならゆる有毒な、火の形、像を造つた。

此の世界に於ける暴悪なる動物の起源は其處にある。何故なれば、ルチファの群勢は星及び地のサルニタを點火し、半ば殺し、破壊したから。

そは、神が、ルチファの墜落後、此の世界を創造し時、その凡てのものはルチファがその中に居つた處のサルニタから造られた。従つて又、此の世界に於ける被造物は、其の點火された性質に従つて構成した處のサルニタから、善くも悪くも造られなければならなかつたからである。

火或は苦い、或は鹹い性質を最も強く、メルキユリウスの中に持つてゐる動物は又、その最も強い性質に應じて苦い、鹹い、熱い、又狂暴な動物となつた。此の事を私は只手引として書くの

みである。此の世界の創造の場所で諸君はもつと十分に證明されてゐるのを見るであらう。

扱、此のルチファ及び彼の天使に於ける火の音、及び龍の靈が正しいかどうか、又神が彼をか

く造つたかどうか、これを神を悪魔とするルチファの代言人はこゝに辯護しなければならない。

そして又自然に於て、神は悪を欲し、悪を造つた神であるかどうかを證明しなければならない。

若しそれが出来ないならば、此の靈も又永遠の獄に投せられなければならない。そして彼等は彼等の詐と瀆神とを止めなければならない。でなければ彼等はかの、神に就いて何事も知らないが、しかも神の中に生息してゐる、粗朴な異教徒よりも、更に悪いものであらう。そして此れ等の人々の方が彼等よりも早く神の國を得るであらう。この事に就いては尙適當な場所で明かにしようと思ふ。

第十六章

ルチファ及び彼の天使に於ける罪の初の第七の種類或は
様態に就いて

諸君は諸君の眼を正しく開け、然らば、諸君は、世の初め以來凡ての人間に隠されてあつた隠れたる事物を見るであらう。諸君は悪魔の虐殺の窟、怖ろしい罪惡、敵意、破壊を見るであらう。

悪魔は彼の國を固くする爲めに人間に魔術を教へた。然し、若し彼が其の後に隠してある眞の原因をも示したならば、多くの人々はそれに關はらなかつたであらう。

來れ汝等欺瞞者、妖術者、悪魔と媚びを交はすものよ、わが學舎に來れ、私は汝等がいかにその妖術によつて地獄に行くかを教へるであらう。汝等は悪魔が汝等に服従してゐると思つて喜び且つ自分を神と思つてゐる。私はこゝで魔術の手工品を暴くであらう、そは私も又自然の研究報告者になつたから。然し汝等の様にはなく、却つて汝等の恥を神的啓示によつて暴露し、これを

最後の世に傳へ、汝等の智慧を審判せんか爲めである。審判は智識に對して續いて起る。

怒の弓は既に張られた。各々の人は的ターゲットの中へはいらない様に用心せよ。眠より醒める時が來たから。

神力的の第七の様態或は第七の靈は自然、即ち他の六つからの湧出である。何故なれば、鹹鹹性は質はサルニタ即ち凡て六つの靈の作用した結果を、恰も磁氣が石のサルニタを引きつける様に、寄せ集め、そしてそれが寄せ集められた時には知覺し得べき性質となるから。然し神の六つの靈は其の中に知覺し得られない仕方で作してある。

此の第七の靈は凡ての他の靈と同じ色と状態とを持つてゐる。何故なれば、彼は凡ての靈の體で、凡ての靈は其の中に於て恰も物體の中に於ける様に産まれるから。又同様に、此の靈から凡ての事象、形式が造られ、天使もそれから造られ、そして凡ての自然性自然性も又其の中にある。

此の靈は常に他の六つから産れ、常に存在して嘗て無くならず、又再び絶えず他の六つを産む。これ他の六つは此の第七の中に、恰も母の中にある様に、抱擁され、その養ひと力とを常に母の體から取るからである。第七のものは體で他の六つは生命である。そしてその中心に光の心臓がある、これは生命の光として七つの靈が永遠に産むもので、光は彼等の子である。そして凡ての靈

を通しての活動する可動性、或は貫徹は光の出現と共に心臓の中に昇る。これ凡ての七つの靈の靈で、神の心臓から出、第七の靈の中に於て凡てのものを形成し、又此の中に於て本源靈は彼等の愛の遊戯で無限に現出する。

神性は丁度車輪の様なものである、それは輞スポックと輻レイブと凡ての轂コシキとを以て廻轉し、そしてそれは七つの輪の様に互に輞をかけられて、前へも、後へも、又上へも、下へも、横へも轉向することなくして進むことが出来る。

吾々は常に凡ての七つの輪の形、及びその七つの輪の眞中の一つの轂を見るが、しかしどうしてその車が出来てゐるかを知らず、却つて車は益々不可思議に現はれ、しかも常に同じ場所に止まるのを不思議に思ふ。

斯様な方法で神性も又常に産れ、然し決して消滅しない。そして斯様な方法で天使や人間に於ける生命も常に産れる。

神の七つの靈の運動によりて、可死的な事象や被造物が形成される、然しかくして産れるのではない。たとへ凡ての七つの靈の生誕は其の中に現はれて居るが、然し彼等の性質は只第七の自然靈の中に存在するのみで、これが他の六つを彼等の性質、彼等の争闘 (Ring n. Wrestling) 然

上昇に従つて構成し、變化するのである。夫故又事象、可死的の形、被造物等は、その中に彼等が現はれる處の第七の自然 \parallel 靈の状態に従つて變化される。

天使は然し可死的被造物の様に啻に、第七の自然 \parallel 靈から構成されたのみではない。否、神性が天使の創造を發意した時に、各天使が結成された處の各範圍には又、神性はその全實體と本質とを以て結成し、(二)二つの永遠の原理、即ち火と光とを理解せよ、而も火の本源ではなく、その本質を \parallel 、そして形體がそれから生じ、然も神性は以前と同じくその場所に止まつたのである。

これを正しく理解せよ。

天使の形體、即ち感知性は第七の靈からであり、此の形體の中に於て産れるものは六つの本源靈及び靈即ち心臓である。この靈は六つの靈が形體の中心に於て産むもので、その中から光が生じ、光から生氣的靈が生ずる、これは又形體以外に神性と作用する、これ聖靈が出る處の神の心臓を意味する。そして此の生氣的靈は又神の心臓から、最初の結成の時に、天使の形體中に混入された。夫故神性と同じ様に、心意 (emotions) の中に天使の支配が産れる。

そして丁度他の六つから生ずる神の第七の自然 \parallel 靈の中には他の六つの靈の全く完全な認識はない様に、何故なれば、彼等は彼等の父で、彼を自身から産んだものであるから、彼は彼等の深

い生誕を探究し得ない、同様に又天使の形體の中にも神の全く完全な認識はない、只靈、それは心臓の中に産れ、光から出で、又神の心臓及び靈と作用する處の靈であるが、その中にのみ神の完全な認識がある。然し、形體は、第七の自然 \parallel 靈が神の深い生誕を理解し得ない様に、生氣的靈を理解し得ない。

何故なれば、第七の自然 \parallel 靈が産れた時に、彼は鹹い性質によつて乾かされた。そして恰も父から引留められた様で、再び深み、即ち子が産れ聖靈が現出する處の心臓の中心に、歸ることが出来なかつた。却つて彼は産れた體として靜に止まり、本源脈、即ち、靈をして欲するがまゝに彼の中で作用し、働かしめなければならぬ。何故なれば、彼は他の六つの靈の家或は所有物で彼等はそれを欲するまゝに建てるし、又譬へば彼は遊園で、主人は彼の意のまゝに、色々の種子を蒔き、それを樂しむと同じであるから。

斯様に他の六つの靈は常に此の遊園を建設し、そこへ彼等の種子を蒔いて、彼等の力を強くする爲め、又彼等の享樂の爲めにする。これ即ち、天使がそこに住んで遊び樂み、又その中に於て天の果實が生ずる樂園である。然し、此の樂園に於ける生物及び形像に表はれて居る驚くべき整合調和は、他の靈の活動や愛の鬭争に依るのである。何故なれば、戰に於て首位となるものが、

彼の性質に従つて生物を造り、他のものは常にそれを助け、かくて或は此れ、或は彼れ、或は第三と次第に生ずるから。

夫故非常に多種多様な生物及び形像が生ずる。それは天使の體的理性には全く探知し得られず理解し得られないが、然し天使の生氣の(精神的)靈には完全に理解し得られる。

これは又私の肉體にも全く隠れたものであるが、私の生氣の(精神的)靈にはそうでない。私の生氣の靈が神と共に作用する間は、彼はそれを理解するが、然し彼が罪に陥入れば、戸は彼に對して惡魔の爲めに閉ざされてしまふ。そして靈の大なる努力に依つて再び開かれなければならぬ。

私はよく知つてゐる、多くの神なき人々の心に於ては、惡魔の怒がこの啓示を嘲るであらう、何故なれば、惡魔は此の啓示を非常に恥づるから。彼は私の心にもこれによつて多くの惱みを與へた。然し私はそれを、斯くなさんとする神の意志に委せた。私は彼に反抗することは出来ぬ。そしてたとへ私の地的肉體はそれによつて破滅しやうとも、然し私の神は私の認識に榮光を與へるであらう。

此の私の認識の榮光 (Glorifizierung) をこそ私も又切に望むので、他に何物をも私は望まない。

何故なれば、私は、私が復活の日に、此の私の現在の敗壞した肉體から脱して、新らたに得る處の私の新しい肉體の中に此の靈が現はれること、又此の靈は神性及び天使に酷似してゐること、を知つてゐるから。

私の靈に於ける榮えある喜の光はそれを充分に私に示すから、私はその中に於て神性の深みまで探究した。そして、たとへ非常に無力と薄弱とに於てはあるが、それを私は私の靈の天賦と衝動とに従つて書き記した。そして私の生れ付きの現實の罪は度々戸を閉ぢて、惡魔は淫奔な女の様にならぬで踊り、私の捕はれと苦悶とを喜んだが、然しそれは彼の領土に何の利益も持ち來さない。

夫故私は彼の狂暴な怒りを待つより外ない。然し私の信頼する者は戰に於けるかの將士で、彼は私を度々惡魔の縛繩から解き放してくれた。私は彼と共に私の死別の時まで戰はふと思ふ。

第七の自然 || 靈に於けるルチファの、怖ろしき、嘆かはしき、
痛ましき敗壞に就いて

死の悲哀の家。若し凡ての木が手であり、凡ての枝が筆であり、又凡ての山が本で、そして凡

ての水がインクであつても、彼等は、ルチファが彼の天使と共に彼の國土に持ち來たした惱みと嘆きとを充分に書き記すことは出來ないであらう。

何故なれば、彼は光の家から暗黒の家を造り、喜の家から悲の家を、愉快と爽快との家から渴と飢との家を、温情の家から永遠の叩き (Poehen) 雷鳴、電光を、平和の家から永遠の悲と涙との家を、笑の家から永遠の恐懼と惡臭と凡ての實の嫌惡とを、光と慈悲との生誕から永遠の地獄の苦痛を、愛すべき食物から永遠の恐懼と惡臭と凡ての實の嫌惡とを、又リバノンとシーダとの家から岩石の火の家を、甘い香から惡臭、荒敗と破壊との家、凡ての善の終を、神的形體から黒い暗黒な、冷たい暑い、自らを噛みしかも決して食ひ盡さない惡魔。―神と彼の天使に敵し、凡て天の群勢から攻められる惡魔とを、造つたから。

扱注意せよ、學者は此の世界に於ける凡ての被造物、並びに太陽や星に存する狂暴な惡性について多く議論し、思案した。のみならず、實に此の世界には或る有毒な惡い動物、虫、植物さへある。夫故、分別ある人々が驚き怪んだのも、無理はない。そして或るものは結論した、神がかく多くの惡を造つたのを見れば、彼は必ず惡を欲したのであらうと、或るものは又此の罪をアダムの墮落に歸し、或るものは惡魔の働きに歸した。

然し、凡ての動物植物は人間より前に造られたから、人間にその罪を歸することは出來ない。

人間が初めて造られた時は、彼は動物の様な體を備へて居なかつた、これは彼の墮落に際して初めて出來たのである。又人間は獸、鳥、虫及び石の中にある惡性と毒性とを持つて居なかつた。何故なれば、彼は彼等の様な體を持たなかつたから。若しそうでなく、人間が凡ての被造物に暴性を與へたのであるならば、彼は惡魔と同じく永遠に何等神の恵を得なかつたであらう。憐むべき人間は、彼自身の企てた意志に依つて墮落したのではなく、惡魔の與へた毒によつたのである。でなければ、彼に救の望はないであらう。

諸君は此等の正しい教訓が此處に書き記されてあることを見出すであらう。然しこれ、他人を誹謗する情熱からではなく、私の愛からであり、又私の靈の深淵からの謙遜な教訓で、そして今最後に此の世を死別せんとしてゐる憐れな、病める、古いアダムのせめてもの慰安の爲めである。

吾々凡てはクリストに於て一つの身體である。夫故此の靈は又、その同胞が死別の前に神の貴い酒の一杯によつて元氣付けられ、それに依つて惡魔の戦に堪えて勝利を得、此の現在の醜陋した世界に於ける惡魔の勝利が破壊されて、主の大いなる名が淨められんことを切に願つた。

扱見よ。王ルチフは彼の天使と共に、神の中のチェルビム及び王として、非常に立派に神々しく造られた時に、彼はその美しい形態をして自分を欺かしめ、愚かにも自分の中に如何に尊い美しい神々しい靈があるではないかと考へた。其處で彼の七つの本源靈は、自ら上昇し點火して、生氣的精神的靈の様にかく美しく力強くなり、それによつて彼等も全領域を自身の力と權威とを以て、新らしい神として支配しやうと欲した。

彼等は、生氣的（精神的）靈は神の心臓と作用してゐる事をよく知つてゐた。夫故彼等も又、神の心臓の中心に於ける最深の深みの如く、同様に明かに深く、又全能にならうとの希望を以て、上昇し點火しやうと決心した。

彼等は神の自然 \parallel 靈から結成された自然的の體を神の隠れた生誕にまで高め、かくて彼等の七つの本源靈が生氣的（精神的）靈の位に高く、又凡てを理解するものとしやうと考へた。そして生氣的（精神的）靈は神の心臓の中心に於て勝ち榮え、神の心臓は彼に服従し、神の七つの靈は彼等の生氣的靈と共に凡てを構成しなければならぬと考へた。

そして此の傲慢と我意とは全々神の生誕に反對してゐた。何故なれば、天使の體はその置位に止るべきであり、又一つの自然であるべきであり、又謙遜な母の靜謐を維持して、全智や聖三一

體の心臓、或は最も深い生誕について自身の理解を求むべきではなく、却つて七つの靈は彼等の自然的體の中に於て、神の中に於けるが如く、自ら産むべきであつたから。

そして彼等の感知性は神の隠れたる核心、或は神の内的生誕の中にあるべきではなく、却つて彼等の心臓の中心に於て産んだ處の生氣的靈、これが神の内的生誕と作用し、神的華麗の中に於て凡てのものが一つの心臓、一つの意志であらんが爲めに、七つの靈の好みと意志とに従つて、凡ての型像を構成することを助くべきであつた。

これ神の生誕も又斯様であつたからである。第七の自然 \parallel 靈は、彼を産んだ父迄は歸着するとは出來ず、却つて、自らは體となつたものとして靜止し、そして父の意志である處の他の六つの靈をして、彼等の好む様に自分を構成させるのである。

同様に如何なる他の靈も獨り放れて、彼の形體的本質を以て神の心臓までは達せず、却つて彼の意志を他のものと共にその中心に於て、心臓の生誕に結びつけ、かくて神の心臓と七つの靈とは一つの意志となる。

感知性〔感覺性〕は非感知性まで高まることは出來ないと云ふのが感知性の法則である。何故なれば、中心或は真中に於て凡ての七つの靈が結成される方は、感知することが出來ず、又探究す

ることも出来ないから。しかしそれは一つの靈の力のみではなく、凡ての七つの靈の力であるから、見得られないものではない。

斯様であるから、一つの靈は、彼の内在的生誕を外にして、彼自身の形體に於ては、神の全き心臓にまで達し、凡てを吟味し探究することは出来ない。これ彼は彼自身の内在的生誕の外にあつては、只神の心臓に於ける彼自身の生誕を理解するのみであるからである。然し凡て七つの靈は同時には神の全き心臓を理解する。(「人間に於ても又同様である。然し人間と云ふのはそれを神の似姿として、即ち精神_{II}靈 (Tralen II Spirit) に於て、即ち精神の烈しい火の様な本質に於てはなくて、神の似姿の現はれてゐる光の本質に於て、理解せよ」)。

然し靈の内在的生誕、そこに於ては一つの靈は常に他の靈を産むが、こゝでは各々の靈は凡ての七つの靈を理解する、けれども只生命の上昇する電光の中に於てのみである。

心臓は、然しそれが産れる時は特種なもの、即ち特種な人格ではあるが、未だ彼から分離してはゐない。然し靈は彼等の最初の生誕に於て、他のものに變ずることは出来ない。同様に第二のものも、靈の湧出、結末である第三のものに變ずることは出来ず、却つて各々の生誕はそれ自身の座に止つてゐる。しかし凡ての生誕は、全體では只一つの神である。

然しルチファの體は自然、即ち最も外なる生誕から造られたのであるから、彼が最内、最深までも上昇しやうとしたのは全く不正であつた。これ彼が神聖なる權利 (Jure divino) によつて爲し得た事ではなく、却つて只本源靈が最も鋭い透徹と感染とに置かれんが爲めに、自ら上昇し點火しなければならなかつたのである。

私は思ふ、汝美しき魔術者よ、汝は詐つて自ら變態し、又人々をして、彼等が汝自らあつたと同じ様な偉大な神となることの出来る爲めに、彼等に汝の魔術を教へることは出来やう。汝、盲目、傲慢なる魔術者よ。こゝに汝の術がある、即ち、汝は汝の體の元素を、汝の魔法と、汝が其の目的に用ゆる性質の道具とによつて、變じたからである。しかも汝はその爲すところを正しいと思つてゐる。これが神の生誕に違反しないか、若ししないならばそれを證明せよ。

どうして汝は自ら他の様態に變ることが出来ると思ふか。汝は自ら惡魔を眞似て、しかもその術に於ては盲目である。そしてたとへ汝がそれをよく學んだとしても、汝は尙その中の目的を知らないのである。何故なれば、その中の心臓(中心目的)は、ルチファが自ら神たらんとした時になした様に、本源靈の變化と云ふ事にあるから。

諸君はそこで云ふ、どうして斯かることがあり得るか。

見よ、形體的本源靈が彼等の意志を魔術に置く時は、彼等が産み、そして星や元素の性質の中の隠れた中心に於て支配する生氣的靈は既に魔術者で、自ら魔法に變化したのである。

動物的肉體は、然し、斯く迅速にすることは出来ない。それは先づ、呪符呪文などに依つて、或は又それに適する或る道具によつて魅せられなければならない。それによつて生氣的靈は動物的肉體を見えないやうにし、それを本源靈の最初の意志があつたと同じ様態に變へてしまふのである。

動物的肉體は自ら變化し、或は他の生誕にはいることは出来ず、却つて、丁度獸や木や其の他元素の中に、彼等の肉體を活動させてゐるもの、様に、小さい薄い形にされる。

然し星の靈は自ら他の様態を装ふことが出来る。しかしそれは彼等の極 (Pole) の上なる自然の生誕が彼等に許す間丈けである。何故なれば、若し彼等が彼等の轉回、或は透徹によつて、他の本源靈が第一になる様に變化すれば、然らば彼等の術は下に落ち、彼等がその中に於て彼等の術を始めた處の、その最初の本源靈に於ける神性は終つてしまふから。

若しそれをもつと長く存続させやうとすれば、それは更に新らしく、今支配する様になつてゐる本源靈に従つてなされなければならない。或は惡魔は彼の生氣的靈を以て、形體の星的靈の中

になければならない、此の靈は彼を直ちに他のものに變へてしまふことが出来る。若しそうでなければ惡魔の術も終るのである。何故なれば、自然は靈が欲する様に、常に毎時間自ら瞞着せず却つて凡てのものは其の時々主位である靈に従つて起らなければならないから。

魔法を造つたものは、自然の中に於て主位である、その神の靈ではなく、却つてルチファが彼の傲慢によつて點火した、彼の永遠の王國である處のサルスタの暴性の中に於て造られたのである。

然しその靈の力が鎮まる時は、點火された火も魔術者に何等の役に立つことは出来ない。何故なれば、自然の中の怒の火も、今の(地上の)時に於ては、惡魔自身の力の家ではないから。これ愛が怒の火の中心に隠され、そしてルチファは彼の天使と共に、外なる怒の火の中に、神の審判の時まで捕へられてゐるからである。その時彼は怒の火を愛から分離されて、彼の永遠の浴場として所有し、かくて、疑ひもなく、彼の魔術の頭をその中で洗ふであらう。

私はこれを只、諸君が、魔術とはどんな根據を持つてゐるものであるかを知る爲めの警告として、諸君に示すのみで、私が異教の魔術を書き記さうと欲するからではない。私は又それを學んだこともなく、只私が肉體に於ては理解することの出来ない魔法を、生氣的靈が見るのである。

然しそれが、神の生誕の愛と温情とに全く反し、神の愛に於ける敵意であり、切迫した必要もなくして人間を敗壞するものであるのを見て、靈は魔術師、神の秩序の變化者に對して、永遠の焦燥の場所として、自然の怒の浴湯を分ち與へやうとなる。そこで彼等は彼等の新らしい神性を示すことが出来るであらう。

怒の火の點火に就いて

扱、王ルチファが凡ての彼の天使と共に點火した時、怒の火は忽ち形體の中に燃え上つた。そして生氣的靈に於ける恵みある光を消し、狂暴な惡魔の靈となつた、凡て本源靈の點火と意志とに従つて。

此の生氣的（精神的）靈は自然に於ける神性と結合してゐて、恰も一つの物であるかの様にそれと共に作用することが出来た。然るに今や、惡魔の形體から出て、恰も凡ての物を殺し、盗み、それを彼の力のもとに置かうとする殺戮者、盜賊の様に、神の自然の中へ刺し入つた。そして自然に於ける凡ての七つの靈を點火した。夫故最早鹹い、苦い、火の様な、又音をたて、燃える爆發と怒號とより外に何物もなくなつた。

然し諸君は惡魔が神性を斯様に強く征服したのであると思つてはならない。否、彼は此の事が必要ならば、永遠に靜かに隠れてゐた處の神の怒を點火し、そして神のサルニタを殺戮の窟としたのである。吾々が火を藁につければ藁は燃えたと同様である。神は此の爲めに惡魔となつたのではない。

又自然の中に於ける神の怒の火は心臟の最深の核心、即ち神の子までは達しない、靈の隠れた神聖までは尙更達しないで、只第七の靈が産れる六つ靈の生誕の處に達するのみである。

何故なれば、此の場所即ち此の生誕で王ルチファは創造され、彼の支配はこれより深くは及ばないから。若し彼が愛の中に止まつてゐたならば、彼の生氣的靈は神の心臟の中心まで達したであらう。これ愛は全神性を貫徹するからである。

然るに彼の愛が消えた時、彼の生氣的靈は最早神の心臟に達することが出来ず、彼の企は無益であつた。そして却つて自然、即ち神の七つの本源靈の中に於て暴れ狂つた。

然し凡て七つの靈の力は此の本源靈の中にあるから、それは凡て七つは怒の火に點火された。然しこれ單に外的、感覺的作用に於てある。何故なれば、惡魔は心臟に接觸することが出来ない様に、又本源靈の最内の生誕に接觸することが出来ない。何故なれば、彼の七つの靈の榮光は

既に點火の最初の電光の中に於て殺され、そして直ちに生氣の靈の最初の現出に於て捕へられたから。

此の時に王ルチファは、自分の爲めに、地獄と永遠の滅亡とを造つたのである。それは今神の自然の最も外なる本源靈、即ち此の世界の最も外なる生誕の中にある。

然し、自然が斯く怖ろしく點火した時に、喜の家から悲の家が生じた。何故なれば、鹹い性質は彼自身の家の中で點火し、恰も冷たく堅い冬の様に、全く堅く、冷たく、暗い本質となつたから。彼は今サルニタを引き寄せ、それを乾かして、石の様に堅く冷たく鋭いものとし、熱はその中に捕へられて結集され、そして堅く、冷たく暗黒の本質となつた。

此の事が起つた時に、最も外なる生誕に於ける自然の光は消え、凡ては全々暗黒となり、敗壞した。水は全々冷たく厚くなり、處々の間隙などに滯つた。これ地上に於ける元素として水の起源である。

世界の出来る以前には、水は全く、空氣の様に薄く、且つ生命がそこに生れた。此の水が今死物となり敗壞して、轉動し流動してゐるのである。

生命の電光の中から昇つた恵み深き愛から、狂暴な苦い毒、眞の殺戮の窟、死の刺が生じた。

音からは石の堅い叩き、苦難の家が生じた。

略言すれば、王ルチファの全領域、最も外なる生誕に於ける凡てのものは、全く暗黒な惱みの本質となつた。

然し、諸君は、自然がその最も深い根底まで、斯く敗壞し點火されたと思つてはならない。それは只最も外なる生誕に於てのみである。七つの本源靈が生れる内部に於ては、然し彼自身の正義を保持してゐた。何故なれば、點火した悪魔もそこに接することが出来なかつたから。若し悪魔が最も内なる生誕までも握むことが出来たならば、彼の王國の全領域は急ち點火されて燃える地獄となつたであらう。

然し彼は今や最も外なる生誕に於ける捕虜として、最後の日まで止まらなければならぬ。この日は最早迫り、しかも極めて近づいてゐる。

ルチファは然し彼の本源靈を最も内なる生誕に至るまで點火した。そして彼の本源靈は今や、神の永遠の敵なる悪魔の生氣的靈を産む。

夫故、神が自然に於けるその最も外なる生誕に於て怒つた時に、彼が斯く怒つて點火したのは彼の豫定した意志ではない。又彼がこれをなしたのでもなく、却つて彼はサルニタを結集し、こ

れによつて悪魔に永遠の住家を造つたのである。

何故なれば、彼は神から天使の他の王國につき落されることは出来ない、却つて彼には或る場所がその住家として残らなければならないから。神は又彼に點火されたサルニタを直ちにその永遠の住家として與へたのではない。何故なれば靈の内の生誕は尙その内に隠れてゐたから。神はこれを以て他の事をしやうと考へてゐた。夫故王ルチファは、同じサルニタから他の天使の群が彼のかほりに出来るまで、囚人として止まらなければならなかつた。この群は即ち人間である。

扱汝等ルチファの辯護士よ、來つて汝等の主が自然の中に怒の火を點火した事が果して正しいかどうかを答辯せよ。若しこれが出来なければ、彼及び眞理に反する汝等の詐りも彼と共に永遠に燃えなければならぬ。

これが罪の初、及び神の永遠の敵意の七つの種類或は様態である。扱ルチファが彼の形體的統治の中に自ら産み、その爲めに彼の位置からつき出され、最も怖ろしい悪魔となつた處の、彼の四つの新らしい子について簡単に記述する。

最初の子傲慢に就いて

扱問ふであらう、何が一體ルチファを神以上にならうと企てる様に誘つたかと。

諸君は此處で知らなければならぬ、彼は彼以外に何等傲慢に陥る衝動を持たず、これに誘つたものは實に彼自身の美であると云ふ事を。即ち、彼は、自分が天に於ける最も美しい君主であることを發見した時に、神性の親しむべき働きと生産とを輕蔑し、そして彼の君主的の力を以て全神性を支配し、凡てのものは彼の前に頭を下げなければならぬと考へた。

彼が然しこれを爲し得ないのを發見した時に、他の方法で之れを果たそうとして自ら點火した。其處で光の子は暗黒の子となつた。これ彼が自ら甘い水の力を食ひ盡して酸い惡臭としたからである。

他の子貪慾に就いて

他の意志は貪慾である。彼は傲慢から産れた。何故なれば、彼は唯一の神として凡て他の天使の王國を支配しやうと欲したから。彼の前に凡ては頭を下げなければならぬ。そして彼は彼の力で凡てを造らうと欲した。これに誘つたものは又彼の美しい形態である、これが爲め彼は凡ての物を獨りて持ちたいと考へたのである。

此の傲慢と貪慾とを今日の世界は鏡にうつし、如何にそれが神の敵であるかを反省すべきである。そして又これによつて彼等は悪魔に墜落し、そこで彼等の咽喉を、永遠に奪略し、貪り食ふ爲めに開かなければならないが、しかし地獄の殘忍以外に何物も無い。

第三の子嫉妬に就いて

此の子は今の世の眞の痛風病 (Podagra) である。何故なれば、彼はその起源を傲慢と貪慾との電光の中に有し、刺戟する苦い膽汁の様に、生命の根に立つてゐるから。

此の靈は實に傲慢が自ら、汝は美しく力強いと考へたのに初まる。貪慾も又凡ては彼のものではないと考へた。そして嫉妬は凡て汝に従はぬものは刺し殺さなければならぬと考へた。かくて彼は天使の他の門を刺した。然し全く無益であつた。何故なれば、彼の力は彼が造られた位置以上に少しも及ばなかつたから。

第四の子忿怒に就いて

此の子は燃えつゝある眞の地獄の火で、その起源を又傲慢から得てゐる。何故なれば、ルチフ

アは彼の惡逆の嫉妬を以て、彼の傲慢と貪慾とに満足を與へ得なかつた時に、彼自身の中に怒の火を點火し、それを以て恰も狂暴な獅子の様に、神の自然の中に咆哮したから。こゝから神の怒と凡ての害惡とが生じた。✓

これについては極めて多くの事を記さなければならないが、然し諸君は、創造を記す際もつと明瞭に知るであらう。何故なれば、そこには生ける證據が充分あつて、何人もそうでないと疑ふことを許されないから。

斯の如く王ルチフアは罪の初、死の刺、神の怒の點火、凡ての惡の初、此の世界の敗滅である。苟も惡の生ずる處彼はその最初の原因である。

彼は又殺戮者、詐の父、地獄の創設者、凡ての善の破壊者、神及び凡ての善い天使、人間の永遠の敵である。私自身及び凡て救はれんことを欲する人々は、最惡の敵に對するものとして、彼と毎日毎時間争ひ戦はなければならない。

最後の罪の宣告

神は彼を永遠の敵として呪い、永遠の牢獄に宣告し、そして人は彼の沙漏^{ネドレイ}を目の前に見、又私には神の靈によつて彼の地獄の領域が啓はされたから、私は又彼を、凡て人間の神聖な精神と共に

に憎み呪ひ、そして私の葡萄園を時々破壊した私の永遠の敵と宣言する。

其の上私は凡て彼の辯護者、幫助者を拒絶する。そして、神的恩恵を以て神の國を全く啓はし又神は愛及び柔和の神で悪を欲せず、人の敗滅を喜ばず、却つて、凡ての人の救はれんことを望むものなる事を證明しやうと思ふ（詩篇五ノ五、エゼキエル十八ノ二十三、三十三ノ十一、テモテ前書二ノ四）。同時に私は凡ての悪は悪魔より來り、彼に起源を持つてゐることを證明しやうと思ふ。

最後の戦と王ルチファ及び凡ての彼の天使の放逐とに就いて

扱、怖るべきルチファが、凡ての善の殘虐者、攪亂者、破壊者としてこれを破壊し點火し、凡ての物を彼の配下にしやうとした時に、凡ての天の群勢は彼に反抗し、彼も又凡てのものに反抗した。かく凡てのものは互に怖ろしく對抗して闘争が始まつた。そして太公ミカエルはその群勢を以て彼と戦ひ、悪魔はその群勢を以て勝つことが出來ず、敗者として彼の位置から放逐された（ヨハネ黙示録十二）。

扱或るものは問ふであらう、それは一體どんな戦であつたか、武器もなく、どうして互に戦へ

たか。

此の隠れた秘密は只、毎日毎時間悪魔と戦はなければならない、靈が知るのみである。外的肉體はそれを理解することが出來ない。又人間に於ける星^(二)的靈もそれを理解することが出來ない。否人間には、若しその生氣的靈が自然の中の最も内なる生誕、中心―そこで神の光が悪魔の國に對せられてゐる處、即ち此の世界の自然の第三^(三)の生誕―に於て作用するでなければ、全く理解されない。

彼が此の位置に於て神と一致し、作用する時は、生氣的靈は光を星的靈に持ち來す。何故なれば生氣的靈は此の位置に於て常に悪魔と戦はなければならないから。これ人間の最も外なる生誕が悪魔の座であるから、こゝに彼は彼の力を持つてゐるからである。此の座は敗壞殺戮の牢獄、惱の家で、悪魔はそこで死の刺を研ぎ、彼の生氣的靈を通して人間の心臓の最も外なる生誕に達する。

然し星的靈が、神の光の中に作用する生氣的靈に照らされる時は、彼は非常に熱心になつて光を求め、これに反して、人間の最も外なる生誕を支配する悪魔の生氣的靈は非常に怖ろしく、怒り且つ反逆的となる。

そして其の時人間の中に、天に於てミカエルとルチファとの間に昇つた様に、戦の火が昇る。憐れな靈は押し潰され、車裂きにされなければならない。

若し彼が（靈）勝てば彼は彼の光と認識とをその貫徹を以て、人間の最も外なる生誕にまで持つて行く。何故なれば、彼がこゝに星的靈と呼ぶ處の自然の七つの靈まで、力を以て押し貫き、理性の力を以て支配するから。

此の時始めて人間は、悪魔は何であるか、如何に彼は彼に敵對するか、如何に彼の力は大きいかを認識する。又如何に彼は毎日毎時間彼と隠れて戦はなければならないかをも知る。

此の戦なくして人間の理性、或は外的生誕はこれを理解することが出来ない。何故なれば、人間に於ける第三即ち最も外なる生誕、即ち、人間自身がその最初の慾の墮落に依つて造つた肉的生誕は、悪魔の奪掠の城砦、住家で、其處で悪魔は恰も城砦の中にある様に精神と戦ひ、精神に多くの強い打撃を與へるから。

此の肉の生誕は精神の住家ではなく、却つて、精神は戦ひつゝ彼の光を以て神的光の中に進入り、そして悪魔の殺戮に對して戦ふのである。これに對して悪魔は彼の毒を以て、精神を産出する處の七つの本源靈を射て、それを敗滅し、點火し、全形體を彼の所有としやうとする。

斯くの如く精神は、彼の光と認識とを人間の心意に持ち來たそうとするには、非常に烈しく戦ひ争はなければならない。しかも只一つの狭い通路を有するのみである。彼は時々悪魔の爲めに地に打ち倒される。しかし彼は戦場に於ける騎士の如く堪えなければならない。若し彼が勝てば彼は悪魔を征服するが、然し悪魔が勝てば彼の精神は捕へられてしまふ。

然し肉の生誕は精神固有の家ではなく、又悪魔のやうに、それを世襲的に所有することが出来ないから、戦は肉の家の續く限り續く。然し若し肉の家が崩壊して、精神はその家に於て征服されず、又捕へられずに、自由であるならば、その時こそ戦は終り、悪魔は永遠に靈から離れなければならない。

夫故此れを理解することは極めて困難な項目である。否此の戦の經驗に依るでなければ全く理解せられない。たとへ私がこれについて多くの書物を記くとも、諸君の靈がかゝる生誕の中に立ち、諸君自身の中に認識が産れないならば、諸君は何等それを理解することは出来ない。諸君はそれを會得することも、信することも出来ないであらう。

然し、若し諸君がこれを理解するならば、諸君は又天使が悪魔と爲した戦をも理解するであらう。何故なれば、天使は悪魔と同じく肉體をも四肢をも有しないから。彼等の形體的な生誕は只七

つの本源靈の中にあるが、然し天使に於ける生氣的生誕は神と作用してゐる。惡魔に於てはそうでない。

夫故諸君は知らなければならぬ、天使は、彼がその中であつて神と作用する處の生氣的生誕によつて、神の力と靈との中に於て、點火した惡魔と戦ひ、彼等を神の光から放逐して穴の中へ追ひ込めたのである、即ち、牢獄に比すべき狭い領域——それは地の中、地の上、及び地的生誕の女神なる月にまで達する空間の場所——に追ひ込めたのである。

これが最後の審判の日に至るまでの彼等の領域の廣さである。その時には彼等は、今日地球のある場所に於て彼等の家を得（「地球、これ光の第二の原理及び源に達しないから暗黒の最も外なる生誕の中にある」）、そしてそれは燃える地獄と呼ばれる。

主ルチファよ、これを期待せよ、そして此の豫言を身に受けて確信せよ。何故なれば、汝は、汝自身が造つた最も外なる生誕に於て點火したサルニタを、汝の永遠の家として得るであらうから。然し、今ある状態に於てははない。否その時凡てのものは怒の火の中に於て分離し、暑い、暑い、冷たい、粗い、堅い、苦い、臭い荒地が汝の永遠の隠所^{カクレガ}として與へられるであらう。

其處で汝は永遠な、全能な神となるであらう、丁度囚人が深い牢獄の中に於てそうであるやう

に。其處では汝は神の光を永遠に見ることも出來ず、又それに達することも出來ない、そして神の點火した嚴しい怒が汝の境界で、そこから汝は決して出ることが出來ないであらう。

第十七章

敗壞せる自然の、嘆くべく、痛ましき状態、及び、神の神聖なる
統御のかはりとしての四元素の起源に就いて

神は永遠、全能な支配者で、何人も彼に對抗することは出来ないが、然し自然はその點火に依つて、(神の)怒の目以前には決して無かつた、實に驚くべき不思議な統御を得るやうになつた。何故なれば、六つの本源靈は第七の自然 \parallel 靈を、怒の目以前には、此の世界の位置に於て、全く穩和に愛すべき状態に産んだから。それは丁度今日天に於てあると同じく、その中には全く何等の怒の火花も昇らなかつた。

のみならずその中に於て凡てのものは全く光明で、何等他の光を要せず、却つて神の心臓の源泉が凡てを照らし、又凡てのもの、中の光で、その光は到る處消し難く障害なく見はれてゐた。これ自然は全く稀薄 (dimin) で、凡てのものは只力に於てのみ存在し、又全く愛すべき性質 (Temperanz) であつたからである。

然るに自然に於て傲慢な悪魔との戦が始まるや否や、ルチファの領域—その場所は此の世界に當る—に於ける第七の自然 \parallel 靈の中では、凡ての物は異つた形態と作用とを得た。何故なれば、自然は二重の源泉を得、そして自然に於ける最も外なる生誕は怒の火に點火されたから、吾々はこの火を神の怒或は燃える地獄と云ふ。

これを理解する爲めには最も内部の知覺 (Sinn) が必要である。只光が心臓の中に産れる、その場所のみこれを理解することが出来る、外なる人間はこれを理解し得ない。

見よ、ルチファが彼の群勢を以て、神の自然の中に怒の火を喚び起し、神は自然に於けるルチファの場所に於て怒つた時に、自然の最も外なる生誕は他の性質、全く狂暴な、鹹い、冷たい、暑い、苦い又酸い性質を得た。

以前自然の中に於て穩和に作用した活動の靈は、その最も外なる生誕に於て全く膨大になり、恐しくなつた。今日人はこれをその膨大の故に風或は元素空氣と呼んでゐる。

七つの靈がその最も外なる生誕に於て點火した時、彼は斯の如き激動の靈を産んだのである。同様に又、怒の目以前には全く薄く、感知し得られなかつた甘い水も、厚く膨大し、鹹い性質は全然鋭く、冷たい火の様に (Kaltfeurig) なつた。これ鹽の様に厳しく集結したからである。

今日に於ても尙地から發見される鹽水、或は鹽は、鹹い性質の最初の點火にその起源、傳來を有してゐる。石及び土地も又そこから起源を有してゐる。

即ち、鹹い性質はサルニタを非常に烈しく堅く引き集め、それを乾かしたから、苦い土が生じた。石は然し其の時音の力の中にあつたサルニタから生じた。

何故なれば、丁度點火の時に、自然の生誕の活動、争闘、上昇があつたと同じ様に、質料も又結集されたから。

扨問ふであらう、どうして感知し得られる子が感知し得られない母から産れたのであるかと。これについての例は、どうして土や石が非感知性から生じたか、と云ふことである。

見よ、天と地との間の深みも吾々に感知し得られない。然し、元素の性質は屢々蟋蟀、蠅、蝙蝠の如き生きた感知し得る肉體をその中に産む。これ此等の性質の烈しい結集 (Zusammenziehungen) に依るので、この結集されたサルニタの中に突然生命が生れるのである。例へば、熱が鹹い性質を點火する時は、生命が生ずる。又苦い性質が動搖すれば、これ生命の起源である。

同じ様な状態に於て土と石とは生じたのである。即ち、自然に於けるサルニタが點火した時に

凡てのものは全く粗く、厚く、暗く、恰も厚い暗い雲霧のやうであつた。それを鹹い性質がその冷を以て乾燥した。然るに、最も外なる生誕に於ける光は消えたから、熱は感知性に於て捕へられ、そして最早その生命を産むことは出来なかつたのである。

そこから死が自然の中に到來した。それを自然或は敗壞した地は最早助けることが出来ない。そして他の光の創造が續いて起らなければならぬ。でなければ、地は永遠に離れる事の出来ない死であつたであらう。然るに地は今や、創られた光の力及び點火の中に於てその實を産む。

扨或る者は問ふであらう、一體此の二重の生誕はどう云ふ様態であるか。

神は怒の火の點火の爲めに此の地球の場所に於ては消滅し、それで怒の火以外何物もなくなつたのであるか、或は唯一の神から二重の神が生じたのであるかと。

答。これを諸君は諸君自身の身體に於て最もよく理解し、會得することが出来る。諸君の身體は、アダムの最初の墮落によつて、その(身體の)凡ての生誕、才、意志と共に、丁度世界の此の場所と同じ様な家となつたのである。

第一に諸君は動物的肉體を持つてゐる。これ林檎を噛んだ慾によつて生じたものである。何故なれば、それは死の家であるから。

アダムが地の敗壞したサルニタから、即ち、造物主が敗壞した地から引き抜いた種或はマツセ(三)から、造られた時に、彼は初めは斯くの如き肉體ではなかつた。でなければ、彼は可死的に造られたと云はなければならない。そうではなく、彼は天使の様な力の體 (Kraftlein) を持ち、その中に永遠に存在することが出来た。そして彼の墮落前、主が地を咒つた前に彼の爲めに生長した處の天使的果實を食つてゐたのである。

然しアダムが造られた處の種或はマツセは、惡魔の敗壞した害毒を受けたから、アダムも又彼の母、即ち、敗壞した地の實を食べやうと欲した。アダムの靈が敗壞した地のやうな實を味つたから、自然も又彼に敗壞した地のやうな樹を造つた。

アダムに此の慾望が起つたのを惡魔が見た時に、彼はアダムに於けるサルニタを勇敢に刺した。そしてアダムが造られた處のサルニタを更に烈しく毒害した。

かくて遂に造物主が彼の爲めに女を造る時が來た。彼女は罪を遂行して悪い實を食ふに至つた。若しアダムが、女が彼から造られた前に、樹の實を食つたならば、更に悪かつたであらう。然し此の事は更に高く深い記述を要し、又多くの餘白をも要するから、アダムの墮落の所に於てこれを探せ、そこで諸君は充分論述されて居るのを見るであらう。私は今前の比喩に立ち歸る。

扱、アダムが善惡の樹の實を食つた時、彼は忽ち斯様な肉體を得るに至つた。樹の實は今日尙地上の凡ての實の様に、敗壞した感覺的のものであつた。同様な肉體的、感覺的形體をアダムとイブとは又取つたのである。

然し肉は人間の凡てにはない。何故なれば、此の肉は神性を理會し又は會得し得ないから。若しこれが出来たならば、肉は可死的ではなかつたであらう。クリストは言ふた (ヨハネ傳六ノ六十)。「生命を與ふる者は靈なり、肉は益なし」と。

此の肉體は天國を嗣ぐことは出来ない。それは只地に蒔かれる種に過ぎないから、それから再び墮落以前のやうな非感覺的な體が生ずるであらう。靈は然し永遠の生命で神と作用し、又自然に於ける内的神性を理解する。

丁度、人間は、その外的本質に於ては、敗壞し、彼の肉體的生誕に於ては神の怒の中にあり、又神の敵であり、しかも彼は只一人の人間で二人ではない、これに反して、彼の靈的生誕に於ては彼は神の子、世嗣で、神と共に支配し、生息し、そして神の最も内なる生誕と作用すると同様に此の世界の場所も又同じ様になつた。

此の世界の全自然及びその中にある凡ての物の外的感知性は、凡て神の怒の火の中にある。何

故なれば、これ自然の點火によつてかくなり、主ルチファは彼の天使と共に、此の怒の火の中に

354

立つてゐる外的生誕の中に今や彼の住家を有するから。

然し神性は外的生誕の爲めに、恰も此の世界に二つの物があるかの様に分離しはしない。若し
そうならば、人間は何等の希望もなく、又此の世界は神の力と愛との中になかつたであらう。否
神性は外的生誕の中に隠れてゐる。そして簸ひ杓子を手につけて、いつかは殻と點火したサルニ
タとを投げ出すであらう。そして彼の内的生誕をそれから引き抜いて、それを主ルチファ及び彼
の群勢の永遠の家として與へるであらう。

同時に主ルチファは外的生誕、即ち此の世界の自然、點火された怒の火の中に捕へられなけれ
ばならない。彼はその中であつて大なる力を有し、怒の火の中にある彼の生氣的靈を以て凡て
の被造物の心臓まで達することが出来る。

夫故人間の精神は常に悪魔と争ひ戦はなければならぬ。何故なれば、悪魔は常に樂園の酸い
林檎を示して（「これ精神の毒害される狂惡なる悪性の源である」）、精神を彼の捕虜とする爲めに
それを食へと云ふから。

若しそれが彼に成功しなかつたならば、彼は精神に多くの嚴しい打撃を與へる。そして彼は常

に此の世の十字架と苦痛との中になければならぬ。彼は貴い芥子種を蔽つて人間自らそれを
知らないやうにする。そこで世間は、彼はかく神から苦しめられ、打ち碎かれると想像する。そ
の爲めに悪魔の國は常に隠され、發見されないでゐる。

然し待て、諸君も又私に多くの打撃を與へた。私は諸君をよく知つた。私は茲で諸君の戸を少
しあけて、諸君が誰であるかを他のものにも見させやうと思ふ。

第十八章

天地の創造及び第一日に就いて

此の事に就いてモーゼは彼の第一の書（創世記）に於て、恰も其處に現在し、自らそれを見たかの様に記してゐる。疑もなく彼はそれを祖先等の文書から得たのであらうが、然し、彼自身も又、彼の靈に於て祖先等が認識したよりも多くの事を認識したであらう。

然し、神が天地を創造した時は未だそれを見た人間は一人もなかつた。夫故アダムが彼の墮落以前に、靈に於てそれを見た結論する事が出来る。何故なれば、彼は其の當時に尙深い神の認識の中にあつたから。然るに彼が墮落して最も外なる生誕（即ち肉體）に置かれた時、彼は最早それを認識することが出来ず、只暗い隠れた歴史として記憶し、そしてそれを彼の子孫迄譲り渡したのである。

夫故洪水以前の最初の世も、吾々が今住む最後の世と同じく、神の性質と生誕とに就いては多くを知らなかつたと云ふ事は明かである。これ、最も外なる、肉的生誕は神性を決して理解し、

或は會得し得ないからである。若しそうでなかつたならば、何かもつと多くの事が此れに就いて書かれてゐたであらう。

然し私には、神の恩寵によつて、此の高い題目に就いての大きな秘密が、内的人間——これが神性と作用し合ふ——に於ける私の靈に啓示せられたから、私はこれを私の天賦に應じて書き記さなければならぬ。そして私は讀者に、著者の愚直に對して怒らない様に心より嘆願しやうと思ふ。

私はこれを決して名譽心の爲めにするのではない。否却つて謙遜なる教訓を以て、讀者に神の事業がよりよく知られ、悪魔の國が顯はされ、今の世が悪魔のあらゆる兇暴と罪惡との中にある事を示し、又それによつて今の世が、如何なる力と衝動との中に生息し、如何なる宿舎に客となつてゐるかを見させんが爲めである。

私は果して私の托せられた金を殖やす事が出来て、かの主の葡萄畑に遊んでゐて、彼の報酬を働いて得やうとしなかつた怠惰な僕のやうに、空しくそれを再び神に返すやうな事が無いであらうか。

然し恐らく悪魔は嘲笑者、輕侮者を喚び起すであらう。そして彼等は云ふであらう、私が斯く